

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和7（2025）年度 年次報告書

2026年3月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」事業とその他の資金による令和7（2025）年度のグローバル協力センターの活動実績を取りまとめたものです。

グローバル協力センターは、国際協力・平和構築を中心とした国際的な課題に関する教育研究と、これらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を2つの柱としています。この2つの柱のもと、開発途上国や国際協力の現場から学ぶ授業、大学院生の海外調査支援、各種セミナー・公開講演会、幼児教育分野の人材育成のための研修等に取り組むとともに、「共に生きる」スタディグループを通じ、学生による自主活動の支援なども行ってきました。

当センターは、国際社会において議論・実践が進む「持続可能な開発のための2030アジェンダ・持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」を重視し、平成29（2017）年度から公開講座（SDGsセミナー）を開催しています。今年度も、紛争地域などでの取材、人間の安全保障、開発途上国の衛生環境・栄養・学校教育改善、ジェンダー、グローバルヘルス、多文化共生等、幅広いテーマでセミナーを計8回開催しました。SDGsセミナーに加え、南アジアに位置するブータン王国の開発の現状と課題、そのあり方を考える地域研究型セミナー「ブータン連続セミナー」を計15回開催し、多くの参加者を得ました。さらに、開発途上国（カンボジア、ブータン）へのスタディツアー、海外協力隊派遣前訓練所を擁する長野県駒ヶ根市への「五女子大学合同国内スタディツアー」の実施や、JICA（独立行政法人国際協力機構）の委託事業である課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育」での開発途上国人材の来日を実現することができました。

学内外の関係者の皆様のご支援・ご協力により、上記のように各種事業・活動を実施し、相応の成果を上げることができました。改めて心よりお礼申し上げる次第です。今後も、これまでの事業・活動で得た平和構築と途上国の社会経済開発のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用し、更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたいと、引き続きのご支援をよろしく願いいたします。

2026年3月

国立大学法人 お茶の水女子大学
グローバル協力センター長 由良 敬

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和7（2025）年度 年次報告書 目次

I. 事業の概要.....	1
II. 令和7（2025）年度の活動の概要.....	5
1. 活動の概要.....	7
2. 各活動の概要.....	8
2.1 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成.....	8
2.2 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）.....	9
III. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成.....	11
1. グローバル協力センター教員担当科目.....	13
1.1 平和と共生演習.....	13
1.2 文理融合リベラルアーツ演習「国際協力とSDGs」.....	13
1.3 国際協力特論.....	14
1.4 NPO入門.....	15
1.5 NPOインターンシップ（実習）.....	15
1.6 国際共生社会論実習・国際共生社会論フィールド実習.....	15
2. グローバル協力センター主催セミナー.....	24
2.1 持続可能な開発目標（SDGs）セミナー.....	24
2.2 2025年度ブータン連続セミナー.....	37
2.3 「映像で学ぶ」SDGs映画鑑賞会.....	63
3.1 実施概要.....	65
3.2 今年度の募集と選考結果.....	65
3.3 調査報告書要約.....	67
4. 大学間連携イベント・活動.....	69
4.1 五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー.....	69

4.2 国際協力・開発途上国・SDGsに関する単位互換（津田塾大学・奈良女子大学）	70
5. その他の国際協力関連活動.....	72
5.1 海外・日本国内各機関との連携	72
5.2 学生の国際協力活動支援.....	74
IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）	83
1. 乳幼児ケアと就学前教育研修（独立行政法人国際協力機構（JICA）課題別研修）	85
1.1 概要	85
1.2 研修背景	85
1.3 2025年度の実施内容	85
2. アフガニスタン Mosaic for Afghan Women モザイク作品寄贈	92
V. その他.....	93
1. グローバル協力センター図書室運営	95
2. 情報発信（ウェブでの発信、パンフレット更新など）	96
2.1 ホームページによる情報発信.....	96
2.2 メーリングリストによる情報発信.....	96
2.3 大学メールマガジン、公式 SNS 等による情報発信	96
2.4 パンフレットによる情報発信.....	96
VI. 資料.....	99
1. 各種イベント・案内のポスター.....	101
2. 「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」採択者報告書（本文3.3参照）	109

I. 事業の概要

I. 事業の概要

【趣旨】

グローバル協力センターは、国際協力を通じて女子教育を促進するための活動拠点として、2003年7月に「開発途上国女子教育協力センター」として設置された。2008年からは、「グローバル協力センター」に改組され、国際協力、平和構築に関するお茶の水女子大学の教育、研究、国際貢献を促進している。また、2017年からは、「持続可能な開発のための2030年アジェンダ・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）を巡って、議論を深める機会を提供するとともに、大学の国際協力に取り組んでいる。

【沿革】

グローバル協力センターの前身である「開発途上国女子教育協力センター」は、女子教育協力、幼児教育協力の2つの柱を中心とした本学の国際協力活動の拠点として、2003年7月に設置された。女子教育協力については、日本政府のアフガニスタン復興支援の一環として、本学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学が連携し、2002年に締結された「五女子大学コンソーシアム」が実施するアフガニスタン女性教員研修等の事業の実施（同コンソーシアムは、2006年より支援対象を開発途上国の女子教育に広げている）、また幼児教育協力では、研修受入等により、幼児教育に関する日本の知見・経験を開発途上国各国に伝えてきた。

2008年に「グローバル協力センター」に改組した後は、グローバル化する国際社会の多様なニーズに応え、本学の知見を活かした様々な国際協力、平和構築に関する教育、調査研究、情報発信を行っている。

【主な取り組み】

（1）国際的な課題に関する教育・研究と女性リーダーの育成

開発途上国の社会経済、国際協力、NPO等に関する講義や演習・スタディツアーの実施、本学大学院生（博士前期・後期課程）の海外調査支援、学生自主活動の支援、シンポジウム・講演会・セミナーの開催等。

（2）開発途上国の女子教育・乳幼児教育に関する支援

JICA（独立行政法人国際協力機構）の委託を受けた幼児教育分野の人材育成のための研修の実施、開発途上国の女子教育支援のための五女子大学コンソーシアムの締結、本学卒業生故野々山恵美子様の遺贈により設立された基金を原資とする女子教育支援等の実施。

（3）情報共有・ネットワーキング

「共に生きる」スタディグループにおいて、スタディグループメンバーの学生による自主活動の支援、メーリングリストによる国際協力や平和構築に関する学内外の講演会、セミナー、イベント等の各種情報提供。

【グローバル協力センター 2025年度構成員】

職名	氏名
センター長／教授	由良 敬
副センター長／特任准教授	宮原 千絵
講師	平山 雄大
センター員／教授	須藤 紀子
センター員／教授	浜野 隆
センター員／教授	森 義仁
センター員／准教授	荒木 美奈子
センター員／准教授	脇田 彩
センター員／講師	佐々木 元子
センター員／附属高等学校副校長	溝口 恵
センター員／附属小学校副校長	片山 守道
センター員／附属幼稚園副園長	高橋 陽子
アカデミック・アシスタント	駒田 千晶
センター員／客員研究員	小田 亜紀子

II. 令和 7（2025）年度の活動の概要

II. 令和 7（2025）年度の活動の概要

1. 活動の概要

グローバル協力センターは、国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を 2 つの柱としてきている。今年度は、その柱の 1 つ「女性リーダーの育成」に関わる主要事業である「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」（開発途上国スタディツアー）を実施した（海外実習は令和 7（2025）年 8 月、9 月に各 1 回実施）。また、2 つ目の柱に関わる事業のうち、JICA（独立行政法人国際協力機構）の委託事業である課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育」も、8 カ国の研修員の来日を得て令和 7（2025）年 11～12 月にかけて実施した。

本学は、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学および日本女子大学とともに「五女子大学コンソーシアム」を構成し、平成 14（2002）年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んでおり、現在はその支援対象を開発途上国・紛争国に広げている。今年度は、令和 4（2022）年度 11 月に支援 20 周年を記念し開催された「紛争地域の女子教育支援を通じた国際協力のあり方」シンポジウムを契機とし、令和 5（2023）年度より再開した「五女子大学コンソーシアム」の連絡協議会を引き続き開催した。連絡協議会では、「五女子大学コンソーシアム」の新たな連携活動・事業について様々な協議が行われ、昨年度と同様に「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」を実施した。

さらに、当センターは、国際社会において議論・実践が進む「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」を重視し、平成 29（2017）年度から公開講座（SDGs セミナー）を開催するとともに、SDGs に関連するイベントを SDGs 推進研究所とも連携しつつ行っている。今年度も、紛争地域などでの取材、人間の安全保障、開発途上国の衛生環境・栄養・学校教育改善、ジェンダー、グローバルヘルス、多文化共生等、幅広いテーマでセミナーを計 8 回開催した。SDGs セミナーに加え、南アジアに位置するブータン王国の開発の現状と課題、そのあり方を考える地域研究型セミナー「ブータン連続セミナー」を計 15 回開催し、多くの参加者を得た。

その他、センター教員による国際協力、開発途上国、SDGs に関連する授業の実施、本学大学院生による途上国研究、国際協力分野の海外調査の支援、JICA、長野県駒ヶ根市や同市で活動する国際協力関連団体など国内関係機関との連携活動、学生自主活動の支援など、冒頭の 2 つの柱に基づく多様な事業・活動を展開し、その内容をウェブサイトやメーリングリスト、SNS を通じ幅広く発信した。

2. 各活動の概要

2.1 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

- (1) 全学共通科目「平和と共生演習」において、SDGs の理解の深化、SDGs や平和・共生との関連性が高い「人間の安全保障」の考え方の紹介、JICA を中心とした開発途上国の SDGs 推進に向けた取組みや日本国内における多文化共生の実例を、講義・議論を通じて理解し、現場の視点で考える機会を提供した。
- (2) 文理融合リベラルアーツ (LA) 科目「国際協力と SDGs」において、SDGs の世界的な進捗状況を理解するため、特定国と SDGs 課題を組み合わせた分析を行い、合同発表会で発表することにより、履修生及び発表会参加者への SDGs 理解推進に貢献した。
- (3) グローバル文化学環設置科目「国際協力特論」において、講義や議論を通じ、開発途上国の社会経済の課題と国際協力について、具体例を紹介しつつ履修生の考察を深めた。また、開発途上国の現場で活躍する専門家等から直接話を聞く機会を積極的に設けた。
- (4) 全学共通科目「NPO 入門」において、NPO を通して現代の社会問題を知り、その解決の方向性を探った。NPO を巡る諸相を多角的に取り上げると同時に、NPO で活躍するゲスト講師からお話を伺う機会を設けた。また、現代の社会問題と対応策についてグループワークを行い、架空の NPO の事業計画に関する発表を行った。今年度は奈良女子大学の学生の履修があり、全面的にオンラインで開講した。
- (5) 文理融合リベラルアーツ (LA) 科目「生活世界の安全保障 23 NPO インターンシップ (実習)」において、学生が NPO の現状や役割、抱えている課題等を具体的に学ぶ機会を提供した。履修生は、一般社団法人全国農協観光協会、NPO 法人 POSSE、NPO 法人放課後 NPO アフタースクールにて実習を行った。
- (6) 全学共通科目「国際共生社会論実習」及び共通科目 (大学院博士前期課程)「国際共生社会論フィールド実習」において、履修生は①事前学習、②現地調査、③事後学習を通して、貧困、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深めた。現地調査は 8 月 22 日～29 日 (合計 8 日間、現地滞在 7 泊 8 日) にカンボジア、9 月 16 日～24 日 (合計 9 日間、現地滞在 7 泊 8 日) にブータンで行った。履修生は各自が設定した研究課題の遂行のため、関連機関への訪問や人々へのインタビューを実施した (今年度は「フィールド実習」履修生なし)。
- (7) 「持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー」を計 8 回 (第 48 回～第 55 回) 開催した。各回のテーマは、紛争地域などでの取材、人間の安全保障、開発途上国の衛生環境・栄養・学校教育改善、ジェンダー、グローバルヘルス、多文化共生等、多岐に渡った。
- (8) 「2025 年度ブータン連続セミナー」(全 15 回) を通じて、参加者とともにブータンの開発政策や国・地域の在りかたを考えた。毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、映像作品の紹介と視聴、発表者 (コメンテーター) からの解説、質疑応答という流れで実施した。
- (9) 途上国研究・国際協力分野海外調査支援では、「スリランカにおける住民の生活排水と環境水に関する意識調査」、「モンスーンアジアでの個別排水処理 (On-Site Sanitation) による微生物除去性能の評価～季節性や土壌特性との関連～」、「法整備や司法アクセスに

ついでにジェンダー平等是正：第70回国連女性の地位委員会における議論を中心に、「結婚適齢期」男性の結婚費用からみる中国農村の社会的再生産の危機」の4件の海外調査を採択・支援した。

- (10) 2024年9月、「五女子大学コンソーシアム」に基づく活動の一環として、長野県駒ヶ根市の協力を得て、「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」を同市で実施した。ツアーには本学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学および日本女子大学から各3名、計15名の学生が参加し、JICA海外協力隊派遣前訓練所の視察や、長く国際協力に市及び市民レベルで取り組んできた駒ヶ根市や関連団体の活動への参加、意見交換を通じて、学生がより具体的にどのように国際協力に関わっていくかを考える機会となった。
- (11) 「五女子大学コンソーシアム」の枠組みの中で津田塾大学と奈良女子大学との間で締結された国際協力・開発途上国・SDGsに関する単位互換覚書に基づき、学生の授業履修が行われた。津田塾大学から7名、奈良女子大学から6名が、特別聴講生として本学の科目を履修した。
- (12) アフガニスタン女子教育支援の目的で平成14(2002)年に調印され、その後対象を開発途上国の女子教育支援に広げ続けてきた「五女子大学コンソーシアム」(本学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学)の具体的な事業・活動を検討する機構である五女子大学コンソーシアム連絡協議会は、一昨年度の会議再開以降、今年度も5・10月に開催され、上記の「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」や単位互換という具体的な連携活動に結びついた。
- (13) 2025年8月、JICAの国内センターであるJICA東京(東京都渋谷区)より、夏期休暇期間に実施される特設インターンシッププログラムの提供があり、学内公募の結果、学部1年生・4年生の合計3名が参加した。
- (14) 国際協力に関心をもち活動する学生のグループである「共に生きる」スタディグループの説明会を実施するとともに、スタディグループメンバー学生の自主活動(STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部)を支援した。
- (15) 2025年11月に開催された徽音祭(大学祭)において、「国際共生社会論実習」履修生、「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」に参加した本学学生、JICA東京特設インターンシッププログラム参加学生等による活動の展示・発表を行った。

2.2 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業(教育・研究成果の国際社会への還元)

- (1) 2025年11月~12月、乳幼児の保護と教育の観点から国際的にニーズが高まっている幼児教育分野の人材育成のため、アフリカ・中東・アジア8カ国の行政官、大学教員等8名を対象に「乳幼児ケアと就学前教育」研修(JICA課題別研修)を対面で実施した。また、研修効果の測定のため、昨年度参加研修員のアクションプラン実施状況について4カ国4名を対象に調査を行った。

III. 国際的な課題に関する教育・ 研究、これらを通じた同課題に取り 組む女性リーダーの育成

III. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

1. グローバル協力センター教員担当科目

1.1 平和と共生演習

本科目では、日本が開発途上国の人々との共生を目指すにあたり、密接に関連する SDGs のゴール・ターゲットをいくつか取り上げ、それぞれについて基本的内容を示し、具体的な事業・取組みを独立行政法人国際協力機構 (JICA) の事業を中心に紹介した。また、多文化共生や、平和構築支援についても考え、自身の考えを發表し、互いに議論することを通じて、複眼的思考を養うこと、SDGs を自分ごととして捉え、自らアクションを起こす契機とすることを目指した。

【アクティブ・ラーニング・アワー (ALH) 概要①】

- テーマ: 「人間の安全保障と緒方貞子さんについて」(書籍・ウェブサイト講読、映像視聴・展示視察とディスカッション)
- 内容: 人間の安全保障に関する書籍・映像・展示のいずれかを選択し講読・視聴・視察後、内容と所感をスライドにまとめて提出・發表させ、授業内でディスカッションを実施。JICA 市ヶ谷の「緒方貞子メモリアルギャラリー」を希望者とともに訪問した。

【アクティブ・ラーニング・アワー (ALH) 概要②】

- テーマ: 「多文化共生」(書籍購読・展示視察・映像視聴とディスカッション)
- 内容: 多文化共生に関する書籍・映像のいずれかを選択し講読・視聴後、内容と所感をスライドにまとめて提出・發表させ、授業内でディスカッションを実施。JICA 横浜の「海外移住資料館」を希望者とともに訪問した。

【国際協力事業に従事する外部講師を招き、学内公開講座 SDGs セミナーとして実施】

※詳細は、「II. 2. 2.1 持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー」を参照。

- 第 48 回 SDGs セミナー「世界の栄養問題: 地球も人々も健康になる食事の実現に向けて」
- 第 50 回 SDGs セミナー「現場から考える多文化共生の今」

1.2 文理融合リベラルアーツ演習「国際協力と SDGs」

本科目では、SDGs の基本的内容、開発途上国の SDGs 達成のための取り組みや人間の安全保障の基本を理解したうえで、SDGs の達成度と課題を具体的なモニタリング指標を通じて分析・議論した。分析においては「保健・健康」「ジェンダー」「平和構築」「環境」の 4 グループに分かれ、分析対象国におけるそれぞれの分野の現状と課題を議論し發表スライドに取りまとめた。最終發表はリベラルアーツ演習「合同發表会」にてそれぞれのグループ代表者 1 名及びコース概要と全体の感想をそれぞれ 1 名が担当、計 6 名が發表し、他の履修生は同發表会に参加した。一連の分析過程において、SDGs の課題に加え、情報の収集方法、分析・まとめ方、情報の引用も含めたプレゼンテーションの作成技法等においても大きな学びがあった。

【アクティブ・ラーニング・アワー（ALH）概要①】

- テーマ：「人間の安全保障」（書籍・ウェブサイト講読、映像視聴・展示視察とディスカッション）
- 内容：人間の安全保障に関する書籍・映像・展示のいずれかを選択し講読・視聴・視察後、内容と所感をスライドにまとめて提出・発表させ、授業内でディスカッションを実施。

【アクティブ・ラーニング・アワー（ALH）概要②】

- テーマ：「SDGs と国際協力」（書籍・ウェブサイト講読、映像視聴・展示視察とディスカッション）
- 内容：指定された 4 テーマのうち履修生の関心のある SDGs テーマを選び、その内容と現状をまとめた。発表は分析グループごとに行った。

【国際協力事業に従事する外部講師を招き、学内公開講座 SDGs セミナーとして実施】

※詳細は、「II. 2. 2.1 持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」を参照。

- 第 49 回 SDGs セミナー「尊厳と SDGs：『誰も取り残されない社会』を目指して」

1.3 国際協力特論

本科目では、国際協力学の発展版として、前半は人間の安全保障を軸に「開発」の在り方を学んだ。具体的には、教育、ジェンダー、グローバルヘルス、平和構築の 4 つの分野の現状及び実際の事業についてその課題と成果を実務経験者から学ぶことによって、開発援助、国際協力に関する人間の安全保障の理解を深化させた。実務者による講演は「国際協力の現場を知る」連続セミナーとして開催した。後半は「国」の視点で、開発援助事業がどのように形成され、実施されるかを実務面から理解し、多くの関係者が複層的に関与・共創することによって、開発援助事業の実施や質の向上に貢献していることを学んだ。ALH 課題に自主的取り組んだうえで実務者の発表を聞いて報告をまとめる形を取ったため、理論と実務の関係性について履修生の理解が深まった。

【アクティブ・ラーニング・アワー（ALH）概要①】

- テーマ：「自分の関心のある SDGs 課題と人間の安全保障の関係について」（書籍・ウェブサイト講読、映像視聴・展示視察とディスカッション）
- 内容：JICA グローバルアジェンダや SDGs 関連サイト、JICA 市ヶ谷の「緒方貞子メモリアルギャラリー」訪問によって人間の安全保障への理解を深め、その後展開される実務者による各課題のセミナーを通じて、自身の関心のある課題と人間の安全保障の関係をまとめた。

【国際協力事業に従事する外部講師を招き、学内公開講座 SDGs セミナーとして実施】

※詳細は、「II. 2. 2.1 持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」を参照。

- 第 52 回 SDGs セミナー「国際協力の現場を知る－質の高い教育をみんなに」
- 第 53 回 SDGs セミナー「国際協力の現場を知る－ジェンダー平等と女性のエンパワメント」

に向けて」

- 第 54 回 SDGs セミナー「国際協力の現場を知るーグローバルヘルスと日本～パンデミックの脅威に世界と日本はどう立ち向かったか～」

1.4 NPO 入門

全学共通科目「NPO 入門」において、①NPO の活動理念や特徴を知り、その存在が社会に与えている影響を理解すること、②NPO の役割やその背景に潜む社会問題について、自らの考えを自分自身の言葉で述べるができるようになること、③NPO による社会問題解決の方法を、グループワーク（事業計画書の作成）を通して学び、提案力、行動力を身につけること、④授業で学び得た知識を、履修生自身の実践や社会貢献活動に繋げることを到達目標に、全 15 回の授業を行った。NPO の定義と全体像、海外と国内における NPO の位置づけ、NPO の行政・企業との協働等 NPO を巡る諸相を多角的に取り上げると同時に、ゲスト講師からお話を伺う機会を設けた。また、現代の社会問題と対応策についてグループワークを行い、架空の NPO の事業計画に関する発表を行った。

【ゲスト講師による講義 概要】

- テーマ：「中高生の居場所の価値を見つける」
- 日 時：2025 年 6 月 9 日（月）13:20～14:50
- 講 師：板敷悦生 氏（認定特定非営利活動法人カタリバ職員）
藤田星流 氏（認定特定非営利活動法人カタリバインターン）

- テーマ：「ちいさな声に耳をすます世界をー“よりそうとは何か”を問い続けるー」
- 日 時：2025 年 6 月 16 日（月）13:20～14:50
- 講 師：石川歩 氏（任意団体 comarch 理事／対話の場“あわいろ”主宰）

1.5 NPO インターンシップ（実習）

文理融合リベラルアーツ (LA) 科目「生活世界の安全保障 23 NPO インターンシップ(実習)」において、実際に NPO の活動に参加することにより、NPO の現状や役割、抱えている課題等を具体的に学んだ。今年度の履修生は、一般社団法人全国農協観光協会、NPO 法人 POSSE、NPO 法人放課後 NPO アフタースクールにてそれぞれ実習を行い、第 1 回目目標管理シート、第 2 回目目標管理シート、実習日誌、報告書を作成しながらその体験を言語化した。12 月 9 日（火）には報告会を実施した。

1.6 国際共生社会論実習・国際共生社会論フィールド実習

※詳細は、「2026 年 1 月 お茶の水女子大学グローバル協力センター 令和 7（2025）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー（カンボジア、ブータン）実施報告書」を参照。同報告書はグローバル協力センターのウェブサイトに掲載（全文ダウンロード可能）。

全学共通科目「国際共生社会論実習」及び共通科目（大学院博士前期課程）「国際共生社会論フィールド実習」において、①事前学習、②現地調査、③事後学習を通して、貧困、ジェンダー、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深めた（「～フィールド実習」の履修生はなし）。

具体的には、①事前学習において、資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定した。②現地調査は2024年8月21日～29日（合計9日間、現地滞在7泊8日）にかけてカンボジア、2024年9月15～24日（合計10日間、現地滞在7泊8日）にかけてブータンで行い、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索した。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成するとともに、徽音祭（大学祭）での発表を行った。

本年度の履修生はカンボジア5名・ブータン2名で計7名、内訳はカンボジアが学部1年1名、2年2名、4年2名、ブータンが学部4年2名であった。現地調査の引率は、カンボジアが宮原グローバル協力センター副センター長と駒田同センターアカデミック・アシスタント、ブータンが、宮原副センター長と平山同センター講師が行った。

【現地調査スケジュール】カンボジア

No.	月日	主な活動内容	宿泊地
0	8月21日（木）	・ 羽田空港集合	—
1	8月22日（金）	・ 羽田空港出発 ・ バンコク・スワンナプーム空港到着 ・ プノンペン空港到着 ・ 市内私立幼稚園視察 ・ プレア・ノロドム小学校視察及びインタビュー ・ 併設デジタル・ラーニングセンター視察及びインタビュー ・ Wonderfy(株) カンボジア法人代表等との懇談	プノンペン
2	8月23日（土）	・ トゥール・スレン虐殺博物館見学 ・ シェムリアップに移動 ・ 伝統芸能（アプサラ・ダンス）見学 ・ 市場調査	シェムリアップ
3	8月24日（日）	・ アンコール・ワット寺院、タ・プローム寺院見学 ・ バッタバンバンに移動	バッタンバン
4	8月25日（月）	・ テラ・ルネッサンス活動訪問、インタビュー	バッタンバン
5	8月26日（火）	・ シャンティ国際ボランティア会バッタンバン事務所訪問、活動概要説明、インタビュー ・ プレクノーレン幼稚園（公立）訪問、園長及びスタッフインタビュー ・ 幼稚園児童の家庭訪問、保護者へのインタビュー	バッタンバン
6	8月27日（水）	・ プノンペンに移動 ・ JICA ボランティア訪問（国立体育教員養成校）、インタビュー	プノンペン

		<ul style="list-style-type: none"> 市場調査 	
7	8月28日 (木)	<ul style="list-style-type: none"> CJCC (カンボジア日本人材開発センター) 訪問、日本語学習者インタビュー 市場調査 JICA カンボジア事務所訪問、ナショナルスタッフインタビュー 	プノンペン
8	8月29日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> プノンペン空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着 バンコク 出発 羽田空港着 	

【現地調査スケジュール】 ブータン

No.	月日	主な活動内容	宿泊地
0	9月15日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> 羽田空港集合 	—
1	9月16日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> 羽田空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着 パロ空港到着 ブータン日本語学校訪問 ブータン日本語学校の学生と交流 ティンプー市内散策／各自の研究活動 (インタビュー等) 	ティンプー
2	9月17日 (水)	<ul style="list-style-type: none"> JICA ブータン事務所訪問 JICA ブータン事務所ナショナル・スタッフの方々へインタビュー 織物博物館、Kelzang Handicraft 訪問／各自の研究活動 (インタビュー等) タシチョ・ゾン訪問 	ティンプー
3	9月18日 (木)	<ul style="list-style-type: none"> モティタン高等学校、Bhutan Overseas Jinzai Private Limited、内務省、Project Dragon 訪問／各自の研究活動 (インタビュー等) ティンプー市内散策 	ティンプー
4	9月19日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> 農家ホームステイ／ホストファミリーと交流 	ガサ
5	9月20日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> ガサ温泉、ガサ・ゾン訪問 ガサ市内散策／各自の研究活動 (インタビュー等) 農家ホームステイ／ホストファミリーと交流 	ガサ
6	9月21日 (日)	<ul style="list-style-type: none"> クルタン市内散策／各自の研究活動 (インタビュー等) ロイヤル・ティンプー・カレッジ訪問 	パロ
7	9月22日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> タクツァン僧院訪問 パロ市内散策／各自の研究活動 (インタビュー等) 	パロ
8	9月23日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ノルブリン・ライター・カレッジ訪問／各自の研究活動 (インタビュー等) パロ空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着 	機内
9	9月24日 (水)	<ul style="list-style-type: none"> 羽田空港到着・解散 	—

【履修生の所感（抜粋）】

（カンボジア現地調査に参加した履修生）

- スタディツアー中は、現地の学校や幼稚園 NGO・NPO、JICA の施設などに訪れて、主に社会とジェンダーのかかわりについてインタビュー調査した。特に意欲的に取り組んだのは、異なるバックグラウンドを持つ人々との交流の仕方だ。それぞれインタビューをする一人一人の生い立ちと違いに着目して、質問の内容や切り出し方を変えた。このような方法をとることで、回答を得られやすくなったり、相手と打ち解けやすくなった。スタディツアーの目的であった途上国を自分の目で見るということ、また途上国のジェンダーについて調査するといった点を達成できただけでなく、自らの将来に関するビジョンが固まった。
- 自分が普段学んでいる政治やジェンダーなどの分野をカンボジアでも深く学ぶことができた。スタディツアーでは調査に関するインタビューを積極的にすること、また、仲間と協力しながら活動することで全員の目標を達成できるように心がけた。自分の調査に関するインタビューを積極的に行うことができた他、調査以外でも現地の人との交流や文化に触れることで充実した時間を過ごすことができた。一方で自分の英語力が不足しており、思うようにコミュニケーションがとれない場面があったことは課題として残った。
- カンボジアの高等教育アクセスにどの程度出身地やジェンダーによる格差があるのかについて、プノンペンとバタンバンにて学生や教師の方を中心にインタビュー調査を行った。都市部においては親世代が高等教育の必要性を感じている場合が多く性別関係なく大学進学を最低限必要なものにとらえている人が多かった。一方で地方では中心産業が農業であることや多子家庭が多いこと、またそれに伴う貧困により大学進学を断念する事例があることが分かった。また、女子特有の事例として、仏教国のカンボジアでは男女の婚前交際を良しとしない風潮があり、都市の大学に行かせない家庭もあることが分かった。インタビューでは相手に敬意を払うことや、雑談を交えながらライフヒストリーを少しずつ聴くなど、リラックスして答えてもらえる雰囲気づくりを心がけた。英語でのインタビューではリスニングに苦労することが多かったので今後の語学学習への意欲が高まった。また、カンボジアのさまざまな文化を知り、さらにカンボジアやほかの国の歴史や文化、社会のことを知りたいと思った。
- スタディツアー中は、カンボジアの結婚事情や結婚観についてのインタビューに注力した。日本との比較だけでなく、カンボジア国内での都市と地方の格差についても聞き取ることができた。早婚問題は、カンボジアの法が改正されてもなお地方部で根強く残っていることがわかった。一方で、家庭内の家事分担は男性の負担率が日本より高い場合もあり、日本のジェンダーギャップの大きさが浮き彫りになった。スタディツアーに際しては、事前に調査計画書を作成していたため、自分が聞きたいことをしっかりと聞き取ることができた。しかし、通訳を介さない英語でのインタビューでは 100%聞き取ることができず、その場で新たな質問を生み出すことが難しかったので、次回以降があれば、語学の予習もしっかり行いたい。一方で、異国の地で主体性を持って人に話かけたり、言葉が伝わらなくても言い換えやボディラングージでコミュニケーションをとった経験は日本で得ることは難しく、自分のパーソナリティにも大きく影響を与えたと考える。この経験は就職活動にも活かせるであろう。また、

今回の研修はその国に足りないもの、日本に足りないものがよく分かり、自分の進路についても再考するきっかけとなった。インタビューを通して聞き取った情報は、卒業論文にも大いに役立つだろう。今回のスタディツアーは1週間であったが、1週間で聞いたことをもとに、さらに人々の生活や街の雰囲気から読み取りたいことがあり、もっと調査の余地があると考えた。

- 現地に行ったばかりのときは自分の調査に対してまっすぐなヒント・道筋となるような回答を上手く得られなかったが、インタビューが進むにつれて自分の研究テーマに対する直接的な答えを聞くことが難しいと分かり、様々な角度から質問を考えた。また、人によって回答が異なるときにその背景を理解できるよう、テーマに拘らず相手に沿ってインタビューをした。スタディツアーを通して、自分の興味関心や得意不得意について今までよりも経験をもって考えられるようになったことから、今回の経験が、学業、就職活動等に役立つと感じる。実際に行ってみて、想像していた文化背景・社会の現状のイメージとは異なる部分が多くあり、この経験をきっかけに、より長期の留学をしたいと思った。

(ブータン現地調査に参加した履修生)

- インタビュー調査に際し、より多くの意見を集められるよう、あらかじめ準備していた質問項目以外にもその場で疑問に思ったことは積極的に質問した。また、予定していた訪問以外にも偶然出会った皆さんにもお話を伺い、インタビューの機会を増やせられるように努めた。スタディツアー参加にあたっては、新しい事柄や初めての経験に過度に怖がらず、まず挑戦してみることを目標として設定した。研修中、英語でのインタビューだけでなく、初めての食べ物や体験もはじめから遠慮するのではなくまずやってみる、という姿勢でいられたと思う。
- ブータンは「幸福の国」というイメージを持たれることが多いが、近年の様々な変化のもとでの、経済的成功に対する価値観の様相に関心を持った。そこで、若者の人生観と職業選択について調査した。訪問先や街中で会った23人ほどにインタビュー調査を実施した。スタディツアーでは、旅行ではなく研修として海外に行ったことで、多くの学びを得ることができた。

【写真】

【カンボジア】



プレア・ノロドム小学校



プレア・ノロドム小学校の副校長にインタビュー



デジタル・ラーニングセンターでスタッフにインタビュー



トゥール・スレン虐殺博物館の視察



テラ・ルネッサンス研修参加者へのインタビュー



スタッフの皆さんとランチ(春巻き)作り



シャンティ国際ボランティア会スタッフインタビュー



訪問した幼稚園でスカーフのお土産をいただきました



幼稚園に通う子どもたちにもインタビュー



国立体育教員養成学校を加藤さんの案内で見学



プノンペン王立大学で日本語学習者にインタビュー



学生の皆さんに、校内を案内いただきました



バタンバン近郊の家庭訪問



JICA カンボジア事務所でのインタビュー



アンコール・ワット訪問



市場調査で訪れた中央市場では大きな果物が沢山

【ブータン】



ブータン日本語学校での交流会



JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへのインタビュー



お世話になった JICA ブータン事務所



織物博物館訪問



織物販売店でのインタビュー



モティタン高等学校訪問



内務省でのインタビュー



Project Dragon 訪問



ホームステイ先の農家



乳搾りのお手伝い



ガサ市内でのインタビュー



ホームステイ先でのインタビュー



訪問したタクツァン僧院



大学生へのインタビュー



アーチェリーの試合見学



ノルブリン・ライター・カレッジ訪問

2. グローバル協力センター主催セミナー

2.1 持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

本セミナーは2017年度より実施しており、今年度は、SDGs推進研究所の後援のもと、以下の通り計8回開催した（参加者：のべ合計91名）。また各回の実施報告をグローバル協力センターのホームページに掲載した。

（1）第48回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

- テーマ：世界の栄養問題：地球も人々も健康になる食事の実現に向けて
- 日時：2025年5月1日（木）15:00～16:30
- 講師：JICA国際協力専門員 野村真利香氏
- 参加人数：24名

【参加学生による報告】

2025年5月1日（木曜日）、独立行政法人国際協力機構（JICA）国際協力専門員の野村真利香さんをお招きし、第48回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー「世界の栄養問題：地球も人々も健康になる食事の実現に向けて」が開催されました。栄養問題についての知識を学び、多岐にわたる課題や取り組みを知ることができました。

栄養問題と聞いて、まず思い浮かぶのは低栄養かと思われます。しかし、実際は過栄養も急速に進行しています。これは個人の健康を害する問題であるだけでなく、食品に関するコストの増大という、社会全体の問題にも繋がっていきます。

授業では、ソロモン諸島の「ヘルシービレッジ推進プロジェクト」について紹介していただきました。このプロジェクトは、気候変動による海面上昇に直面しているソロモン諸島で、「村ごと元気！」を目指す取り組みです。具体的には、土作りから支援して、島国でも野菜を作れるようにすることで食事の栄養バランスを整えたり、健康推進ボランティアによる健康課題へのアドバイスが行われたりしているそうです。

いちばん印象に残ったのは、地球の限界を逸脱しない範囲内で人間の健康を守っていく、という考え方を意味する「プラネタリーヘルス」という言葉です。これは、食事が、私たちの健康維持に役立つのはもちろん、地球にもやさしくあることを目指すというものです。近年、気候変動は私たちに重大な影響を与え、食生活の変化にも拍車をかけています。普段何気なく生活しているとなかなか意識できないですが、地球の資源は有限で、それをどんどん消費させているのは、私たち一人ひとりのほんの小さな行動の積み重ねなのです。

「地球を大切にする」ということは、決して環境だけに配慮するという意味ではなくて、地球の裏側にいる人々を大事に思いやることでもあると、私は考えます。同じ地球で暮らす仲間たち、そしてこれから先、私たちとともにこの地球で暮らす新しい命のことに思いを巡らせることで、積極的な取り組みができると思います。

私を含めて、多くの方は今すぐに栄養問題を始めとする世界の諸問題に働きかけることは難しいと思います。しかし、この授業を受けて私たちにできる第一歩は「知る」ことではないかと思いました。世界の現状を知ること。世界で行われている取り組みを知ること。それらは、どうしても他人事のように思えてしまいます。そうだとすると、世界のどこかで今起きている出来事について知ろうとする気持ちを常に持っていたいです。その心がけはきっと、私たちの周りで起きている問題に気づくための助けとなると思います。

日本は様々な面で比較的恵まれた国ですが、だからこそ個人の小さな苦しみが見えにくいこともあると思います。得た知識を十分に活かして、自分の隣にいる人が幸せでいれるようにとみんなが取り組み、平和の輪が広がる世の中になって欲しいです。

(文教育学部言語文化学科 1年 小柳莉穂)



途上国の栄養問題について講義する野村さん



多くの参加者が訪れた会場の様子

(2) 第49回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

【概要】

- テーマ：暴力の時代の平和と尊厳
- 日時：2025年5月19日(木) 10:40~12:10
- 講師：JICA 緒方貞子平和開発研究所所長 峯陽一 氏
- 参加人数：20名

【参加学生による報告】

2025年5月19日(月曜日)、独立行政法人国際協力機構(JICA) 緒方貞子平和開発研究所の所長である峯陽一さんをお招きし、第49回SDGsセミナー「暴力の時代の平和と尊厳」が開催されました。“尊厳”という言葉の定義を確認し、人間一人ひとりに平等に与えられた、人間として生きる権利について学ぶことができました。

講演は、暴力の歴史から始まりました。現在は、ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルのガザ侵攻、過激派によるテロ行為、民族間の絶え間ない紛争等を踏まえ、暴力の時代であると峯さんはおっしゃいました。「暴力の人類史」という本のご紹介に続き、“平和を求める心”と“破壊衝

動”、この二つが人間の心に、社会に、共存していることを教わりました。その上で、峯さんのご専門である南アフリカの、暴力を伴う被支配の歴史、正当化された目的のために単なる道具として扱われ、殺された南アフリカの人々の姿を知りました。印象的だったのは、“人間は手段ではなく目的である”、という言葉です。これはドイツの哲学者カントの言葉で、人間が他の人間をかけがえのない存在として尊重するべきだという意味です。「人間」という価値基準の前では誰もが対等です。その絶対的な尊厳はたとえ国家であっても侵してはならないと思いました。

また、南アフリカの“Ubuntu”という素敵な言葉を知りました。英訳すると、“I am, because you are.”です。人は人によって生かされている。他者との関係の中で初めて人として認識される。生きる上で常に忘れてはならない概念だと思いました。ここには敬意の相互性という大切な概念も存在しています。他者と尊厳を認め合う、という具体的なイメージに欠けてしまいがちですが、日々の生活で自分が周囲の人々によって生かされていることを意識するだけでも、他者の存在への敬意は芽生えてくると思いました。

ただ、悲しいことに、現代世界では、「人間社会」という1つの大きな共同体の存在認識が薄れつつあると感じています。個人は国家の一員である前に、まず人間社会の一員です。平等な尊厳を持つ個人個人が手を取り合い、より良い社会作りを目指していく必要性は明らかです。人間が引き金を引いた環境破壊、それに因る災害や気候変動が加速度的な進行を見せる中、多くの人々が住処を追われ、作物の収穫ができず、人間らしい生活を奪われている現状があります。人間は、人間共通の課題として責任を持ってこれらの問題の解決に当たらねばなりません。人間同士で殺し合い、尊厳を侵し合っているのは、同じ人間（1つの共同体）という意識に欠けているからだと考えます。“人間の尊厳”という言葉が条文で使われ始めた第二次世界大戦後から今年で80年。人間の安全保障が広く謳われるようになった昨今でも、争いのみならず、飢餓や暴力が原因で不条理な死を遂げる人々が後を立ちません。峯さんが提示してくださった世界各地の平均余命のグラフ（1950年～）には、地域ごとに顕著に数値が低くなっている年が見られました。例えば、東アジアでは大躍進政策、東南アジアではスハルト政権誕生前後、ヨーロッパではソビエト連邦の崩壊、アフリカではHIV/AIDSの蔓延により多くの若者が命を落としたこと等の影響です。私は、国の政策1つ、国家の体制1つでこうも国民の生きる権利が左右されてしまうのかと思うと恐ろしくなりました。このグラフのギザギザをいかになくしていくか、という峯さんのお言葉に、ギザギザの背景にある人々の命を感じ、不条理な死をなくしていく必要性を強く感じました。

最後に、「誰も取り残さない」というSDGsの根幹を貫く課題に、今こそ、“尊厳”：尊く（地位）・厳かで（振る舞い）・侵し難いこと（本質）という言葉に立ち返って真摯に向き合うことが大切だと思いました。

（文教育学部人間社会科学科1年 首藤利佳子）



「尊厳」について講義する峯さん



多くの参加者が熱心に耳を傾ける会場の様子

(3) 第50回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

【概要】

- テーマ：カンボジアの幼児教育を考える
- 日時：2025年6月17日（火）10:40～12:10
- 講師：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会国内事業課長 石塚咲 氏
- 参加人数：9名

【参加学生による報告】

2025年6月17日（火曜日）、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 国内事業課 課長である石塚咲さんをお招きし、第50回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー「カンボジアの幼児教育を考える」が開催されました。

講演では石塚さんのキャリアやカンボジアの教育課題、シャンティ国際ボランティア会のカンボジアでの活動についてお話を伺いました。

「行き当たりばったり」が生み出す唯一無二のキャリア

特に印象的だったのは、石塚さんがご自身のキャリアを「行き当たりば通りのキャリア」と表現されたことです。大学でのカンボジアとの出会いから青年海外協力隊での経験、そして民間企業を経てシャンティ国際ボランティア会へ。国際協力に最初から明確な目標があったわけではなく、漠然と「海外に関わりたい」という思いから始まったという言葉に、共感を覚えるとともに、その柔軟な姿勢が多様な経験を積み重ね、今の石塚さんを形成しているのだと感じました。計画通りではないからこそ得られる学びや出会いがある、という示唆に富んだお話でした。

本が紡ぐ「心の逃げ場」と「信頼」

講演の中で、シャンティ国際ボランティア会が本の読み聞かせを大切にしている理由として、「お話を聞いている間は、厳しい現実世界を忘れてその世界を楽しむことができる」「信頼関係を築くことができる」という話がありました。生活が困難な状況で、教育がどう役立つのかという問いに対し、食料や経済、衛生面の安定はもちろん重要ですが、一見優先順位が低そうに見える「本」を通して、心の安らぎや逃げ場を提供し、人との間に信頼関係を築くことこそが、精神的な「救い」となるのだと気付かされました。物質的な支援だけでなく、心の豊かさをもた、生

きる上で不可欠な要素なのだと改めて認識させられました。

教育の課題

カンボジアが目覚ましい経済成長を遂げている一方で、依然として貧困問題が根深く残っているという現状があります。高層ビルが立ち並び、日本の大手企業が進出する首都プノンペンの発展の裏で、多くの人々が不安定な生活を送っているという事実は、持続可能な発展の難しさを物語っています。そして、教育が抱える課題もまた深刻です。ポル・ポト政権後の急ごしらえの校舎の老朽化、就学率の向上にも関わらず、留年や退学の多さ、そして圧倒的な授業時間の不足。特に、午前の部と午後の部に分かれて1日の授業時間がわずか4時間という状況は、限られた時間で十分な教育を受けさせることの困難さを浮き彫りにしています。

「遊び」がもたらす学びの変革

そのような困難な状況の中、シャンティ国際ボランティア会が推進する「遊びや環境を通じた学び」の取り組みは、子どものための教育へ教育を前進させています。従来のもので「学校」のような幼児教育ではなく、子どもたちが主体となり、廃材でおもちゃを作ったり、自然の中で五感を使い学んだりする姿は、まさに理想の教育現場です。

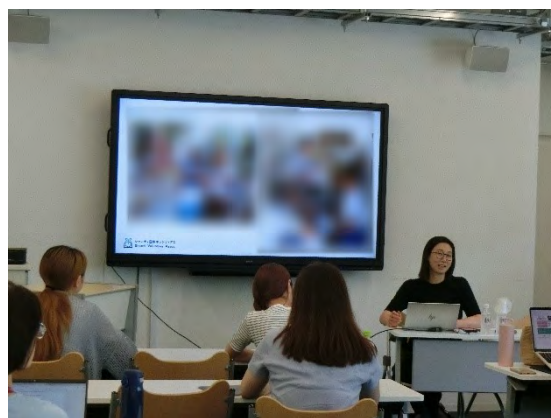
当初は保護者の方々が「遊びより勉強」を求める傾向にあったという話も印象的でした。しかし、プロジェクトを通じて「遊びを通じた学びの重要性」が理解されていったという成果は、地道な努力と対話が実を結んだ証だと思います。日本人とカンボジア人の「遊び」に対する認識の違いなど、課題は残るものの、石塚さんが「段階的に変わっていくものとして長期的な視点で考えている」と語られたことに、その活動の持続性と力強さを感じました。

最後に石塚さんの「先生が生き生きしていると子どもたちは楽しいし、子どもたちが楽しいと先生の負担も減る」という言葉は、カンボジアでも日本でも変わらない教育の本質を捉えていると感じました。子どもたちが笑顔で学べる環境を作り出すことが、教員のモチベーションを高め、ひいては教育全体の質を高める。このシンプルな真理を、私も先入観なく大切にしていきたいと強く思いました。今回のセミナーは、カンボジアの教育の現状を知るだけでなく、教育の持つ普遍的な価値や、国際協力のあり方について深く考えるきっかけを与えてくれました。

(文教育学部人間社会科学科4年 松尾ひなの)



講師の石塚さん



石塚さんのざっくばらんなお話に聞き入る参加者

(4) 第 51 回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

【概要】

- テーマ：現場から考える多文化共生の今
- 日時：2025年6月19日(木) 15:00~16:30
- 講師：JICA 横浜センター国際協力推進員 谷口友理氏
- 参加人数：13名

【参加学生による報告】

2025年6月19日(木曜日)、独立行政法人国際協力機構(JICA)横浜センターの国際協力推進である谷口友理さんをお招きし、第51回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー「現場から考える多文化共生の今」が開催されました。

講演では谷口友理さんのアルゼンチンでの長期専門家やドミニカ共和国でのJICA海外協力隊としての経験について、またJICA横浜の国際協力推進員として現在共に活動されているNPO法人ABCジャパンについて中心にお話を伺うことができました。

谷口さんが最初に協力隊として派遣されたドミニカ共和国では、日系日本語教師として全国の日本語学校を巡回し、若手日本語教師の育成や日系子弟への継承教育などに携わっていらっしやっただけです。現地の日本語学校の年間行事では、スイカ割りや盆踊りなど日本の伝統的行事を取り入れた活動が行われていて、日本とは遠く離れた文化も言語も異なるような土地で子供たちが日本の文化を楽しんでいる様子がとても印象的でした。このように、自国の文化とは異なる文化を受け入れ違いを楽しむことは多文化共生の在り方としてとても大切なものなのではないかと思えます。

このような経験を経て、谷口さんは現在JICA横浜の国際協力推進員としてABCジャパンというNPO法人と共に、外国につながりがある子供たちの支援に従事されています。ABCジャパンは、設立者である安富祖代表自身もブラジル出身の日系人であり、自身が経験された苦勞から、同じ思いをする外国にルーツを持つ人々を支援するために立ち上げられました。

安富祖代表のご経験に関するお話の中で、「国籍でラベリングするのではなく、その人個人への理解を深めること」「ルーツではなくルートを知ること」という言葉がありましたが、これらの言葉は多文化共生だけでなく一人一人の尊厳を大切に人間の安全保障の概念にもつながるものだと思います。私たちは普段日本で生活する中で、無意識のうちに「日本人」と「外国人」という線引きをしてしまいがちです。日本での外国人人口が増えている今、このように国籍という大きなくくりで人々を分類するのではなく、個人個人に目を向け互いに理解し尊重し合っていく必要性を改めて感じました。

ABCジャパンでは、子供の教育保障・継承語教育・心のサポートの分野で主に活動が行われています。このような分野はどれも行政からの支援では手が届かないような部分を埋めていくもので、日本に来た人々が日本で暮らし日本人と関わる中で個々のアイデンティティを維持していくために、すなわち「共生」を実現するためにはなくてはならないものだと思います。

このセミナーを受けて、「多文化共生」という言葉の背後にはたくさんの課題と努力があるということ、そして今後ますます積極的なアクションが必要とされる分野であることが分かりました。

私は一学生として・個人として、まずは身近なところから、相手の立場に立ち違いを受け入れ、互いに尊重し合う意識を持つことで多文化共生というテーマに向き合っていきたいと思います。

(文教育学部言語文化学科 1年 石井 花)



講師の谷口さん



会場の様子

(5) 第52回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

【概要】

- テーマ：「国際協力の現場を知る」連続セミナー：質の高い教育をみんなに
- 日時：2025年11月6日(水) 15:00～16:30
- 講師：JICA 緒方貞子平和開発研究所研究員 池田亜美 氏
- 参加人数：26名

【参加学生による報告】

2025年11月6日(水曜日)、国際協力機構(JICA)緒方貞子平和開発研究所の池田亜美さんを講師にお招きし、SDGsセミナー「質の高い教育をみんなに」が開催されました。最初に、キャリアをはじめとした自己紹介をしていただき、その後は近年の世界の教育課題について、そして課題を解決するための協力方針に基づき、池田さんが関わられたミャンマーの初等教育カリキュラム改定プロジェクトについて詳しくお話いただきました。

池田さんは、国ごとの5歳未満児死亡率のデータより、生まれる国により生き残れるかどうかが変わることに心を痛め、中学生の頃から国際協力へ関心を持っていたそうです。大学院からは短期青年海外協力隊としてホンジュラス活動されたり、ボリビアでJICAのインターンシップに参加したりとJICAを通して途上国へ足を運ばれました。

教育分野では、2015年までのMDGsで「初等教育の完全普及の達成」が目標として掲げられ成果もあげられましたが、質も重要視されるようになり、2015年からのSDGsでは「質の高い教育をみんなに」という新しい目標になりました。しかし、現状は学校・社会の問題や貧困の連鎖により学校へ通うことができない子どもも多くいます。また、基礎的な読み書きの能力が身につ

けられていない子どもも、世界全体、特にサブサハラアフリカに多く、学びの危機とも言われています。私が衝撃を受けたのは、中南米の中学生と教員が行った算数のテストの正答率についてでした。内容は、四則計算や分数など基本的な計算ですが、4問のうち正答率が50%に達する問題はなく、分数の正答率は12%と低くなっていました。教員でさえ、小数の割り算の正答率が約27%にとどまっており、受講者からも驚きの声が聞かれました。

こうした現状に対して、JICAでは4つの協力量針を打ち出しています。協力量針1の「教科書や教材を開発し、学びを改善」では、ミャンマーの初等教育カリキュラム改定プロジェクトをご紹介いただきました。このプロジェクトは、小学校のカリキュラムや教科書・教師用指導書・試験問題を開発したり、教員養成課程を改善したりすることを通して、カリキュラムに則った教育活動の導入を目標としています。7年間のプロジェクトでは、日本からもミャンマーからも多くの教育専門家たちが参加しました。算数では、日本では馴染みのある10のかたまりで計算していくやり方が取り入れられ、こうした教科書はプログラム終了後も使われていたそうです。また、ミャンマーから老朽化した教員養成校の改修依頼があった事例をもとに、日本とミャンマーは準備・建築中・完成後の各段階においてどのような情報とその検討が必要かというグループワークにも取り組みました。受講生からは老朽度のアセスメントや予算、建築中の講義宿泊室の整備などが挙げられましたが、池田さんは今後どれほどの教員数を養成するかによって部屋の数や大きさ、設備が変わるといふ、受講生にはなかった視点を共有していただきました。

今回のお話を聞き、プロジェクトには多くの人がそれぞれの知見を生かして携わっていることと、その実施には先を見通した入念な検討があることが分かりました。JICAは信頼で世界をつなぐというビジョンを掲げていますが、日本の教育専門家の派遣やこの大規模で長期的なプロジェクトの実施はまさに信頼が鍵になると感じます。私自身も将来は国際教育協力を行いたいと思っているため、現場を経験された池田さんのお話は大変貴重でした。ありがとうございました。

(文教育学部人間社会学科3年 片倉心響)



講師の池田さん



グループワークの様子

(6) 第 53 回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

【概要】

- テーマ:「国際協力の現場を知る」連続セミナー:ジェンダー平等と女性のエンパワメントに向けて～国際協力の現場から～
- 日時:2025年11月13日(木)15:00～16:30
- 講師:JICA 国際協力専門員 宇佐美茉莉 氏 ガバナンス・平和構築部 田島冬馬 氏
- 参加人数:26名

【参加学生による報告】

2025年11月13日(木曜日)、独立行政法人国際協力機構(JICA)でジェンダーと開発分野の国際協力専門員である宇佐美茉莉さんと独立行政法人国際協力機構(JICA)ガバナンス・平和構築部ジェンダー平等・貧困削減推進室職員の田島冬馬さんをお招きし、「国際協力の現場を知る」連続セミナー「ジェンダー平等と女性のエンパワメントに向けて:国際協力の現場から」が開催されました。

講演では“ジェンダー平等と女性のエンパワメント”というグローバルアジェンダに基づいて田島さんの JICA ジェンダー平等貧困削減推進室での取り組みやプロジェクトにおけるジェンダー主流化について、そして宇佐美さんから GBV (Gender Based Violence_ジェンダーに基づく暴力) の撤廃に向けた GBV 被害者支援についてパキスタンでの実際の取り組みを例にお話を伺うことができました。

田島さんの所属されている JICA のジェンダー平等貧困削減推進室では主に、1.ジェンダー平等と女性のエンパワメントを主目的としたプロジェクトの形成・実施、2.他セクターのプロジェクトのジェンダー主流化、3.JICA のジェンダーに関わる方針の発信や整理、外部機関との関わり、の業務を担っているとのことで、実際の手引きや指標を見ながら伺ったお話から、各分野やセクターにおいてジェンダー視点で検討する必然性を感じました。

宇佐美さんのお話では、ジェンダー課題の複雑さと GBV 被害者の支援について保護や救済にとどまらない自立や社会復帰までの包括的なサポートが強く印象に残っています。宇佐美さんが活動されていたパキスタンでは、夫・パートナーからの身体的・性的暴力、そして児童婚や強制結婚、名誉殺人などの有害な慣習が未だ存在しているなど、GBV が大きい社会課題になっています。JICA ではパンジャブ州において、被害者中心アプローチに基づいた GBV 被害者の保護、経済的自立と社会復帰を促進する州の支援体制が強化されることを目標に、さまざまな関係機関と連携しながら支援が進められてきました。講演の後半では、特にこの「被害者中心アプローチ」が現場でどのように実装され、どのような変化が生まれたのかについて、宇佐美さんが具体的な事例を交えて説明してくださいました。被害者中心アプローチとは、被害者一人ひとりの意思と選択を尊重し、安全と尊厳を最優先にサービスを提供する考え方です。しかし、パキスタンのように家族制度やジェンダー規範が強く根付く社会では、行政の担当者も「家族に戻す」ことが最善だと信じてしまいがちで、被害者自身の希望が軽視される場面も少なくありませんでした。そのなかで、JICA が実際にサバイバーの方と関わる職員の方に対して実施した研修は、支援者の意識と行動に変化をもたらすことを目的としたもので、それが少しずつ成果に繋がりました。例え

ば、従来は和解を強く勧めてしまっていたクライシスセンターの職員が、ケースマネジメントを通して「まずは被害者が何を望んでいるのか」を丁寧に聞き取るようになったり、心理的ケアや法的支援につなぐケースが増えてきたという報告がありました。この変化は、単なる知識研修ではなく、ロールプレイや事例検討を積み重ねたことで実現したものだとうことができました。

また、パイロット活動の中でも特に印象的だったのが、Transitional Home という新しい支援モデルの導入です。これは、従来の緊急保護に特化したシェルターでは対応しきれなかった、中長期的な自立支援のニーズに応えるための施設です。被害者が安全な環境で職業訓練やカウンセリングを受け、自分のペースで社会復帰の準備ができるという点で、切れ目のない支援の質を大きく高める取り組みと言えます。

Transitional Home から就職し、自立して生活を再構築した女性たちの存在は、プロジェクトの成果を象徴するものであり、同時にカウンターパート機関の意識変革にもつながったとのことでした。実際にファイサラバード県ではプロジェクト終了後も Transitional Home が継続して運営されており、州政府の制度として根づきつつあることは大きな成果だと感じました。

今回のセミナーを通じて、ジェンダー平等の推進や GBV 支援というテーマが、単なる国際協力の一分野ではなく、人間の尊厳に直結した重要な課題であることを改めて実感しました。ジェンダーに基づく暴力が蔓延る社会では、課題が複雑かつ根深いと感じています。しかし、制度づくりと現場実践の両面で地道に改善を積み重ねていくことが、課題の大きい地域においても確かな変化を生み出すのだという希望を感じる内容でした。

(文教育学部人間社会科学科 若松彩希)



講師の宇佐美さんと田島さん



会場の様子

(7) 第54回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

【概要】

- テーマ:「国際協力の現場を知る」連続セミナー:グローバルヘルスと日本~パンデミックの脅威に世界と日本はどう立ち向かったか~
- 日時:2025年11月20日(木)15:00~16:30

- 講師：JICA 緒方貞子平和開発研究所主席研究員 瀧澤郁雄 氏
- 参加人数：約 26 名

【参加学生による報告】

2025 年 11 月 20 日、独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）にて長きにわたり国際協力に携わってこられた瀧澤郁雄さんをお招きし、「グローバルヘルスと日本」をテーマとしたセミナーが開催されました。

大学ご卒業後 JICA に入られた瀧澤さんは、留学のご経験なども経てフィリピンで 4 年間、ケニアで 2 年間という長期にわたる現場での経験をはじめ、お仕事を通じてこれまで約 60 カ国もの国々を訪問された経験があります。セミナーではこうした豊富なご経験を背景に、世界の保健医療の動向から、未曾有の危機であったパンデミックへの JICA の対応、そして国際協力の意義に至るまで多岐にわたるお話を伺うことができました。

セミナーの冒頭では、世界的に深刻化する非感染性疾患 NCDs (Non-Communicable Diseases) について触れられました。2025 年の国連ハイレベル会合でも議論されたように、現在途上国においても NCDs による死亡原因が感染症から母子疾患を上回る大きな要因になっています。背景には、かつての低栄養の問題から、食生活の変化による過栄養の問題や、たばこ、お酒、加糖飲料の消費習慣が挙げられます。これに対し、国際的な政治の場で市場規制をかけようとする動きがある一方で、アメリカやアルゼンチンなどの反対により国連ハイレベル会合の政治宣言が満場一致での合意に至らないなど、「政治と市場の力が健康増進を阻む要因となることがある」という、国際的な政策決定の難しさが示されました。

瀧澤さんは、日本のリソースをいかに世界に役立てるかという点に重きを置いて活動されてきた経験から、日本の保健医療分野の優れた点を挙げられました。日本の乳幼児死亡率は世界最低水準であり、母子保健分野の知見は世界に貢献できるものです。また NCDs による死亡率や過体重の割合も最低レベルにあり、パンデミック対応においても 65 歳以上の人口割合が 29.3%と高いにもかかわらず、死亡率の上昇を最低水準に抑え込んだ点が高く評価されました。

しかし一方で、「日本は健康ユートピアではない」というのが現実です。自己評価による健康度は OECD 加盟国で最低であり、高齢者人口が多いということだけでは説明しきれない、精神的・社会的な健康面（特に高い自殺率）における課題が日本には存在するということでした。

セミナーの後半では、新型コロナウイルス感染症に対し JICA がいかに対応したかをご説明いただきました。JICA の技術協力は人を派遣することで成り立っていますが、PHEIC（国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態）宣言や移動制限により、JICA 史上初となるレベル数の関係者の一時帰国が実施されたというのには大変驚きました。3 月には 6200 人いた現地滞在者が 6 月末には 500 人まで減少したという事実から、危機対応の厳しさを感じます。

こうした状況下で国内支援が優先されるべきではないかという世論への配慮がありながらも、なぜ国際協力を続ける必要があったのかという疑問に対しては、国際協力が単なる give and take ではなく、信頼関係があるからこそその助け合いであることを東日本大震災での経験などを挙げてご紹介くださり、コロナ禍のようなどの国も危機に直面している状況での協力のあり方を改めて考える機会となりました。

今回のセミナーを通じて、国際協力の現場が直面する政治的・経済的な課題や、日本の保健医療が持つ世界的な強みと、国内の精神的・社会的な課題という二面性を深く理解することができました。特に、パンデミックというグローバルな危機に直面した際の国際協力の意義について、支援者側のある種余裕のある立場からの協力というこれまでのイメージを乗り越え、信頼関係に基づく相互扶助という視点を持つことの重要性を強く感じました。セミナーを締めくくられた「共に未来を創れるかが試されている」というメッセージを受け、私もグローバルな視点を自国のあり方への深い洞察をもって、今後の学びと行動に活かしていきたいと思います。

(生活科学部 2年 佐藤佳代)



講師の瀧澤さん



会場での質疑応答様子

(8) 第55回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

【概要】

- テーマ：紛争地、被災地に生きる人々の声～取材から見えてきたこと～
- 日時：2026年3月5日(木) 18:00～19:30
- 講師：認定NPO法人 Dialogue for People フォトジャーナリスト/副代表 安田菜津紀氏
- 参加人数：25名

【実施報告】

2026年3月6日、認定NPO法人 Dialogue for People (ダイアログフォーピープル/D4P) フォトジャーナリストであり、同団体の副代表である安田菜津紀さんをお招きし、「紛争地、被災地に生きる人々の声～取材から見えてきたこと～」をテーマとしたセミナーが開催されました。

最初に安田さんが「フォトジャーナリスト」がどういうお仕事なのかに触れられた後、パレスチナ・ガザ地区の概要や、軍事侵攻に至った経緯を説明されました。最初に見せていただいたガザの海岸線の写真はどこか温かく、地中海を臨む普通の町に見えたことが意外でした。これらの海岸線の建物は現在ほぼ全て砲撃により崩壊しているそうです。現在のイスラエルによる軍事侵攻以前からガザの生活は厳しかったのですが、だからこそ、2011年3月11日に発生した東日本

大震災で被災した人々の厳しい状況に、ガザの人たちが深い想いを寄せてくれていることを知りました。そして、現地の子供たちが中心となって被災者の皆様に手紙を書いたり凧揚げ大会を開催している状況を、写真を通じてリアルに感じることができました。ガザでお友達や家族と楽しく過ごしていたシャヘドちゃんに、2023年10月の軍事侵攻以降連絡が取れないことに、深く胸が痛みました。

続いてシリアです。少し前まではとても美しく、優しい人たちが沢山いる国だったということ、写真を通じて鮮明に感じることができました。特にカシオン山から見えるダマスカスの夜景の美しさが印象に残りました。しかし、日本で東日本大震災が起きていた2011年3月、中東各国で吹き荒れたアラブの春（民主化運動）を押さえつけるためのシリア政府の行動により、世界中にシリア人が難民として逃げざるを得なくなりました。安田さんは、サラという名前の少女のストーリーを話してくれました。直撃を受けた爆弾によりお兄さんが即死、兄弟や自分も大きな怪我を負ったサラちゃんが、「子どもは悪いことをしていない。こんなことは止めてほしいと「大きい人たち」に伝えてほしい」と安田さんに伝えたそうです。子どもにとって誰と誰がどういう理由で戦争をしているかは分かりません。でも「大きい人たち（大人）」がいがみ合い、子どもが殺されてしまうことをもうやめてほしいんだという願いが込められていると、サラちゃんのお母さんが説明してくれたそうです。写真では当時受けた爆撃の近くの写真がありました。コンクリートや石でできた家の壁に無数の穴が開いていて、その爆弾が人々の身体にどんなダメージを与えるのか、考えるだけで恐ろしく感じました。

最後に東日本大震災、陸前高田についてお話をしてくれました。安田さんはこの震災で義理のお母さまを亡くされたそうです。義理のお父様が県立高田病院から撮影された津波の写真はその威力と大きさが身に染みて分かるもので、今、なお、恐怖を感じました。安田さんは陸前高田市でずっと取材されている方々にシリアの話がされたそうです。そうしたところ、被災者の皆さんも苦しい生活が続いているのに、同じ苦しい生活が続いているシリアの人々を想い、募金活動や物資の支援を開始されたそうです。住民の一人の方は「これまで3度避難生活をしたことがある、大変だったし今も大変だけど、それでも国を追い出されたことは無い。国を出ざるを得なかったシリアの人々の方がもっと大変だ、これは恩送りだ」とお話をされたそうです。

安田さんの今回のセミナーをお聞きして、そして沢山の写真を見て、ニュースで語られる「〇〇人が犠牲になりました」という裏に、何千、何万、何十万という一人一人のストーリーがあることを改めて思い知らされました。夢と希望に溢れた将来を楽しみにしていた多くの子供や、そんな子供を支える親たちが一瞬にして命を奪われたり、生涯にわたってケアが必要な大きな怪我を負ったり、精神的なトラウマを抱えてしまいます。改めて、ニュースの表には出てこない人々の苦しみに思いを馳せ、まずは知ること、そして知ったことを周りの人に伝えることの大切さを噛みしめました。写真には多くの人たちの人生が、色々な表情と共に詰まっていました。安田さんのように写真を通じて伝えることは私には難しいですが、「不条理のそばを黙々と通り過ぎない」、「私たちが語り続ける」ことの重要性を改めて感じる時間となりました。

(グローバル協力センター 宮原千絵)



講師の安田さん



会場の様子 1

2.2 2025 年度ブータン連続セミナー

本セミナーは、①南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れること、②それらから開発政策や国・地域の在りかたを考えることを目的とした、全 15 回のオンラインセミナーである（参加者：のべ合計 725 名）。日本ブータン研究所との共催という形式を採り、同研究所が 2013 年 4 月より続けているブータン勉強会（第 201 回～第 215 回）を兼ねた。

毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、映像作品の紹介と視聴、発表者（コメンテーター）からの解説、質疑応答及び意見交換という流れで実施した。協力団体の海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、LASOLA: Bhutan Restaurant には、主に広報に関して協力をいただいた。

（1）2025 年度第 1 回ブータン連続セミナー

【概要】

- 日 時：2025 年 4 月 25 日（金）15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（61） — 『Curly Tales』 「One World Ep4. Bhutan 10 Day Itinerary: Festivals, Off Beat Wonders & Cultural Secrets」 （インド・2024 年） —」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約 70 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ 最近の映像で、映像も内容も良かった。
- ・ 美しい映像が印象的でした。
- ・ インド人のブータンへの理解が分かった。
- ・ 今回、事前に資料をお送りいただいておりますので、ポイントポイントでメモをとりやすく、お話の流れをミスすることなく理解ができました。
- ・ 事前に配布していただいた資料もあったのでよかったです。

- ・ 現在のブータンの都市や寺院を観察することができた。また生活様式の一部を見ることができて意義がありました。
- ・ ブータンの伝統や文化について学ぶことができて満足しました。
- ・ 初参加です。ブータンの事を全く知らなかったなので、楽しく見ました。
- ・ 今現在のホテル事情が興味深かった。
- ・ インドの観光客が多いこと、観光税があることが印象に残りました。学生のうちにブータンなど異国情緒あふれるところに行こうと考えていますが、一日一万円ぐらい取られると少し行きづらいなと思ってしまいました。
- ・ 公定料金制度がなくなったのを知らなかったので参考になりました。
- ・ 普通の人も行ける国とわかりました。
- ・ 初めて参加をさせていただきました。平山先生のお話が素晴らしく良かったです。就業時間中でしたのでところどころしか聞くことができなかつたのが残念でした。アーカイブ配信があればじっくりと視聴させていただきたいと思います。
- ・ 今までもいろいろな映像を紹介してくださっているのですね。見そびれているのか、1974年頃のNHKが初めて入ったか(?)、NHK特集「秘境ブータン」、当時最年少の国王として4代国王の戴冠式等の映像です。初めてブータンを知り、高校の地理の授業でも見て、沼にはまった番組です。もしまだでしたら、是非お願いしたいです。
- ・ いつもご丁寧な運営をいただき、ありがとうございます。今回は、先にも書きましたが、資料をいただいておりますので、お話の内容を逃すことなくうかがえました。
- ・ 今回のビデオは、人気ユーチューバーの旅紹介ということもあり、研究者やドキュメンタリーの映像と異なり、美しく編集されており、初心者にはとてもわかりやすかつたという点で、本年度の第一回に入れていただきましたのはとてもよかつたと思いました。もちろん専門家の視点とは異なりますが、一昨年来ビデオ映像でご紹介いただきました詳しい映像を、今回はさらっと復習できた感じで、日本人が観光として訪れるための全体像の把握としてはとてもわかりやすかつたと思います。
- ・ 久しぶりに、インド人のヒンディー語と英語が当たり前のようにミックスされて、何の予告もなくスイッチされる話し方の耳にしました。
- ・ ブータンの国民的スポーツがアーチェリーということでしたが、もともと弓矢を使って狩猟生活をするという習慣があつたのでしょうか？
- ・ 先生がお示しく下さいました最後のお写真に多くの犬が寝ていましたが、彼らは野良犬でしょうか？ブータンには野良犬が多くいるのでしょうか？インドに行く際には狂犬病の予防注射を打つように言われますが、ブータンもそうなのでしょうか？
- ・ ブータンは犯罪率など、安全な国とされているのでしょうか？
- ・ インド人がブータンでお酒を買うとのことですが、ブータンのお酒はどのような種類のものなのでしょうか？
- ・ オンラインで行うセミナーでは、ブータンと繋いでブータン人から話を聞いてみたり、BBSのTV番組をピックアップしたりというのも面白いのではないかと思います。
- ・ 参加費が無料で助かります。

【2025年度】ブータン⑥、インド②、ドイツ①、アメリカ①、カタール①、中国 (NEW!) ②、シンガポール (NEW!) ②		
第3回 (61)	4月25日	『Curly Tales』 『One World Ep4. Bhutan 10 Day Itinerary: Festivals, Off Beat Wonders & Cultural Secrets』 (インド・2024年)
第2回 (62)	5月23日	『冒険雷探長 (Lei's adventure)』 『344集 不丹人真的幸福嗎？走進不丹國王的愛情童話 探訪不丹戒楚節』 (中国・2023年)
第3回 (63)	6月13日	『冒険雷探長 (Lei's adventure)』 『346集 不丹是世界上最昂貴的國家 雷探長親自不丹農村了 親當地人真實生活品質』 (中国・2023年)
第4回 (64)	7月4日	『101 FAST』 『Bhutan's Climate Crisis』 (カタール・2025年) 巻
第5回 (65)	7月18日	『60 Minutes』 『Bhutan Building Mindfulness City to Create Jobs, Lure Young Bhutanese Home from Abroad』 (アメリカ・2024年) 巻
第6回 (66)	8月8日	『CNA Correspondent』 『Can Bhutan's New Megacity Help Reduce High Youth Unemployment & Brain Drain?』 (シンガポール・2024年) 巻
第7回 (67)	9月5日	『DW Documentary』 『Bhutan: A Journey to the Unknown South』 (ドイツ・2024年)

2025 年度ブータン連続セミナー



取り上げた映像の紹介

(2) 2025 年度第 2 回ブータン連続セミナー

【概要】

- 日 時：2025 年 5 月 23 日 (金) 15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ (62) — 『冒険雷探長 (Lei's adventure)』 「344 集 不丹人真的幸福嗎？走進不丹國王的愛情童話 探訪不丹戒楚節」(中国・2023 年)—」
- 発表者：平山雄大 (グローバル協力センター講師)
- 参加者：約 50 名


【参加者からの感想・コメント (抜粋)】

- ・ 平山先生が最初に指摘されていた通り、映像に登場した中国人レイ警部のアクの強さは賛否両論あるかも……としましたが、今回は「中国の視点からブータンをとらえよう」という挑戦的なセミナーで、面白かったです。
- ・ レイさんのストレートな質問が実情を知る上でよかった。
- ・ 普段なかなか目にする事のないブータンの映像を通して、ブータンの今を知ることができた。
- ・ 北の隣国である中国から見たブータンのレポート、興味深かったです。
- ・ 撮影者のコメントなどが入らない映像作品の良さもありますが、今回のように「身も蓋もない」とも言えるような本音のコメントや質問をしながらの映像もバリエーションになるので、それはそれで (個性的で) 面白かったです。
- ・ 映像が美しく、今のブータンが良く分かりました。
- ・ 何と言ってもツェチュ祭での女性たちの鮮やかな衣装が最も印象的でした。また前回の映像にも出てきましたが、空港の内部はととても空港とは思えないほど美しく、行ってみたい！と思いました。
- ・ 日本語字幕までお付けいただき、とてもわかりやすく拝見いたしました。
- ・ 前回のコメントや質問に対するフィードバックにより、より多くを学ぶことができました。平山先生は大変だと思いますが。
- ・ ブータン王国が選んだ新しい切り口である「仮想通貨」をどう幸福に結びつけるのかをもう少し知りたい。

- ・ 中国の YouTube 動画を日本語字幕で視聴する、というのが斬新でした。ご指摘の通り粗削りな部分もある動画でしたが、前回のインドの YouTube 動画との比較、という点も含めて大変興味深かったです。レイ警部のブローケンイングリッシュで物おじせずインタビューする姿勢は、個人的には好印象でした。
- ・ 今回のビデオ視聴で、同じ YouTuber でも、インドと中国の YouTuber の視点や物腰態度（もちろん個人差はあると思いますが）の違いもとても興味深く拝見いたしました。
- ・ レイ警部の言葉の端々に、昔からの中印関係が垣間見られたようで、これも興味深かったです。中国から安いガソリンを買う、など、それはそれで良いのかもしれませんが、大国の力があまり入り込むことなく、ブータン独自の国のあり方を保っていつてもらいたいとも思いました。
- ・ 見ず知らずの外国人に「幸せですか？」といきなり聞かれても本音は出ないだろう～という平山先生の指摘はごもっともでした。日本のブータン関連番組にも同様の展開は多く、「幸せ」という観点でブータンを取り上げることの難しさを改めて感じました。
- ・ ラウンドアバウトは、たしかロンドンで始まったと思いますが、インドにその影響があるのは歴史的になるほどと思いますが、ブータンにもあったのですね。ただ、信号がなくてもうまく交通が流れているというのは、車の数もあるでしょうが、ブータンの人びとの規律正しさの賜物なのではないかと思いました。人口の多さだけでなく、「あ・うん」ではいけない他民族の中国ではきっと無理なシステムなのかもしれません。
- ・ 先生がチャットに載せて下さった「配布資料」をセミナー中にダウンロードしておかなかったら分からなくなってしまったので残念でした。機会があったら改めて知らせて頂けると有り難いです。（または前回のように事前に）
- ・ 欧州でも農業社会から工業社会（都市社会）への変化の中で今のブータンと同じような混乱？が起きていたようです。そのような意味ではブータンも例外ではなかったようにも思えます。それでもブータンの独自性は維持されていくのではと期待します。そのようなブータン回帰の動きがありましたら是非取り上げて下さい。ブータンでも well-being を大切にする動きは続いているのでしょうか？教えて下さい。
- ・ 前回のセミナーのアンケート内容の振り返りや出された質問・要望への回答の時間が設定されていて、有意義でした。

ブータン基本情報

- 面積
3万8,394km²
- 人口
73万5,553人（2017年）
- 首都
ティンブー（Thimphu）
- 建国
1907年12月17日
- 宗教 ⇒ **チベット仏教国**
チベット仏教カギユ派、ニンマ派、ヒンドウ教、キリスト教他
- 民族 ⇒ **多民族国家**
シャチョップ、ンガロップ、ローツァンバ、ラヤツバ他
- 言語 ⇒ **多言語国家**
母語：シャチョップ、ゾンカ、ローツァンカ他
副語：ゾンカ（ただし母語話者は国民の30%ほど）
※ 学校教育の教授言語は英語
- 政治形態 ⇒ **君主制100年（1907年～）**
立憲君主制 = 議会制民主主義体制（2008年～）
※ 5年毎の総選挙（2008、2013、2018、2023…）



出典：National Statistics Bureau (NSB) (2018) 2017 Population & Housing Census of Bhutan, National Report, Thimphu, NSB.

ブータン基本情報

本日取り上げる映像

『冒険雷探長 (Lei's adventure)』「344集 不丹人真的幸福嗎？走進不丹國王的愛情童話 探訪不丹戒煙節」
（2023年11月29日アップ/31分54秒）（中国語/中国語字幕）



冒険雷探長・
 @Leisadventure・チャンネル登録者数 10万人・498本の動画
 【即日配信】YouTube公式チャンネル 2:59に表示
 www.youtube.com/watch?v=3053145777&list=PL100899918_dk_ah1
 チャンネル登録

取り上げた映像の紹介

(3) 2025年度第3回ブータン連続セミナー

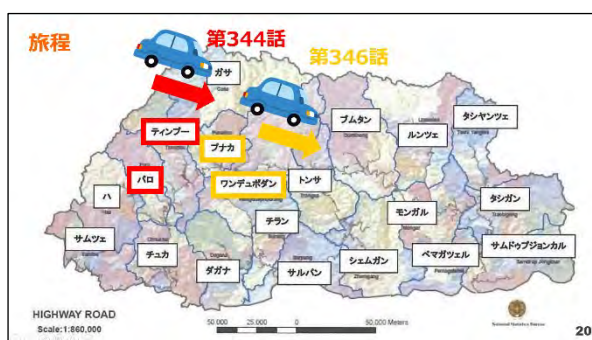
【概要】

- 日 時：2025年6月13日（金）15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（63）—『冒険雷探長（Lei's adventure）』
「346集 不丹是世界上旅行最貴的國家 雷探長抽查不丹農村 了解當地人真實生活品質」（中
国・2023年）—」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約45名

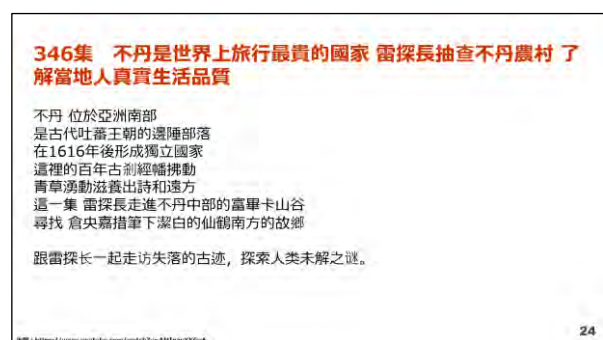
【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ セミナーへの参加は初めてでブータンのことをあまり知らなかったのですが、映像を通して文化や生活の様子を一部知る事ができました。とても興味深かったため、歴史や文化についてより知りたいと思いました。
- ・ ブータンの映像はまだまだ、珍しいので、見るのが、とても嬉しいです。
- ・ 平山さんの付度のない表現で事実が客観的に見えました。
- ・ 動画だけではなく、ブータンについて知見のある方に説明をしていただき、ありがたいです。何せ、情報の少ない国ですので。
- ・ 映像も解説も面白かったです。
- ・ ブータンについて理解が深められる構成になっているのがとても有り難いです。（特に動画鑑賞の前後の解説）
- ・ 映像、先生のお話が、全て印象深いです。
- ・ 平山先生のコメントについてのご返答や、動画の補足説明など、良かったです。
- ・ 十分に内容を把握できず、平山先生の解説で80%程度の理解でした。
- ・ 拝見したブータンのお話も面白かったのですが、YouTubeの「冒険雷探長」のことを知り、調べてみると色々な国を取材していることが分かりました。この番組の情報を頂けたことが大きな収穫です。
- ・ Lei 警部のチャンネルを知ることができ、またその映像について解説を頂けたので大変楽しかったです。
- ・ ポプジカ、農家の様子、人々との会話、どれも一緒に旅したように、楽しかったです。ポプジカに泊ってみたい、トレッキングしてみたいと思いました。レイさんの他のシリーズの紹介があったので見てみます。
- ・ ブータンが2003年にインドと争ったことや、インド人の出稼ぎ労働者の存在などを初めて知ることができた。
- ・ 寺院に入るためには正装が必要という話を聞いて、ブータンでは寺院が特別な空間と考えられているのだということを感じました。
- ・ 民家訪問のキッチンの様子など印象的でした。
- ・ オーストラリアにホームステイして備え付けの大きなオープンを目の当たりにした時も思ったのですが、民家の台所の様子を垣間見られるのはとても楽しいですね。座って包丁を握りサラダを作る様子やガス台に載っている調理器具に異国情緒を感じられました。

- ・ オクロヅルが大切にされている事を知りました。
- ・ オグロヅルについては、ネット上でしか見聞していなかったなので、印象に残りました。
- ・ 飛来する鶴を大切にされるブータンの人々に日本との共通点を感じられてうれしく思いました。
- ・ 中国とブータン、政治的、経済的には少々複雑かもしれませんが、オグロヅルにとっては国境はなく、鶴をとおして2つの国の人たちが話しているのは友好的でよかったです。
- ・ 外国語もブータンもまったくの素人ですが、(中略) 雰囲気と先生からのコメントでなんとか理解しています。
- ・ ブータン国内では王室の権力は強いのでしょうか。また、王室に独裁的な側面はあるのでしょうか。
- ・ 急激な都市化や外国への移住に対してブータン政府や学校がどのように対処しているのか？ブータン回帰の動きがあれば、次年度にでも教えてください。
- ・ ブータンの若者文化について教えてください。伝統と国際化の中でどのように暮らしているのでしょうか。
- ・ 初めて参加させていただきました。これからも時間が合う時には参加させていただければと思います。ありがとうございました。
- ・ 継続して参加したい。



映像に出てきた場所



取り上げた映像の紹介

(4) 2025 年度第 4 回ブータン連続セミナー

【概要】

- 日時：2025 年 7 月 4 日 (金) 15:00～16:30
- 題目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ (64) — 『101 EAST』 「Bhutan's Climate Crisis」 (カタル・2025 年) 他 —
- 発表者：高橋洋 氏 (日本ブータン研究所研究員 / 『地球の歩き方 ブータン』 編集者) 平山雄大 (グローバル協力センター講師)
- 参加者：約 45 名

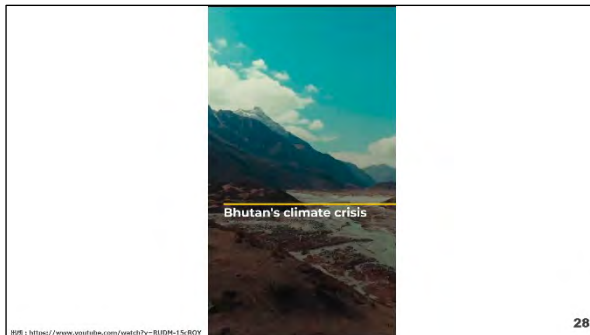
【参加者からの感想・コメント (抜粋)】

- ・ ブータンの現状を知ることができたためになった。

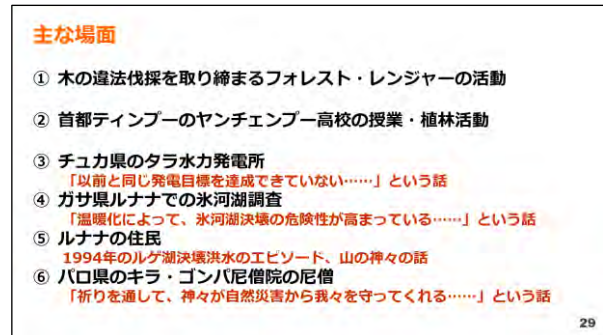
- ・ 映像が最近のものであり、解説者も最近の状況を知っていたことから、ブータンの現状を知ることができました。
- ・ ゲストの高橋さんのお話がとてもよく理解できて良かったです。
- ・ 平山先生の映像視聴前の解説と、高橋さんの視聴後のコメントを通して、今日の映像の背景や批判的な視点も踏まえて理解することができた。特に高橋さんの、植生や標高、降水量などからブータン社会を捉える見方は勉強になった。
- ・ ブータンの矛盾についても少し理解することが出来ました。
- ・ 大好きなブータンの国のことが、色々な方面から聞けて、とても楽しいです。
- ・ 映像も素敵でしたが、高橋さんと平山さんの解説・質問への回答を通して理解が深まりました。
- ・ コメントが様々な視点から出されていて、新鮮だった。
- ・ コメンテーター（高橋さん）のとてもバランスのとれたコメントに、テーマや映像の構成から何となくもやもやしていた感覚がすっきりしました。
- ・ 前回のセミナーで寄せられた質問や要望、さらに参加申込フォームに寄せられた質問にもちゃんと回答されていて感心しました。
- ・ 盛りだくさんでついていけないときがあった。
- ・ 日本語翻訳が有れば良かった。
- ・ 解説がすばらしかった。
- ・ 平山先生と高橋さんの説明が非常にわかりやすい。
- ・ やはり高橋さんのご指摘が、勉強会では少し辛口だったかもしれませんが良かったです。
- ・ Gelephu Mindfulness City の話が印象的でした。水力発電に依存するものという点は矛盾を孕んでいて考えさせられました。（Mindfulness を謳い、しかしダムという環境破壊がないと成り立たない電力や収入）また、場所によってインド側の方が自然が残っていて...という伝えられていない環境破壊があることも、ブータンの一面を映し出す貴重なお話でした。
- ・ 地球環境保護や野生動物との共存など、世界の常識とブータンの常識が違うということを学んだ。
- ・ 高橋さんがおっしゃっていた、今回のアルジャジーラの映像における気候変動の描き方が、ブータンの実情というよりも、欧米的な視点からヒマラヤの氷河融解に警鐘を鳴らす目的で象徴的にブータンが用いられているという点が印象に残った。ブータン人の自然観や仏教的価値観を牧歌的に捉えがちな傾向についても、見直すきっかけになった。一方で、トランプ政権によるパリ協定脱退のような国際的な気候対策への逆流が進む中で、この映像が気候変動リスクへの注意喚起として果たす役割も重要だと思った。
- ・ カタールのアルジャジーラがコンスタントにブータン関連ニュースを発信している理由が気になった。カタールを含め中東湾岸諸国にブータン人労働者が多く滞在していることも、間接的に関わっているのかと思った。
- ・ 仏教の不殺生思想と獣害対策の話が印象に残った。確かに、殺さず追い払わなければいけないというのは大変で、高学歴の若者が農業を嫌悪するのも当然だと思った。
- ・ ブータン南部地域の環境破壊に関する質問への回答で、かつては南部の木材を大量に伐採して輸出していたこと、採石等で地形が変わるくらいの状態もあることなどの指摘が平山先生

からあり、はっとさせられた。

- ・ 野生動物、産業の話は大変、興味深かったです。
- ・ 今日のように、ブータン礼讃だけでなく、ブータンの実態、悩みについても教えて頂ければ嬉しいです。
- ・ 自身では触れられない貴重な映像を取り上げてくださるだけで面白いですが、解説・コメント、質疑応答などを通して学ぶことができ満足しています。



映像の紹介



映像に出てくる場面のまとめ

(5) 2025 年度第 5 回ブータン連続セミナー

【概要】

- 日 時：2025 年 7 月 18 日 15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ (65) — 『60 Minutes』 「Bhutan Building Mindfulness City to Create Jobs, Lure Young Bhutanese Home from Abroad」 (アメリカ・2024 年) 他—
- 発表者：平山雄大 (グローバル協力センター講師)
- 参加者：約 50 名

【参加者からの感想・コメント (抜粋)】

- ・ 海外に移住した若者を取り戻す努力が印象深い。レポーターの鋭い質問や、それに対する答えとのやりとりが非常に興味深かった。
- ・ ブータンのことを全く知らない状態でもドキュメンタリーや解説を通じて、ブータンがどのように変容しているのかを知ることができてとても面白かったです。また面白いドキュメンタリー番組の一つを知ることができてとても勉強になりました。
- ・ ブータン社会の変化を 2000 年代と 2020 年代の映像やキーワードから理解できて興味深かった。
- ・ 60 ミニッツを新旧比較して視聴することができた。
- ・ ブータンの理想と現実、そして希望を知ることが出来ました。
- ・ 内容が面白くて、楽しかったです。
- ・ なかなか、見ることができないものを見せていただき、充実した内容でした。字幕があったのも大変助かりました。

- ・ ブータンの国づくりの要となっている国民総幸福量や民主主義の考え方、観光・経済といったテーマについて、ブータンの人々の語りから、二つの異なる時代のそれぞれの考え方を比較しながらみることができたのはとても興味深かったです。
- ・ 新しい情報が満載でした。マインドフルネスシティ構想は初めて知りました。
- ・ ブータンの社会問題について非常によく理解できる。
- ・ 非常に濃い 1 時間半でした。平山先生のコメントから、2 つ目の映像（2000 年放送のもの）が非常にエポック・メイキングなタイミングでの取材・放送だったということがよく分かりました。
- ・ 映像も非常に質の高いものでしたが、平山先生の解説内での細かな指摘（仏教＝国教というナレーションへの違和感、1979 年の国王インタビューで GNH がすぐに世界の注目を集めた～という編集だったが、実際は時間差があったはず...といったコメント）が、学びを広げました。
- ・ 映像と和訳テロップを提供していただき、理解しやすかった
- ・ 映像の選択や解説も素晴らしい。
- ・ GNH の実現によって人口流出という新たな問題が生まれたという部分が、とても面白かったです。そこに対して国王のプロジェクトが立ち上がり、国王についていく国民がこれだけいるというのにも驚きました。どうしてここまで国王が国民の心を動かせるほどの力を持つに至ったのか知りたいです。また、国王が民主主義を国民に押し付けたということや、国民がそれを望んでいなかったことも興味深く思いました。今はみんな民主主義に慣れているように感じましたが、未だに反対している人はいるのでしょうか？反対活動などもなかったのか気になりました。
- ・ 大国に挟まれた小さな国が掲げた理想 GNH から数十年、その理想を体現するかのような GMC 構想。若い人の国の流失が問題になる昨今、GMC 構想自体に国民がもう 1 回アイデンティティを持つことを目的としているように感じました。好かれている国王の発言に、みなさんが一体感を持つのならいい構想ですね。いつまでにとという期間を設けていないのもいいのかもしれません。
- ・ GNH を軸においた開発が移住を促進してしまっている点、それに対し、王様が自らオーストラリアに出向いてブータン国民に帰還を呼び掛けたという点は非常に驚きました。
- ・ 映像を通して、2000 年から 25 年間のブータンの変化を感じることができたのが有意義だった。
- ・ コメント時にさらっと説明されていましたが、GNH の歴史について平山先生が詳しく、そんなことも調べているのか～と驚きました。
- ・ 平山先生の控えめな進行にはいつも好感を持っております。次が楽しみです。
- ・ 日本語訳もあり、とても理解しやすかったです。日本人とブータンの関わりなどもあれば知りたいと思いました。面白い講義をありがとうございます。
- ・ 今回、映像の文字起こし・全訳を資料に掲示してくださったのは、平山先生のほうはすさまじい労力だと思いますが、ありがたかったです。

本日取り上げる映像①

CBS

『60 Minutes』
「Bhutan building Mindfulness City to create jobs, lure young Bhutanese home from abroad」

2024年11月18日公開／英語（22分15秒）

2024年11月17日放送のもの



28

出典：https://www.youtube.com/watch?v=7g_L12z-1A

取り上げた映像の紹介

文字起こし&全訳

ブータンは幸福を国家の優先事項としている。では、なぜ多くの国民が国を離れているのだろうか？

まるでおとぎ話に出てきそうな、美しく辺鄙な土地で、臣下から慕われる情りを聞いた王がいる……高い山々があり、緑豊かな森があり、川が流れ、空気が澄んでいて……幸福が何よりも大切にされる場所。

ヒマラヤ山脈の中国とインドに挟まれた小さな王国、ブータン。独自の仏教文化を固く守り、長い間鎖国を続け、1970年代まで観光客を受け入れず、1999年までテレビを導入しなかった。国王が「国民総幸福」（Gross National Happiness: GNH）という言葉を生み出し、それを最大化することを国の最優先課題としたことで、独自の発展への道を切り開いた場所でもある。

しかし、おとぎ話のような王国と現代社会が出合うとき、物語のような結末が待っているとは言い難い。

36

映像の全訳資料

（6）2025年度第6回ブータン連続セミナー

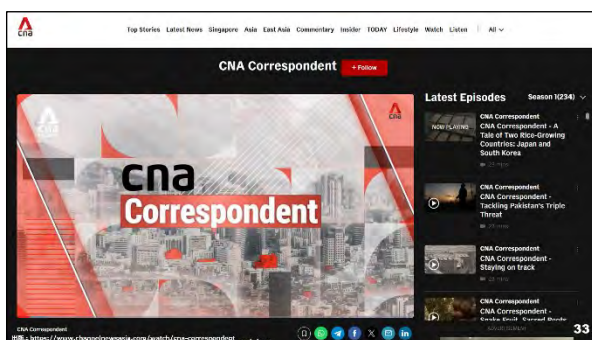
【概要】

- 日 時：2025年8月8日（金）15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（66）—『CNA Correspondent』「Can Bhutan's New Megacity Help Reduce High Youth Unemployment & Brain Drain?」（シンガポール・2024年）他—」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約45名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ 人々の国外流出に悩むブータン社会の実情など、興味深い内容だったと思います。
- ・ ブータンのメガシティ構想？という新しい動きを知ることができてよかったです。日本とは様々な条件が違いますが、何か参考になることはあるのではないかと思います。（またこれが政府の事業ではなく王様の事業であるということに驚きました。）
- ・ 前回に続きゲレフ・マインドフルネス・シティに迫る内容で、ブータンの最新の動きを知ることができた。
- ・ ゲレフの特区構想等、まったく知らないことを知ることができた。
- ・ 知らないことばかりで一つ一つが勉強になりました。平山先生のコメントでよくわかりました。
- ・ 映像視聴を通じて、対インド、対中国とのセンシティブな状況についてかなり突っ込んだ内容に触れられた。
- ・ 「ゲレフ・マインドフルネス・シティへのJICAの関わりは？」という質問に、参加されていたJICAブータン事務所長が明確な回答を提示してくださった点が良かったです。
- ・ 最後にJICAのKIMATAさんのお話を聞いてよかったです。
- ・ 「資本主語の再定義」をはじめとする、インタビューの回答から出てきた刺激的なキーワードが印象に残った。
- ・ 冒頭の「前回のセミナーの振り返り」で、平山先生がアンケートの質問に細かく回答してくださったので、その後の映像パートの理解がより深まりました。（映像は先生のご指摘の通り全体的に早口で、字幕を目で追うのも大変でしたが……。）

- ・ インドや中国との関係、GMC というロイヤル事業 (?)、CNA のコンテンツが充実していること等。ブータンの様々の「リアル」をご教示いただきありがとうございました。
- ・ ゲルフマインドフルネスシティと言う言葉も概念も初めて知りました。
- ・ 王様が立ち上げたプロジェクトの価値を、政治家がきちんと読み解いて、真摯に答えているところ。雇用創出するから、海外から帰ってきてとはっきり伝えているのは、直接的でインパクトありました。
- ・ 平山先生が、改めてゲレフ・マインドフルネス・シティ構想の公開経緯や概要を紹介して下さって、勉強になりました。
- ・ 平山先生の「シンガポール視点」「もう一つの外国を作るようなもの」のコメント、KIMATA 氏の JICA の立場からのという「政府の事業ではない」コメントが印象的だった。
- ・ 「4 代国王にとっての GNH、5 代国王にとっての GMC」という解説がわかりやすかったです。
- ・ 平山先生はどんな質問にも温かく対応して下さるので、それがこのセミナーの、ある意味での「居心地」の良さにつながっていると思います。
- ・ 幅広いテーマを扱ってくださっていて、視野が広がります。ありがとうございます。
- ・ 自由な雰囲気でのセミナーで楽しかったです。ありがとうございました。
- ・ 今日もたくさんの情報をありがとうございました。
- ・ 中国とインドとの関係に関しては今回さらっと触れた程度だったが、いずれぜひ深掘りしてほしいです。
- ・ オーストラリアでの待遇が必ずしもバラ色でないというお話は興味深かったです。オーストラリアの経済も中国の成長が止まってきたことで成長が止まってきたこともあり、今後ブータンからの移民はそれほど増えないようにも思えます。来年度でもそのようなテーマのセミナーが出来たらお願いします。
- ・ 今後も期待しています。
- ・ セミナー開始直後、参加者からの問合せメール (Zoom リンクの再送依頼?) に進行と同時並行で対応されている姿を見て、運営の大変さを感じました。すでに 60 回以上もこのようなオンライン形式でセミナーを続けられているという点に敬意を表します。



取り上げた映像の紹介



取り上げた映像の内容

(7) 2025 年度第 7 回ブータン連続セミナー

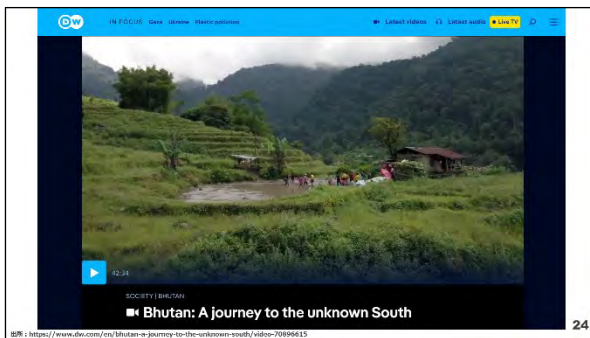
【概要】

- 日時：2025年9月5日（金）15:00～16:30
- 題目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（67）—『DW Documentary』「Bhutan: A Journey to the Unknown South」（ドイツ・2024年）—」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約50名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ ブータンの生活実態が理解できた。
- ・ 映像と解説。いつも参考になります。
- ・ インド・ネパール色のブータンという事でしたが、田舎の人々の日常を覗くことが出来てよかったです。
- ・ 知らないことばかり、興味深いです。
- ・ ドイツの番組からブータンの人たちの誠実な生き方の一端を知ることができて心穏やかなひと時となりました。また、知らないことばかりですべてが勉強になります。すべてを一度に理解できませんが、何度か参加させていただくうちにだんだんわかってくることもあるだろうと思いますし、質問も出てくるだろうと思います。ありがとうございます。
- ・ あまりメディアで触れられない南部地域に焦点が当てられていて、知らなかったことに触れることができました。
- ・ 内容が判りやすく、聞き取りやすかった。
- ・ ブータンの南部については、元々不案内でしたが、総じて情報が殆ど無く、大変興味を持って拝見しました。
- ・ 20年位前は、山間部の電気は、ソーラー発電の利用を目指するのが主だったと思いますが、その後水力発電に力を注いで、インドへ売る方策がとられて、国内でも供給が進んでいるのが感じられました。
- ・ ブータンの最新情報や知る事の少ない南の暮らしを知ることができました。
- ・ 映像作品を通してブータンの諸相が学べた。
- ・ 南部のネパール系、インド系の人々はブータン社会での少数民族ということになるのでしょうか。アッサム系のゲリラとの闘い、過去のチベットとの闘い、などの言葉も登場し、ブータンの歴史、周辺国との関係にも興味がわきました。
- ・ ご紹介のあった『アッサムゲリラ掃討作戦』参考にさせていただきます。
- ・ 歯科医師が機材を背負って奥深い村に診療に行く場面が印象的でした。
- ・ 歯医者さんの移動診療。健康長寿のために歯は大切ですが、それには衛生教育と適切な治療が不可欠だと実感しました。
- ・ 動物を救う、菜食主義の提唱と言うのは、驚きました。また、南部のがインド、ネパールの雰囲気を持っているということも国境と文化の混ざり合いは別なのですね。改めて気づかされました。
- ・ 質問への平山先生の回答（特にコロナ以降の新たな観光旅行制度の話）が参考になった。

- ・ 同じブータンでも南部の文化圏はまた独自のものを感じましたが、輪廻転生の信仰が、ここにもあるのだと思いました。
- ・ 村に電気が通ったことで、そこで生活している人々が笑顔になるということは、光がどれほど心を豊かにするのかが改めて感じられたし、私も自然に笑顔になっていました。また、子供の教育に関し親御さんがきちんと考えていることに興味しました。歯科医師のテンジンさんが治療のみでなく予防にも力を入れているのは素晴らしいことですが、国家としての援助等はあるのでしょうか。医療・教育は無償でも福祉が追い付いていないのでしょうか？
- ・ 本日個人旅行のお話がありましたが、どうやって日本からブータンに行けるのか基本的なことをもしも質問の時間に余裕があれば教えていただきたいです。
- ・ セミナーの前に、資料が頂けて、前回の映像についてのアンケートの共有があったのは有意義でした。
- ・ 新しい『地球の歩き方』が出版予定とうかがいました。楽しみにしています。いろいろな情報が得られそうでワクワクしています。
- ・ 今後とも楽しみにしています。



取り上げた映像



ブータンの南部地域の紹介

(8) 2025 年度第 8 回ブータン連続セミナー

【概要】

- 日 時：2025 年 10 月 3 日（金）15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（68） — 『Tigers of the Dragon Kingdom』（ブータン・2023 年） —」
- 発表者：高橋洋 氏（日本ブータン研究所研究員／『地球の歩き方 ブータン』編集者）
平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約 45 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ 映像はすごくきれいだし、作りも上手でとても良かったです。
- ・ コメンテーターの高橋さんと平山先生の掛け合いが楽しかったです。おふたりから飛び出す小ネタや情報が大変勉強になりました。
- ・ 密猟からの虎の保護について、レンジャーの活動状況が知れて良かった。
- ・ ブータンの様々な面を広く知ることができてとても勉強になります。私がこれまで見てきた

限りでは、トラを追うレンジャーの詳細な映像は初めてではないかと思います。

- ・ 映像も非常に見ごたえがあるので、その内容に対してかなり批判的に平山先生と高橋先生がコメントされている様子が興味深く面白かった。
- ・ トラとブータンの関係を初めて知った。
- ・ 質疑応答が毎回、大変よいと思います。
- ・ 虎を追跡するレンジャーの活躍に、感銘を受けた。
- ・ 映像の質の高さとセミナーの組み立ての絶妙さが良かった。
- ・ 毎回質を保っているのが素晴らしい。
- ・ 取り上げられた映像は、30分の中にトラを巡る様々な人（獣害被害者である農民、密猟者、フォレストレンジャーやフォレストオフィサー）の想いが詰め込まれていておもしろかった。最後の、トラを見つけたレンジャーの女性の嬉しそうな表情が印象的だった。
- ・ 密猟からの虎の保護と家畜人命保護からの虎の駆除、我が国の熊の保護と駆除問題について考えられされた。
- ・ 国土の中の高度差が大きいブータンでは、4,000メートルを越える所のカメラも回収しなければいけないということに驚きました。
- ・ 自己防衛のナイフ所持のお話：最後に一瞬だけ触れただけですが、私の周りにも意外と持っている人がいました。また月1でRTC内で学生内での喧嘩も起きていました。意外と喧嘩っ早いのでしょうか。
- ・ 南部の亜熱帯から北部の豪雪地帯まで生活圏が広がる虎の生命力の強さです。そういえば、シベリアにもアムール虎がいましたね。
- ・ トラがテーマにあがったのはブータンの人々にとって身近な動物であることと理解しました。
- ・ レッドリストにのっているのが保護ありきが正しいのですが、若者が都会へ流れていく時代背景を踏まえて、トラ・牛・人・その他野生動物でどのように生育環境を整えていくのか（隣国との地政学も含めて）難しい課題に直面しているのかと思いました。
- ・ ブータンにいる全部のトラをある一カ所の場所に集めることは不可能といわれましたが、いずれは、それが必要でしょう。すべての動物にとって動物園でしか種を守れない時代が来るのではないかと思います。
- ・ 生き物の命を大切にするブータンで、虎の密猟があるというのは驚きの新しいニュースだった。
- ・ 僧侶が殺生（密猟）をしないよう諭すシーン等から、日本の獣害対策との違いを感じました。
- ・ 前回のセミナーの振り返りパートも大変有意義でした。ぜひ毎回続けていただきたいです。
- ・ 今回の作品は、トピックには深刻さを含んでいますが、映像の美しさとカメラアングルの変化の巧みさで、思わず見入ってしまうものでした。日本でも連日のようにクマによる被害が報道されていることを思い出しながら見ていました。
- ・ ゲストの話もいい。
- ・ セミナー開始前の時間に、平山先生が、質問に対して「今年度のセミナーで取り上げるすべての動画はYouTubeにアップされているものなので、以前取り上げた動画も検索して視聴可能」と回答されていました。ぜひ確認してみたいと思います。



UNDP ブータン事務所の YouTube チャンネル



取り上げた映像の概要

(9) 2025 年度第 9 回ブータン連続セミナー

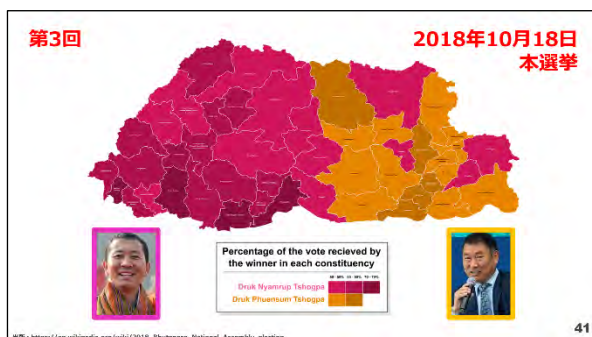
【概要】

- 日 時：2025 年 10 月 17 日（金）15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（69）—『Bhutan's Democracy: A Decade On』（ブータン・2019 年）—」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約 40 名

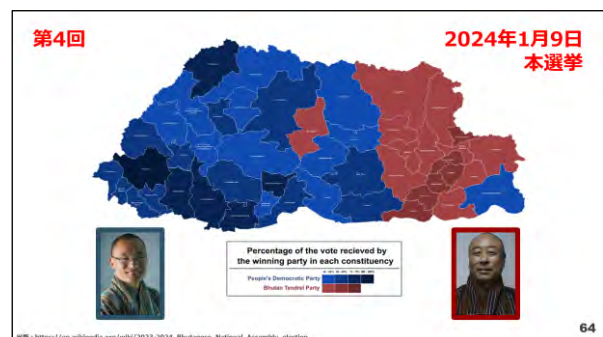
【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ ブータンの国会議員の構成や各政党の内容が分かりやすく理解できました。
- ・ ブータンの政府にも女性活躍が見れた。
- ・ 説明が非常に丁寧でありがたかった。
- ・ 平山先生は「専門ではないので～」と謙遜されていましたが、ブータンの選挙制度とこれまでの選挙結果に関して非常に分かりやすくまとめられた資料と説明で、大変勉強になりました。
- ・ その国の人たち、組織が選挙と民主主義を軸に制作したドキュメンタリーなのが面白かった。十分理解できていないかもしれませんが、このような客観的な視点でのドキュメンタリーができることは、王様から導入されたものとはいえ、民主主義が根付いてきているのではないかと思います。
- ・ ブータンという国の骨格がわかった。
- ・ ブータンで今まで行われた選挙の詳細を知ることができた。
- ・ 新しいブータンの動画が見れて、良かったです。
- ・ 政治のことは全く知らなかったので一から勉強になりました。
- ・ 映像からブータンがとても懐かしく思いました。
- ・ 興味深いテーマだった。
- ・ ブータン映画「お坊さまと鉄砲」の面白さの時代背景が分りました。
- ・ ブータンの民主化のストーリーや選挙の歴史、上院と下院の違い、正式名称やその日本語訳、党首・副党首の特徴・人柄を含めた既存政党の詳細、国王の権力が強い中での民主主義……等、詳しく知ることができました。
- ・ 英語翻訳を目で追うのは確かに大変でしたが、非常に意味のある内容の映像と解説でした。

- ・ 国王の権力の強さに関する、平山先生のコメントが参考になった。確かに、国王の権力は民主化後ますます強まった、という見方が正しい気がします。
- ・ 日本と同じようにブータンでも選挙戦に SNS を活用したり、それが問題になったりするのだということが、新鮮な驚きでした。
- ・ 東西の貧富の差はなにが原因なのでしょう。
- ・ 東西格差、汚職の存在等、民主主義の形態はブータンに限らずこれでいいのだろうかと考えさせられた。
- ・ ブータン東部と西部で、支持政党がかなりはっきり分かれるということに驚いた。
- ・ 平山先生のご説明から、ブータンの選挙の地方性が分かった。
- ・ 「民主主義は、国の中を分断する恐れがある」という意識は日本人として選挙制度に慣れているものとして大変新鮮でした。
- ・ 政党のことについての紹介資料が、興味深かったです。
- ・ 「デモクラシーは国王からの贈り物」という話が印象に残った。確かに他の多くの国の民主主義の成り立ちとは違いますね。
- ・ 平山先生が指摘されていたように、優等生的な賛辞だけではなく、「各党のマニフェストは GNH 達成のためのものなので結局は同じ」、「選挙戦が社会の分裂と分離を助長している」等、意外と (?) つっこんだインタビュー回答が映像の中にでてきたことが印象的だった。
- ・ ブータンで製作されたドキュメンタリーが続くようで、楽しみです。
- ・ 前日の資料共有が大変ありがたいです。特に今回の資料は内容が豊富で読み応えがありました。
- ・ 今日貴重な映像と情報、補足のコメントがあるので、一層理解が進みます。ありがとうございました。
- ・ 来年度以降で結構ですのでブータンの英語教育事情について取り上げていただけると嬉しいです。
- ・ すでに 70 回もこのような私たちのオンラインセミナーを継続されていることに脱帽です。毎回の運営おつかれさまです。



第 3 回下院議員選挙結果(2018 年)



第 4 回下院議員選挙結果(2024 年)

(10) 2025 年度第 10 回ブータン連続セミナー 【概要】

- 日 時：2025年11月7日（金）15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（70） — 『Making a Difference』（ブータン・2018年） —」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約45名

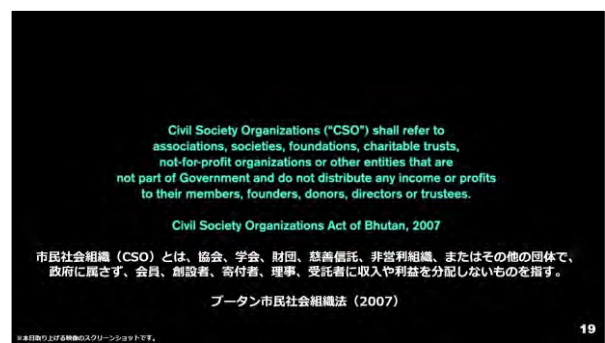
【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ 最近の状態が理解できました。
- ・ ブータンのNPOについて、大筋を掴むことができました。
- ・ 平山先生による映像視聴前のCSO23団体の紹介が、映像を理解するうえで有用でした。
- ・ ご指摘の通り内容を詰め込んだインタビュー集で、情報量が多かったです。
- ・ ブータンの市民活動を知ることができた。
- ・ コメントパートでの、市民社会組織庁の説明や現在の登録団体数の補足情報が良かったです。
- ・ ブータンで活動していると、どうしても情報が偏ってしまい、このようなブータンの内情を広く知る機会が新鮮に感じた。
- ・ 初めての参加でした。紹介のあった団体の多さに驚きました。
- ・ ブータンの若者の活動や発言映像を見れた！
- ・ 動画と日本語訳を見るのに、とても忙しかったです、よかったです。
- ・ 翻訳を読むのに忙しく内容が十分聞き取れなかった。
- ・ NPOの側から、行政の手が行き届いていない社会課題を知ることが確かにできると思いました。学びの深い映像でした。
- ・ 種々の分野で、模索しながら努力している様子が伝わって来ました。
- ・ ロイヤルファミリーの他は、国際機関や外国の団体のサポートが大きいという点が参考になった。確かに、ブータン国内の企業による支援の話はほとんど聞いたことがないように思います。
- ・ ロイヤルファミリーの社会貢献活動と市民社会組織の関わりに関して、その通りと思いました。ご指摘の通り、タラヤナ財団やYDF、RENEW等は資金力・ネットワーク力豊富で、ブータンを代表する団体になっていると思います。
- ・ 『Making a Difference』のタイトルのもとになった、最後のダショーの言葉は確かに良かったです。
- ・ 国民の一部だとは思いますが、若者が流暢に英語で会話している様子が印象に残りました。
- ・ 各種団体の多さが印象に残った。
- ・ 平山先生も映像視聴後のコメントの一つ目で指摘されていましたが、ブータン人同士、インタビューの質問も回答も英語で行われていて、これが英語教育の成果なのだなあと単純に驚きました。団体の名称も、ほとんど英語由来（ごく一部はゾンカ語だったでしょうか）で、英語の浸透度の日本との違いを感じました。
- ・ ブータンで作られた映像が続いて、興味が尽きません。
- ・ 質疑応答パート直前の次回のセミナーの予告、良かったです。

- ・ 貴重な機会をいつもどうもありがとうございます。
- ・ 市民団体の財源についてもそうですが、いろいろな学生等の受け入れ先である会社、企業についても知りたいです。
- ・ 解説、映像作品共に充実しており、有意義な時間をありがとうございました。
- ・ 貴重なお話、有難う御座いました。
- ・ 前回からの参加です。来年度ブータンへ行く計画をしており、下調べを兼ねてセミナーに参加しております。淡水藻類のカワノリについて研究しており、ブータンにはチュルと呼ばれる川海苔が食されている情報を見て、ブータンには是非行かねば！と思っている次第です。自然環境（特に川）や水資源の利用（飲料水や水力発電）などのテーマがあればいいなと思っております。
- ・ 通算 70 回目のセミナー運営おつかれさまでした。勉強会としては 210 回目となるとのこと、ただただ驚くばかりです。資料の事前送付も大変ありがたく思っています。このセミナーは「初学者向け」「ブータン入門」を謳われていますが、どのような基本的な質問（例えば、日本からブータンへの行き方、というような）にも丁寧に答えてくださるところがすばらしいと思います。今年度の残りの回も楽しみにしております。



取り上げた映像の紹介



ブータンの市民社会組織(CSO)の定義

(11) 2025 年度第 11 回ブータン連続セミナー

【概要】

- 日 時：2025 年 11 月 21 日（金）15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（71）－『Made in Bhutan』（ブータン・2013 年）－」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約 40 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ 担当プロジェクトの参考になった。
- ・ Bhutan における起業というのが、興味深いテーマでした。
- ・ ブータンにこのような動きが最も必要だと思いました。
- ・ 取り上げられた映像の作りも良かったですし、「その後の彼ら・彼女ら」についても平山先生

の調べた内容をシェアいただけて良かったです。

- **entrepreneur** がどういう考えのもと増えていってるのか背景に触れることができた。
- 非常に興味深い内容だった。取り上げた起業家の活動がその後どうなったのか？ということが気になっていたの、コメントパートで平山先生が「その後」を取り上げてくださってありがたかった。
- 起業という新しい動き・働きかけ、また第三の居場所ユースセンターでの教育も始まっていることを知ることができました。
- 起業に対するブータンとチベットの文化比較が興味深かった。この相違は何に起因するのか、歴史的なものでしょうか。
- 起業がまだ稀なブータンでも、思い切って起業する人たちがいることを知ることができた。
- その後の事業が成功、不成功の結果事例はよかった。成功事業はブータンの人々のニーズが多いからだと思います。成功例は経済的、嗜好的ニーズが多いからだと思います。
- すごい映像を発掘されている主催者の平山さんに拍手。今も持続されているのだろうかという単純な疑問を持ちながら視聴していましたが、ちゃんと追われていて、完結しました。
- アントレプレナーシップの取組を初めて知ることができました。
- 起業というものが、金儲けだけではなく「家族を支える」「人生を変える」という転換点になるものだと学べた。
- コロナ禍の資金対策にロイヤルファミリーのお金が使われ、王族自ら国に貢献する姿勢が素晴らしい対応であると感じた。
- このようなアントレプレナーシップの動画の影響かは定かではありませんが、私の RTC の友人が何かの EC サイトを運営していると話してくれたのを思い出しました。最近軌道に乗り始めたようで、お金を貯めて日本に旅行に行くんだと話していました。動画で出てきたような現場で働く形ではなく、オンライン上でできるような形を取る点が現代ブータンの若者らしいなと感じました。
- 起業家にネパール系ブータン人の割合が多いという話と、パロやティンプーのメインストリートにあるお店の多くがチベット人のビジネスによる……という話が印象的だった。
- 「公務員になるだけが国に貢献する道ではない」というお話。確かにぐっときました。
- 公務員になって、ダショーをもらうのが出世という伝統的な考え方が残っているのに驚きでした。仏教の教えの中でも儲け主義に走っては（表面上は）いけないという考え方と、それでもお寺の維持にもお金がかかるという現実。雇用を生み出すことで社会の役に立っている、従業員とその家族の生活を守るという考えは、日本の中小企業主と同じですね。
- 後半のコメントコーナーで現在の状況のご説明があったことは理解がより深まった気がします。映像を見ながら今はどうなっているのかなと思っていた私には答え合わせをしていただけたような気持ちになりました。
- 「アントレプレナーシップ」という言葉はブータンでは新しい言葉であるという部分が印象に残りました。今回の社会貢献性の高い事業だけではなく、収益を上げているホテル業・金融業・不動産業やその経緯なども知りたいと思った。
- お忙しい中、大変有意義な時間をご提供いただき、ありがとうございました。

- ・ 日本の江戸時代のように市民経済の拡大はブータンにも必要です。成功者の話をもっと聞きたいです。
- ・ ひとつひとつの質問・コメントにしっかり対峙される姿勢がすばらしいと思います。
- ・ 丁寧なご準備をいただくお陰でためにもなりますし、楽しい 90 分です。



取り上げた映像の紹介



登場人物の確認

(12) 2025 年度第 12 回ブータン連続セミナー

【概要】

- 日 時：2025 年 12 月 19 日 (金) 15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ (72) — 『Interview with Tshering Tobgay: Bhutan Prime Minister on the Country's Economy, Culture, Environment』 (シンガポール・2024 年) —」
- 発表者：平山雄大 (グローバル協力センター講師)
- 参加者：合計約 50 名

【参加者からの感想・コメント (抜粋)】

- ・ 首相のインタビュー映像の内容についても、振り返りで平山先生が解説して下さったので、理解がより深まりました。
- ・ 首相の話が興味深かった。
- ・ 国王は有名な方な訳ですが、首相は名前も話も聞くのは初めてで、興味深いものでした。
- ・ ブータンの課題を首相自ら説明するのを聴くことができました。
- ・ 大好きなブータンの、知らなかったことが、わかって毎回嬉しいです。
- ・ 予想以上に学術的、ハイレベルな内容が満載され、感服しました。
- ・ 疑問も危うさも、素晴らしさもよく理解できました。
- ・ ブータンの実情がわかってきた。
- ・ ブータンの頭脳流出の問題や GMC に関する首相の考え方が、悲観的ではなく、希望を持っている様子であることが分かったため。
- ・ 知らないことばかりで大変勉強になりました。首相の「モデルになる必要はない。インスピレーションを与えることになる」というお言葉は心に響きました。
- ・ 経済政策、観光政策、ゲレフ・マインドフルネス・シティのこと等、幅広いテーマに対する首

相の回答が興味深かった。

- ・ 首相の発言はその国の現状が見える。
- ・ 若者の雇用の話はだまか知っていましたが、若者の失業率 29%とは.....皆が帰国できればと思いました。
- ・ 2029年にブータンに国際空港ができる。とお聞きして、是非その時は、、と思いました。
- ・ ブータンの新メガシティは若者の失業率低下と頭脳流出に貢献できるか、センシティブな内容で参考になりました。
- ・ 王政が廃止されても、国王の指導力がつよい。
- ・ 全てにわたり、真摯な内容でした。どれも印象に残りました。
- ・ GMC は実験ではなく、旅だという考え方。旅という比喻は、未知のことに向かうに当たって、適切な表現だと思う。私達が未知の土地に旅する時、予期せぬことがしばしば起こるが、その時その時で、最善の解決法を見つけて旅を続けるのと似ていると思った。
- ・ メガシティのことについて初めて知った。
- ・ 平山先生が丁寧に復習をしてくださるのでメモしそびれたところも穴埋めできます。また、参加者のかたのご質問、ご発言に刺激されています。この夏であったブータン出身の若者は大学を卒業して日本に来て日本語も学び日本の企業に就職しています。今日伺った背景があることを知ることができました。
- ・ 平山先生が提示してくださった最新の国王演説の全訳と、その内容の紹介が大変参考になりました。
- ・ シンガポールをモデルにしていることがブータンに合っているか知りたい。富裕層優先のようにも思えるが。
- ・ 質問にすぐ応えていただけることに、ありがたく思います。
- ・ グレフーの森がなくなって、GNH と方向性が反対ではないでしょうか。須弥山のような完成動画はできてますが、前、ちょっと FB で見たのですが、ショベルカーが小さく並んで見え、中国の黄色い大地のようなマインドフルネスシティでした。
- ・ 世界中の情報が簡単に手に入る現在、辺境の小国が、どう舵取りをして行こうと考えているのか、どう行動しているのか、興味があります。
- ・ 肉体労働を下に見る傾向はどこにもあるが、ブータンでは強いように感じる。外国人に頼ることから、そして朝鮮時代の両班もそうであったことから、そうした考えは仏教の影響もあるのかしらと思うが、いかがでしょうか？
- ・ いつかでよいのでブータンの英語教育について取り上げていただけますと大変うれしいです。

本日取り上げる映像

CNA (Channel NewsAsia)
シンガポール

『Interview with Tshering Tobgay: Bhutan Prime Minister on the Country's Economy, Culture, Environment』

2024年6月14日公開 / 英語 (29分23秒)



19

URL: <https://www.youtube.com/watch?v=0y9Kz10964I>

取り上げた映像の紹介

参考：2025年度第6回ブータン連続セミナーで取り上げた映像の主な場面

チャプター

 Introduction
 Bhutan's high youth unemployment rate...
 Bhutan's grand plan to build a high-tech...
 A peek into Guelphu, Bhutan's new megalopolis...
 How do the citizens feel about Bhutan's future...
 Balancing its past and future

00:00 はじめに
01:25 ブータンの高い若年失業率と脳流出
03:48 ハイテクな「マインドフルネスシティ」を建設するブータンの壮大な計画
07:49 ブータンの新たなメガシティ、ゲレフを覗く
15:58 市民はブータンの未来をどう感じているのか？
18:48 過去と未来のバランス

26

URL: <https://www.youtube.com/watch?v=enygkx00Gds>

関連する映像の振り返り

(13) 2025年度第13回ブータン連続セミナー

【概要】

- 日時：2026年1月9日（金）15:00～16:30
- 題目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（73）—『Bhutan PM Tshering Tobgay on Building the Silicon Valley of the East, and How It Will Help India』（インド・2024年）—」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：約50名

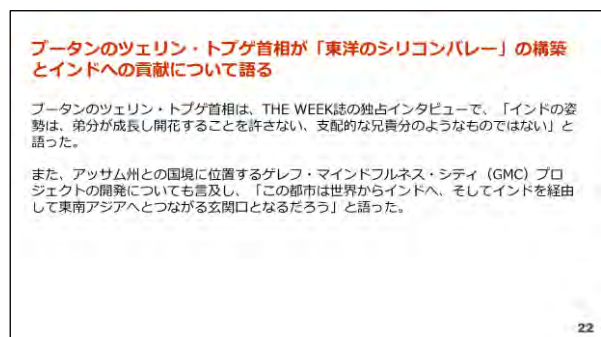
【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ 元首相へのブータン全体像に関する質問・回答であったため、ブータンの全体像が理解できた。
- ・ 現在のブータンの抱える問題点が、わかりやすく解説されていたと思います。
- ・ 毎回、ブータンに関する情報をYouTubeなどから抽出され、ポイントをついて解説され、興味深く拝聴し、ブータンの昨今の情勢を理解することができました。
- ・ 自分では入手できない情報を知ることができたため。また自分だけでは理解し難い現代ブータンの背景を元に解説してくださり理解が深まるため。
- ・ ブータンの悩める若者の国外流出と国内経済改革への困惑が理解できた。
- ・ 詳しく解説してくださりなかなか触れられないブータンの状況を知ることができました。
- ・ 新鮮で面白い。
- ・ ブータンの政治の方向性とこれからの課題が良く分かった。
- ・ 平山先生の解説が、とてもわかりやすいです。
- ・ ブータンについて、新たな視点から学ぶことができ、新たな気づきをいただけたことに感謝しております。平山先生の解説もわかりやすかったです。
- ・ インドとの関係がわかった。
- ・ ブータン自律に関することですが、スイスと同じように観光分野とまず思いました。インフラ整備が必要でしょう。
- ・ 過去4回の選挙では、そのたびごとに政権が変わっているという話。民主主義は暗中模索という段階でしょうか。「兄貴分」はこの点では模範にならないと思う。
- ・ インドとの関係性についての首相のコメントが印象に残りました。

- ・ 我が国における地方人材流出の問題点が同様に重ねて見える。
- ・ 王様の方針は誰も反対しないということ。ブータンはインドに大いに依存していることが改めてわかりました。日本はブータンにとってどんな存在になってしまったのだろうか？とも感じました。
- ・ 首相のインタビューを見ていて、一生懸命にやっていることが見られて、良かった。
- ・ 国王の演説をゾンカ語でなくて、日本語の表示されている画面で見たかった。
- ・ 全部よかった。
- ・ 経済や政治的な視点から語られていた首相のお話の中にも、「人々同士の友情を育むことが大事」や「生物多様性の宝庫」、文化の保護などについても触れられているところに、ブータンという国の精神性が表れているなど感じるとともに、コメントにもありました「資本主義に巻き込まれている」というところが私もとても気に入りしました。経済を発展してゆくことはもちろん必要なことでありますが、それ以上に、今あるブータンの文化、環境が守られ、次の世代へと受け継がれてゆくことについても、首相がどのような対策を取られているのか、より詳しく知りたいと思います。
- ・ グレフ・マインドフルネス・シティ計画ですが、日本の支援が得意な分野ではないですか。(中略) 以前聞いてみたのですが、ブータンからの支援の依頼がないようでした。インドではなく、日本に支援を求めるべきです。
- ・ ブータンの教育環境について知りたい。
- ・ 若年層の海外流出について、質問した者です。何せ、情報が少ない国なので、このような機会を作って頂き、大変ありがたいです。昨春、初めてブータンを訪問しました。あまり知識がない状態での訪問でしたが、セミナーでしっかり勉強して、再訪につなげたいと思います。
- ・ ぜひ続けてください。ありがとうございました。
- ・ ブータンに関する映像を日本語字幕付き画面で見られて、大変ありがたいです。今後もよろしくお願ひいたします。
- ・ 毎回楽しみで、待ち遠しい。毎回の参加申し込みが同一内容繰返しなので、送信したのか忘れてしまう事がある。



取り上げた映像の紹介



取り上げた映像の概要

(14) 2025 年度第 14 回ブータン連続セミナー
【概要】

- 日 時：2026年2月6日（金）15:00～16:30
- 題 目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（74） — 『Hello from Bhutan Documentaries: Pema Gatschel Like Never Seen Before』（ブータン・2024年） —」
- 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- 参加者：合計約 50 名

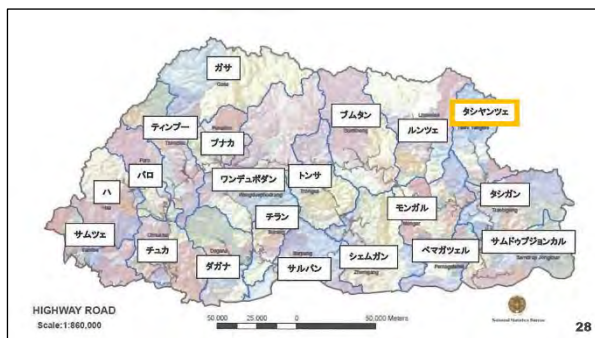
【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ ブータンの今がよく理解できた。
- ・ とても興味深いです。
- ・ 平山先生のご解説がわかりやすく、ブータンに引き込まれる魅力がある。
- ・ 初めて見るブータン南東部のペマガツェル県の自然や文化が、興味深かった。
- ・ このセミナー、久しぶりに参加させて頂きました。ありがとうございます。3年ほど前、仕事でブータン全土を廻り、当時珍しかったペマガツェルにも足を延ばしました。懐かしかったです。
- ・ ツアーに参加した気分になりました。
- ・ 前回と前々回は首相のインタビューで国や政治などの話が聞けましたが、今回はペマガツェル県のドキュメンタリーということで、回によって内容がバラエティーに富んでいておもしろいです。映像の前と後に平山先生が解説して下さって理解が深まる（理解を補って下さる）のがとても有り難いです。また、予め YouTube のリンクを送って下さるのが大変有り難いです（実は、初めて見ると聞き落としが多いし、セリフに気を取られて画像をゆっくり見られないので、今回はセミナーの前に一度全部視聴してから改めて当日に臨みました）。
- ・ 動画の内容についての解説が充実していた。
- ・ ブータンの、綿花栽培、音楽、楽器作り、キャンプ、全て印象に残りました。
- ・ ペマガツェルという一つの県の紹介ドキュメンタリー、興味深く拝見しました。ブータンの国土は広くないはずですが、自然環境のおかげで多様な地域であることがよく分かります。他の県も見てみたいです。
- ・ ペマガツェル、当時は何もない田舎、と聞いていましたが、いろいろな文化があったのですね。勉強になりました。
- ・ 楽器の製造など、どれも面白く拝見しました。
- ・ いつもながら今回も、寺院の中の映像の美しさ（内部の装飾や衣装）に魅了されました。現地で生産される織物もまるで西陣織のような精緻な美しさで、素晴らしいです。「客人は誰でも歓迎してコミュニティのメンバーとして受け入れる」という風習も温かいなと思いました。映像の最後に、行ったところをメドレー的に振り返って映してくれたのも良かったです。ネパールの寺院とそっくりなストゥーパが出てきてびっくりしました。
- ・ 最初はブータンを知ること必死でしたが、やっとゆとりをもって見れるようになりました。
- ・ 先生の説明が、とてもわかりやすいです。
- ・ 皆さまの感想からも学びがあります。引き続きよろしく願いいたします。
- ・ 「山の教室」の再上映の情報、ありがとうございました！！

ができて感動しました。

- Bhutan 北東端の Trashy Yangtse の興味深い文物の紹介を通じて、Bhutan の観光の実状を学べた。
- 見たことのない景色が見られた。また今後の参考になる動画サイトを知ることができた。
- 映像がとても綺麗で癒されました。風が見えるようでした。ブータンでも首都から最も遠い地域の文化は、首都の人々にとっても、異文化に見えるのが、とても新鮮です。私もファームステイしたことを思い出しながら拝聴しました。
- 平山先生が指摘されていた通り、分かりやすいパート分け（聖地、食、工芸 etc.）と進行の、良い紹介動画でした。
- 地方の文化を見ることが出来た。
- ブータン東部の美しい映像、他人とは思えない懐かしい顔立ち、どこかで見たことがある木工品、紙漉き、谷間の棚田、本当に美しかったです。
- なかなか聞けない東部の情報を得ることが出来ました。
- なかなか観光では体験できないことを映像で見せていただきありがとうございます。
- 前回の地図の質問に丁寧にお答えいただきありがとうございます。
- 何処に行くにも山登りがつきもののブータンならではのと思いました。
- ブータンの遺産はタクツァン僧院だけではない、我々は国内の文化をもっと学ばなければならない、という MC のペムシーさんの気づきが印象的だった。
- PemC さんのガイドが良かった。
- ブータンの人々も知らない風習が多数あるのはおどろきです。
- 宗教、料理、紙漉き、全てもう一度見たい映像です。
- トウモロコシ入りのおかゆやキビの「そばがき」等、普段触れられないブータン料理のことが新鮮でした。
- 聖地オンバ・ネのくだりは圧巻でした！
- 有名なポイントだけではなく、地元の人々が大切にしている地域のよさや魅力を伝えようとしている点、紹介するレポーターの姿勢が誠実だった点、AI の誤訳はあるとしても、字幕を付けてくださることで映像の内容をその場で理解することができる点が良かった。
- 初めての参加です。自動翻訳のレベルは良くなかったとのことですが、そもそも地名を知らないのでも気になりませんでした。古き良き時代的な文化が今でも残っていることに驚きました。今回は最後とのことですが、アーカイブが観れると嬉しいです。
- 1年間ありがとうございました。来年度もよろしくお願いします。
- 来年度もタイミングが合えば参加したい。
- 丁寧な構成でブータンのことが少しずつ知ることができています。英語教育の実態について現地に行きたいなと思っているものですから機会があったら小学校、中学校レベルの英語教育について取り上げていただけると嬉しいです。いつもありがとうございます。
- コロナ禍のピンチの中、特に観光部門の政府や民間ツアー業者、ツアーにかかわりがあったコミュニティの人々それぞれの困難及び対応について、具体的なことを知りたいと思いました。廃業するツアー会社やホテルも出てしまったのでしょうか？

- ・ 2025 年度全 15 回の運営おつかれさまでした。どうもありがとうございました。
- ・ 観光で訪れる場合に知っておくべきことが紹介される回があってもいいのでは？
- ・ いつも懇切丁寧に計画、準備していただき、ありがとうございます。
- ・ ブータンの各地（東、西）での紹介を増やしたらどうでしょうか。
- ・ 偏りのないいろいろなテーマで全 15 回進めてくださり、大変勉強になりました。



タシ・ヤンツェの I



タシ・ヤンツェの風景

2.3 「映像で学ぶ」SDGs 映画鑑賞会

2025 年度より開始された活動。昨今は、途上国の SDGs に関連するテーマを扱った映画作品が多数日本で上映されている。本会では、センター所蔵の「教育機関向け」DVD を活用し、普段接しない色々な途上国の現状や課題を新たな側面から見直し、楽しみながら学びを深めていくことを目的として実施している。今後、毎月 1 度の頻度で開催していく予定。

(1) ポパティニー・インク～あなたの寄附の不都合な真実～ (2014 年 アメリカ)

【概要】

- 日 時：2026 年 2 月 5 日（木）16:00～17:30
- 目 的：私たちの善意によって行われる途上国への支援。何気ない「善意」が時には現地の生活や経済に思わぬ悪影響を与えることを知る。
- 講 師：宮原千絵（グローバル協力センター 准教授）
- 場 所：グローバル協力センター内会議室
- 参加者：7 名
- 感想（抜粋）：
 - ・ 途上国援助に関する事前知識をほとんど持たないままの参加だったが、随所で解説をいただけたので理解しやすかった。
 - ・ 私は第二次世界大戦中～戦後の日本史を専攻しており、被支援国としての日本に関心を持っていたが、かつての敗戦国を彷彿とさせる構造が現代にも引き継がれていることにはとても驚いた。日本が国際社会で（一応の）自立を果たせたのはなぜか、それは本当に「勤勉さ」や「技術力」だけが理由だったのか？（ハイチの人々にはそれがないと言い切れるのか？）と「日本文化」に対する素朴で成功体験に彩られた語りを見直す視点を得られた。一方で、「支援を否定するのではない」と繰り返し語られる様子からは、当事者の力に期待する考え

が容易に支援不要論と結びつく危うさを示しているように感じた。支援に「熱意」や「思いやり」を持ち続ける者以外には、撤退する言い訳を与えることになりかねない。機械的で自己陶醉に満ちた支援構造が救ってきたものも確かにあるのだろうと感じた。また、映画では希望に燃える起業家が多く取り上げられていたが、「頼り切り精神」の人々も当事者であることを考えると、彼らは未来を切り開こうとする「同胞」をどう感じているのだろう？と疑問が湧き、その後を調べてみたいと思った。

3. 途上国研究・国際協力分野海外調査支援

3.1 実施概要

【目的】

本事業は、本学大学院博士課程（前期・後期）の学生による途上国研究、国際協力に関する現場に根ざした調査研究を支援するため、公募により選定された海外調査への支援を行うものである。

本事業は、従来大きく2つ、①「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」事業（2011年度～）、及び②本学卒業生の故野々山恵美子様の遺贈によりアフガニスタンをはじめとする困難な状況にある開発途上国を対象とした調査・研究・実践のために設立された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」（以下、「野々山基金」）事業（2013年度～）に分け実施されていたが、2023年度より、すべて野々山基金による事業実施へと切り替えられた。

【対象分野】 開発途上国、国際協力等に関する分野・テーマ

【支援内容】

20万円を上限として、航空運賃、ビザ代、予防接種代、海外の調査地での宿泊費、その他グローバル協力センターが必要と認める費用を本学及びグローバル協力センターの規定に基づき支給する。これらの費用の総額が20万円未満の場合は実費を、20万円以上の場合は20万円を支給する。

3.2 今年度の募集と選考結果

今年度の募集と選考結果は以下の通り。

【募集時期】

- ・春募集：2025年5月14日（水）～6月11日（水）
- ・秋募集：2025年10月15日（水）～11月12日（水）

【選考結果】

応募者：4名、採択者：4名

【採択者氏名・所属・テーマ・調査先・調査時期】

氏名	菅野 萌々寧
所属	生活工学共同専攻 M2
テーマ	スリランカにおける住民の生活排水と環境水に関する意識調査
調査国・都市	スリランカ ゴール市
調査時期	2025年10月7日～23日

氏名	井上 眞菜
所属	生活工学共同専攻 M2
テーマ	モンスーンアジアでの個別排水処理 (On-Site Sanitation) による微生物除去性能の評価～季節性や土壌特性との関連～
調査国・都市	スリランカ ゴール市
調査時期	2025年10月7日～23日

氏名	臼杵 ふたば
所属	ジェンダー社会科学専攻 M1
テーマ	法整備や司法アクセスについてのジェンダー平等是正： 第70回国連女性の地位委員会における議論を中心に
調査国・都市	アメリカ ニューヨーク
調査時期	2026年3月7日～20日

氏名	余 楽
所属	ジェンダー学際研究専攻ジェンダー論領域 D3
テーマ	「結婚適齢期」男性の結婚費用からみる中国農村の社会的再生産の危機
調査国・都市	中国 湖北省（武漢・景城）
調査時期	2026年2月12日～3月10日

3.3 調査報告書要約

※報告書全文は「VI.資料 2.「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」採択者報告書」を参照。

スリランカ国における住民の生活排水処理と健康状態に関する意識調査

Survey on Residents' Awareness of Domestic Wastewater Treatment and Health Status in Sri Lanka

大学院人間文化創成科学研究科
生活工学共同専攻 M1 菅野 萌々寧

1. 要約

(和文)

アジア諸国では、都市の一部を除いて生活排水は各家庭で個別に処理する方法が主流である。病原体や汚濁指標の負荷が高いトイレ排水は簡易処理の後土壌浸透され、また雑排水は未処理で放流される場合が多い。本調査の対象であるスリランカ国では、約 80%の家庭で水洗トイレが導入されているにもかかわらず、個別処理として本来非水洗トイレ用の「Pit Latrine」が流用されており、水洗トイレ排水が不十分な処理にて環境へ放出していると考えられる。加えて、スリランカ国では地下水を水源とする地域も多く、生活排水が地域の環境水や地下水、さらには住民の健康に影響を及ぼす可能性がある。一方、生活排水や地域の水環境に対する住民の意識を調べた事例は限られている。そこで本調査では、上記のような排水処理状況であるスリランカ国において、個別排水処理の選定権者である住民が適切な選択をするための情報収集として、生活排水処理の実態や住民が持つ水環境への意識、健康状態に関する意識を把握するために、アンケート調査を実施した。調査は南西部の Galle 市および中央部の Kandy 市周辺の観光地・学校・住宅地にて行い、トイレ排水処理、水利用、下痢症、生活雑排水処理を主な質問項目とした。結果として 314 件の回答を収集し、トイレ排水処理に関して、住民は自宅に設置されたタンクの存在を認識している一方で、その設備が「トイレ排水を処理する」機能を持つことを十分理解していない可能性が示唆された。また、下痢症の罹患頻度は低い傾向にあり、「不衛生な食物」や「飲み水」が主な原因として認識されていた。以上の結果を踏まえ、今後は、排水処理に関する住民のリテラシー向上に効果的な情報の内容や提供の方法を、介入研究を通じて明らかにすることを目指す。

モンスーンアジアでの個別排水処理（On-Site Sanitation）による
微生物除去性能の評価 ～季節性や土壌特性との関連～
Evaluation of Microbial Removal by On-Site Sanitation in Monsoon Asia
-Relationship with Seasonality and Soil Characteristics-

大学院人間文化創成科学研究科
生活工学共同専攻 M2 井上 眞菜

1. 要約

（和文）

し尿排水処理方法として、途上国や中進国では個別排水処理（On-Site Sanitation systems；以下 OSS）が普及しており、この中でも底のない筒にし尿を流し込み土壌浸透させる型を Pit latrine という。Pit latrine は本来非水洗のトイレに接続されることを想定しているが、昨今はトイレの水洗化が進みトイレ排水量の増加に適応できず病原微生物リスクの抑制が不十分である可能性がある。特に、OSS が多く導入されているモンスーンアジアでは、多量の降雨により OSS の周辺土壌への糞便汚染が拡大する懸念があり、これら気候および地理的要因、土壌浸透を含めて実態を探ることが必要である。本研究では OSS 周辺土壌を採取し、ヒト糞便由来のウイルス指標として Pepper mild mottle virus (PMMoV) および大腸菌ファージ、その他大腸菌等の細菌指標を測定することにより、OSS 周辺土壌による微生物除去性能を評価することを目的とした。調査方法として、OSS の普及するスリランカ国にて家庭用 Pit latrine および似た型である Soakage pit の計 6 カ所を対象とし、その近傍および遠方の箇所にて土壌を採取、各微生物指標の測定を行った。PMMoV に関しては、農業分野で土壌からの検出手法として用いられている ELISA (Enzyme-Linked Immuno-Sorbent Assay) を、OSS 周辺土壌を対象として新たに試みた。その結果、OSS より十分に離れた地点から、OSS 近傍と同レベルの PMMoV が検出されたことから、スリランカ国における ELISA による PMMoV の評価は困難である可能性が高いと示唆された。また、大腸菌ファージの結果により OSS のウイルス除去性能を評価したところ、沿岸部 1 地点における Pit latrine より最大で 3.9 Log のウイルス除去が確認され、特に降雨の少ない時期に周辺土壌によって有意に除去される傾向にあることがわかった。また、大腸菌ファージと大腸菌には相関が見られず、ウイルスと細菌の土壌中の挙動は異なることが示唆された。

4. 大学間連携イベント・活動

4.1 五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー

※詳細は、お茶の水女子大学グローバル協力センターが発行した「令和7（2025）年度五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー実施報告書」に取りまとめられている（グローバル協力センターのウェブサイトより全文ダウンロード可能）。

（1）事業の背景・目的

五女子大学コンソーシアムは、日本政府のアフガニスタン復興支援において、お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学が連携し女子教育支援に取り組む協力枠組みとして2002年に締結された。同コンソーシアムのもと、五女子大学は連携し、アフガニスタン女子教育復興のための女性教員研修を実施し、2002年から2012年の間、女性教員など169名を受け入れた。同コンソーシアムは、2006年より支援対象を開発途上国の女子教育に広げている。

各大学から指名された委員がコンソーシアムの事業・活動を検討・決定する連絡協議会（年2回開催）において、JICA海外協力隊派遣前訓練所を擁し、多くの国際協力活動を実施している長野県駒ヶ根市において、「国内でできる国際協力」を学ぶ「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」が提案され、実施が決定された。

「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」は、駒ヶ根市役所及び日本政府の国際協力実施機関である独立行政法人国際協力機構（JICA）と連携し、駒ヶ根市において、①海外協力隊の活動を知り、個人でできる国際協力活動について理解を深める、②地方自治体における国際協力活動や多文化共生社会への取り組みを知り、地方レベルで参加できる国際協力活動について理解を深める、③上記2つの理解が深まったところで、実際に自分ほどの様に国際協力を携わりたいか目標を設定し、具体的なアプローチを考えてみる、④同じ関心を持つ「五女子大コンソーシアム」の参加者とネットワークを構築する、を目的に、2025年9月1日から3日までの期間で実施された。

本スタディツアー実施に当たっては、アフガニスタンをはじめとする開発途上国の女子教育支援を支援するため、2012年にお茶の水女子大学卒業生の故野々山恵美子様の遺贈を原資として設立された「野々山基金」を活用した。

（2）実施スケジュール

2025年6月に各大学が募集選考を実施し、各大学から3名、合計15名の学生の参加が決定した。参加者決定後、オンラインでの事前学習・打ち合わせを2回（7月23日（水）、8月6日（水））実施し、9月1日（月）～9月3日（水）にスタディツアーを実施した。その後、10月27日に開催された五女子大コンソーシアム連絡協議会において、各大学の参加学生によるオンライン報告会を実施した。また、本学参加学生は11月9日の徽音祭にて発表と展示を行った他、日本女子大学においては、参加学生のインタビューを同大学HPに掲載、津田塾大学においては、参加学生による学園祭での展示を行った。

(3) 概要：

スタディツアーで訪問した駒ヶ根市役所では、伊藤市長自ら参加学生を歓迎していただき、市職員から駒ヶ根市における国際協力活動と多文化共生の取組に関する概要説明を受けた。JICA 駒ヶ根では JICA の事業概要や途上国の現状を学び、その後訓練所施設を見学し、協力隊員がどのような環境で派遣前研修を受けているのか、その内容や生活環境への理解を深めた。また、食堂では、派遣前訓練中に提供される国際色豊かな食事を体験することができた。加えて、過去に隊員として現地で活動した 3 名の方々から詳しく話を聞くことで、活動現場の実際についてより深く学ぶことができた。また、多文化共生の取組として「地球人ネットワーク in こまがね」の活動に参加し、地域に居住する外国人へのインタビューを実施したほか、市が行う国際協力活動として「ネパール交流市民の会」の活動を学び、会のメンバーとともに現地で使用される研修用ツールを作成するなど、地域が行う国際協力の可能性と現実について理解を深めた。駒ヶ根市で国際協力活動に従事する方々が数多く参加した懇親会では多くの本音を聞くことができ、より具体的に将来のイメージを持てたようである。また、短い間ではあったがグループを基に活動したことによって、大学の枠を超えた参加者同士のネットワークも育まれた。

訪問を通じて、JICA 駒ヶ根では入り口に「歓迎～五女子大コンソーシアムの皆様」とサインボードが大きく映し出されていたり、各受け入れ団体からは非常に手厚い対応をいただいたことに、参加学生一同感銘を受けていた。

五女子大コンソーシアム連絡協議会での報告会には各大学から 1 名がオンライン参加し、大学ごとの役割分担に沿ってそれぞれの学びが共有された。参加者からは、本プログラムが国際協力の観点から大きな学びの機会を提供しているとの評価を得た。

4.2 国際協力・開発途上国・SDGs に関する単位互換（津田塾大学・奈良女子大学）

(1) 背景・経緯：

2023 年 10 月の五女子大学コンソーシアム連絡協議会において、「五女子大学内で国際協力・開発途上国・SDGs に関する科目の単位互換を行う」事業が提案され、各大学で具体的なプロセスを確認することとなった。

その後、2024 年度前期において、津田塾大学から「2024 年度内実施を目指し進める」との回答を得たが、他大学からは意志決定・検討に時間を要する旨の回答があった。コンソーシアムの具体的な活動実施を推進する、との観点から、津田塾大学との間の単位互換を先行し進める方針をお茶の水女子大学から四女子大学に諮り、同意を得た。

双方の学内での検討・協議の結果、コンソーシアム協定に基づく事業として、2024 年度後期より津田塾大学との間で国際協力・開発途上国・SDGs 等に関する科目の単位互換（双方の学生の科目履修を可能とする）を行うこととし、2024 年 6 月、津田塾大学との間で「コンソーシアム」協定に基づく単位互換覚書を締結した。

お茶の水女子大学から残る 3 女子大に対し、引き続き単位互換に関する具体的検討を働きかけたところ、2024 年 10 月のコンソーシアム連絡協議会において、奈良女子大学から「単位互換に

向け、オンラインで実施可能な授業があるか確認中」との表明があった。その後の協議の結果、2025年度からの「オンラインでの授業実施を前提とした」単位互換の実施に向け、両大学内で調整を進めることとなった（他大学からは次年度からの実施は困難との感触表明あり）。

調整の結果、津田塾大学との前例に倣い、コンソーシアム協定に基づく事業として、2025年度前期より奈良女子大学との間で国際協力・開発途上国・SDGs等に関する科目の単位互換（双方の学生の科目履修を可能とする）を行うこととし、2025年1月、奈良女子大学との間で「コンソーシアム」協定に基づく単位互換覚書を締結した。

（2）概要・現状：

2025年度は、本学から津田塾大学、奈良女子大学への単位互換に基づく履修はなかったが、津田塾大学からは7名、奈良女子大学からは6名の学生が特別聴講生として本学で履修を行った。

【津田塾大学との単位互換協定に基づく特別聴講生の履修科目（2025年度）】

倫理学概論Ⅰ、仏語圏言語文化論Ⅲ、子ども学総論、日本文化史概論、社会学総論 等

【奈良女子大学との単位互換協定に基づく特別聴講生の履修科目（2025年度）】

NPO入門、教育開発概論（1）、教育開発概論（2）

5. その他の国際協力関連活動

5.1 海外・日本国内各機関との連携

(1) 五女子大学コンソーシアム（連携協議会の開催）

アフガニスタンの女子教育に関する支援、またその他開発途上国の女子教育に関する支援にかかわる事業を実施することを主な目的として2002年に締結された「五女子大学コンソーシアム」（これまで4回更新、最新は2022年11月）の事業・活動の活性化のため、本年度は各大学から指名された委員による連絡協議会を2回開催した。

【2025年度第1回連絡協議会】

- 日 時：2025年5月26日（月） 15:00～16:30
- 場 所：お茶の水女子大学 学生センター4階 第五会議室
- 議 事：
 1. 連絡協議会委員・事務局に関して
 2. 五女子大学コンソーシアム・ファクトシートに関して
 3. 2025年度のコンソーシアム活動案に関して
（大学間単位互換、合同国内スタディツアー 等）
 4. 各連絡協議会委員からの共有事項
 5. その他

【2025年度第2回連絡協議会】

- 日 時：2025年10月27日（月） 15:00～17:00
- 形 式：オンライン（Zoom）
- 議 事：
 1. 五女子大学コンソーシアム 国内スタディツアー報告会
 2. 五女子大学コンソーシアム・ファクトシートに関して
 3. 2025年度・2026年度のコンソーシアム活動に関して
（大学間単位互換、合同国内スタディツアー、学生主体の活動 等）
 4. 各連絡協議会委員からの共有事項
 5. その他

上記2回の連絡協議会、その後のメール等を通じた検討・協議により、2025年度は以下のような活動の実施及び活動実施に向けた検討が行われた。

- ① 各大学が実施する国際協力や開発途上国に関連する事業・活動等の情報を掲載し、コンソーシアム間の現状把握や連携活動の検討・実施に資する目的で作成した「ファクトシート」の随時更新・国際協力・開発途上国関連の研究者情報の追記（連絡協議会で記載情報を確認）
- ② 五女子大学合同国内スタディツアー（詳細は「4.1 五女子大学コンソーシアム合同国内スタ

ディツアー」を参照)

- ③ 各大学が開講する国際協力・開発途上国・SDGsに関する科目の単位互換の実施（詳細は「4.2 国際協力・開発途上国・SDGsに関する単位互換（津田塾大学・奈良女子大学）」を参照）
- ④ 各大学で行われている国際協力・開発途上国・SDGs 関連イベント情報の共有・相互参加の促進（継続実施）

【連絡協議会体制】 ※2026年3月現在

氏名	所属
【委員】	
由良 敬（座長）	お茶の水女子大学 グローバル協力センター長
北村 文	津田塾大学 女性研究者支援センター長
赤堀 三郎	東京女子大学 副学長
鍵和田 聡	奈良女子大学 学長補佐
宮崎 あかね	日本女子大学 副学長
【事務局】	
宮原 千絵	お茶の水女子大学 グローバル協力センター副所長
平山 雄大	お茶の水女子大学 グローバル協力センター講師
駒田 千晶	お茶の水女子大学 グローバル協力センターアカデミック・アシスタント

(2) カンボジア幼稚園教諭による附属幼稚園視察

- 日 時：2025年7月16日（水） 9：00～11：00
- 依頼元：カンボジア日本国際幼稚園（JISPP）
- 目 的：カンボジアにおいてカンボジア政府とも連携し日本式幼児教育の導入にて取り組んでいるモデル校のスタッフが、日本の幼児教育発祥の地である附属幼稚園を視察し、日本式幼児教育に関する理解を深め、カンボジアで提供する幼児教育の質の向上に資するため。
- 参加者：

氏名	氏名（ローマ字）	肩書き
渡邊 大貴	DAIKI WATANABE	JISPP 理事 / 通訳
増田 ちなみ	Chinami Masuda	JISPP 教育担当
リレット ペティト	Lilet Petitto	JISPP 園長
イエン ボルナス	Yhen Bornas	JISPP 副園長
チョンチャン ピセイ	Chon chan Pisey	JISPP 主任

5.2 学生の国際協力活動支援

(1) 「共に生きる」スタディグループについて・説明会開催

「共に生きる」スタディグループとは、国際協力や平和構築に関心を持ち「共に生きる」社会について自主的に学習・活動する学生のグループであり、グローバル協力センターはその活動を様々な形で支援している。グループのメンバーは、センターやメンバー有志が企画したイベントや勉強会にそれぞれの関心に応じて参加することができる。これらの学生企画イベントの案内、センター企画のイベントの案内、および、国際機関、NPO等のセミナー・イベント情報等については、スタディグループのメーリングリスト（登録メンバー数は約150名）にて発信している。今年度は75件の情報配信（2026年1月30日現在）を行った。

グローバル協力センターでは、毎年「共に生きる」スタディグループ説明会を実施しており、今年度は4月25日に対面形式で開催した。説明会では、新規メンバーの参加を呼びかけるとともに、途上国の教育支援や社会課題の解決を目指した活動をしている学生グループ・学生の紹介を行った。

【概要】

- 日時：2025年4月25日（金）12:30～13:00
- 場所：学生センター棟3階308（グローバル協力センター）室
- 内容：「共に生きる」スタディグループについて
国際協力活動に取り組む学生団体「STUDY FOR TWO お茶大支部」による活動報告
- 参加者9名



グローバル協力センターの活動紹介



STUDY FOR TWO お茶大支部の活動紹介

(2) JICA 東京特設インターンシッププログラムの実施

JICAの国内事業拠点であるJICA東京（所在地：渋谷区）より、同機関が毎年度独自に実施する特設インターンシッププログラム枠の提供がなされ、学内での公募・選考の結果、3名の学生（文教育学部言語文化学科1年2名、理学部生物学科4年1名）が参加した（東京大学、上智大学等他大学生も参加。全体人数10名弱）。

【概要】

- 実施期間・場所：2025年8月21日（木）～26日（火）（一部週末含む）・JICA 東京

- 内容：JICA 東京が実施する各種事業の説明、開発途上国から来日し JICA 東京に滞在する行政官等との交流、国際理解教育を実施する教員間の議論への参加等
- 実施にあたり、参加学生から誓約書を取り付け、保険加入を義務づけ、グローバル協力センターと JICA 東京とで覚書を締結。

【参加学生の所感（グローバル協力センターのウェブサイト記事から抜粋）】

教師を志す私にとって、教師海外研修の派遣後研修への参加は非常に貴重で、インターンシッププログラム全体を通して最も印象に残った経験でした。授業案の作成に携わり、「児童・生徒が世界の課題を自分の問題として考えられる授業とは何か」について、先生方と議論を重ねました。

報告会では、この教師海外研修をテーマに発表しました。研修の流れに加えて、参加前に抱いていたイメージと、インターンシッププログラムを経てその理解がどのように変化したかについても共有しました。報告会に出席された方からは、「教師海外研修が先生方の資質向上だけでなく、子どもたちへ国際理解をどのように伝え、持続的な学びにつなげるかまで考えられた研修だと分かった」という感想をいただきました。

今後も、生徒と共に世界を考え続ける授業づくりに向け、教育現場での学びや国際理解に関わる取り組みを重ねながら、世界を見つめる視点を養っていきたいです。

（文教育学部言語文化学科 1 年 小沢美奈）

5 日間の研修では、「戦争」と「宗教」という 2 つのテーマについて深く学ぶことができました。特に印象に残っているのは、ミンダナオにおける和平プロセスを支えた「信頼づくり」の実践です。和平合意前から粘り強く現地に入り続け、政治と現場を信頼でつなぐ JICA の姿勢から、国際協力における信頼の重要性を強く実感しました。また、ムスリムの研修員の方々に対する宗教的配慮の取り組みも印象的でした。お祈りの部屋や足洗い場の設置、ハラールへの対応など、宗教を尊重した環境づくりを知り、多文化共生における「見えない配慮」の大切さを学びました。

徽音祭当日は、多くの方々に支えられ、温かい雰囲気の中で発表することができました。発表後には多くの感想をいただき、第 26 代高校生平和大使として平和活動を行ってきた私自身の経験とインターンシッププログラムでの学びが自分の中で結びついたことを実感しました。今後はお茶の水女子大学で学びをさらに深め、将来は国際協力の現場で人と人をつなぐ役割を担いたいと考えています。

（文教育学部言語文化学科 1 年 佐藤綾音）

(3) 学生自主活動の支援

グローバル協力センターでは、「共に生きる」スタディグループメンバーの学生が実施・参加した以下のような活動の側面支援、発表機会（報告会開催、ウェブサイトでの掲載など）の提供等をおこなった。

1) STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部の支援

グローバル協力センターでは、現在全国 42 の大学に支部を持つボランティア学生団体 STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部の活動の側面支援を実施している。今年度も活動を紹介・報告する場の設定、教科書在庫保管・整理等の場所提供、活動広報等の支援を行った。

【学生による報告】

タイトル：STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 2025 年度活動報告

STUDY FOR TWO は現在全国 35 の大学に支部を持つ、ボランティアの学生団体です。「勉強したいと願うすべての子どもたちが勉強できる世界に」「FOR ME、 FOR TWO のボランティアが身近になる世界に」という 2 つの活動理念を軸として活動しています。学生から教科書を寄付していただき、新学期に定価の半額以下の値段で再販売しています。教科書販売の売り上げの一部を寄付し、日本の大学生と途上国の子どもたちの教育を支える活動を行っています。

現在、お茶の水女子大学支部では 1 年生から 4 年生までの 7 人で活動しています。主な活動として、週 1 回のオンラインミーティング、年に 2 回の教科書販売、大学構内の 8 か所と構外の 1 か所に設置している BOX での教科書回収を行っております。また、11 月の德音祭では、グローバル協力センターさんにお時間をいただき、お茶大生のみならず、他大学の学生や学生以外の方に向けて、私たちの活動についての発表をさせていただきました。

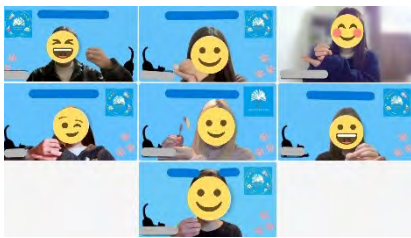
今年度は、年に 2 回の教科書販売に加え、参考書販売を 5 月と 10 月に実施しました。教科書販売の機関に、お茶大生から資格試験の対策になるような参考書の販売も行ってほしいというご要望を直接いただき、メンバーと話し合っ参考書販売の実施を決定しました。メンバーの数が比較的少ないという困難もありましたが、教科書等の販売を実施するために、そして私たちの活動理念を達成するために、それぞれの力を合わせる大切であるということに再度気づきかけとなりました。

教科書販売や参考書販売を多くの方にご利用いただき、1 年間で合計約 300 冊の本を売り上げ、国際 NGO の Room to Read を通じて、20 万円以上をタンザニアの女子教育プログラムと識字プログラムに寄付することができました。日頃の頑張りの成果として、教科書等の販売で売り上げ目標金額を超えることができたことで、メンバーが日ごろの成果を実感することはもちろん、ご協力いただいている大学の学生や職員の皆様への感謝を伝えることにもつながるのではないかと感じております。

STUDY FOR TWO は 2024 年から NPO 法人となり、2025 年には設立 15 周年を迎え、さらなる発展を目指しております。お茶の水女子大学支部でも、今後もますます発展していくために、改善点等を見つけ、課題解決に取り組み続けたいと考えております。

最後に、大学の学生や大学諸機関の職員の皆様をはじめ、日頃より私たちの活動にご理解をいただき協力してくださる方々に、深く御礼申し上げます。とりわけ、場の提供や活動の見守りなど、私たちの作業や販売などの活動にご協力してくださっているグローバル協力センターの皆様にはこの場を借りて、御礼申し上げます。今後も私たちは、活動を通して、途上国の子どもたちと日本の大学生の教育と学習活動を支えることができるよう、工夫を重ねていきたいと考えております。今後とも、STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部をよろしく願いいたします。

(STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 2025 年度代表 野本茉依)



ミーティングの様子



回収活動の様子



販売の様子

(2) 徽音祭（大学祭）における展示・発表

2025年11月8日・9日の2日間開催された徽音祭（大学祭）の学術企画として、お茶の水女子大学生による国際協力活動の報告（発表及び展示）を行った。具体的には、1) 海外実習科目「国際共生社会論実習」の報告、2) 五女子大学合同国内スタディツアーの報告（お茶の水女子大学から参加した3名）、3) JICA 東京インターンシッププログラム参加報告、4) STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部活動報告 を行った。

【学生による報告】（グローバル協力センターのホームページ記事より抜粋）

1) 海外実習科目「国際共生社会論実習」成果発表（第76回徽音祭学術企画）

① ブータン

11月8日、同日に開催された徽音祭にて、「国際共生社会論実習」の一環として行われたブータンスタディツアーへの参加学生2名より、調査研究の成果発表を実施しました。発表では、本スタディツアーの概要および、各自が現地で行った調査テーマについて、写真やエピソードを交えながら報告しました。

また、なかなか馴染みの薄い国であるブータンについて、地理的な特徴や文化的背景、社会制度に加え、国民全体の幸福を大切にする国策「GNH（国民総幸福量）」の理念についてもご紹介しました。あわせて、参加者の皆さまにも「自分にとっての幸福とは何か」を考えていただく参加型GNHワークを実施し、短い時間ながらも皆さまからのご意見や気づきを共有していただくことができました。皆さまの温かいご協力もあり、学生にとっても非常に実りのある学びの時間となりました。

さらに今回は、スタディツアーで交流した現地の大学生にもオンラインで特別出演いただき、ゾンカ語ミニ講座を実施しました。簡単な挨拶や日常のフレーズを紹介してもらい、ブータンの言語文化に触れられる貴重な時間となりました。会場からも積極的に反応をいただき、終始あたたかく和やかな雰囲気に包まれた講座となりました。

限られた時間ではありましたが、6月からの事前学習を含め5か月間の学びや気づきを可能な限り盛り込んだ、非常に内容の濃い発表となりました。当日ご来場いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。

微音祭での発表が本スタディツアーの集大成となりましたが、参加する機会をいただけたことで、ブータンという国の魅力に深く触れることができました。現地調査を通じて、人々のあたたかさや文化への誇りを肌で感じ、その豊かさを多くの方に知っていただきたいという思いが一層強いものとなりました。また、現地で出会えた皆さんとのご縁をこれからも大切に、今後も国際交流に対して前向きな姿勢で居続けたいと思います。ご参加・ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

(生活科学部人間生活学科4年 鮫島さくら子)



発表の様子



参加型 GNH ワークの様子

②カンボジア

11月9日(日曜日)、共通講義棟1号館402号室にて、今年8月21日から29日にかけて実施された「国際共生社会論実習」に参加した学生5名が、調査研究の成果を発表しました。また、同棟403号室ではポスター展示も行いました。

発表内容は、カンボジアにおける主権者教育、結婚観、高等教育へのアクセスにおける地域・ジェンダー格差、海外からの支援、カンボジア社会とジェンダーなどについて、現地で実施したインタビュー調査をもとに考察したものです。現地でのインタビューは難しい場面もありましたが、全員が自分の調査結果を堂々と発表する姿を見て、現地調査を頑張ったと改めて感じました。また、発表を通じて自らの調査内容や結果を見直す機会にもなり、自分の考えをさらに深めることができましたと思います。

当日は現地で通訳を担当してくださったブティさんもオンラインで発表を聞いてくださいました。久しぶりにお話しすることができて私たち自身もとても嬉しく、楽しい時間となりました。

発表の際には、現地で訪問した幼稚園のスタッフの方からいただいたカンボジアの伝統的な布「クロマー」を身に着けて登壇しました。さらに、カンボジアの市場で購入した巻きズボンの着方を披露したり、スタディツアーの写真をまとめたアルバムを展示したりすることで、ご来場の皆様にカンボジアの文化や魅力をより身近に感じていただけたと思います。カンボジアにはまだまだ多くの魅力があるので、ご来場くださった方々が少しでも関心を持ってくださっていただければ嬉しいです。

事前学習から今回の発表まで、約半年間にわたり履修生5人と先生と共にカンボジアについて学んできました。渡航前は国境での紛争問題もあり、正直なところ不安の方が大きかったのですが、頼れる仲間と私たちを支えてくださる先生のおかげで、最後まで充実した時間を過ごすことができました。仲間と共に議論し、学び、考えを深めたこの期間は、私の人生にとって非常に貴重な経験となりました。今回の経験や学び、そしてカンボジアへの関心をこれからも大切に、新たな学びへとつなげていきたいと思えます。

(生活科学部2年 奥みなみ)



発表の様子



通訳のブティさんと

2) 長野県駒ヶ根市スタディツアー活動報告

11月9日(日曜日)に開催された徽音祭で、駒ヶ根市スタディツアーの活動報告を行いました。スタディツアーには五女子大学コンソーシアムの各大学から15名が参加しましたが、徽音祭ではお茶の水女子大学の3名が発表およびポスター展示を実施しました。

ポスターでは、スタディツアー全体を通して感じたことや印象に残った出来事、参加前に立てた到達目標の達成状況、そして学習や研究に向けた抱負などをまとめました。発表では、ポスターの内容をさらに掘り下げ、駒ヶ根市での体験や気づきを、自分たちの思いや考えを交えて紹介しました。

発表や質疑応答を通じて、スタディツアーの経験を改めて振り返ることができ、学びをより深める機会になりました。また、スタディツアーでお世話になった、ネパール交流市民の会の北原



発表の様子

照美様にもご来場いただき、久しぶりにお会いすることができました。学んだことや感じたことを北原様に直接お伝えすることができ、心から嬉しく思いました。

活動報告を通して駒ヶ根市における様々な国際協力の取り組みに関心を持ってくださる方がいらっちゃって、大変光栄でした。今回、学びの成果を発信できたように、今後も駒ヶ根市や五女子大学コンソーシアムの学生とのつながりを大切にして、身近なところから自分たちにできることを実践していきたいと強く思いました。

(文教育学部人文科学科 1年 大坪理紗)

3) JICA 東京インターンシッププログラム参加報告

お茶大生3名は、8月下旬の5日間にわたって実施された JICA 東京特設インターンシッププログラムに参加しました。インターンシッププログラムでは、説明会や研修を通して、JICA が行う国際協力事業への理解を深めました。今回は、微音祭で行われた報告会に参加したお茶大生2名のコメントを紹介します。



発表の様子

教師を志す私にとって、教師海外研修の派遣後研修への参加は非常に貴重で、インターンシッププログラム全体を通して最も印象に残った経験でした。授業案の作成に携わり、「児童・生徒が世界の課題を自分の問題として考えられる授業とは何か」について、先生方と議論を重ねました。

本報告会では、この教師海外研修をテーマに発表しました。研修の流れに加えて、参加前に抱いていたイメージと、インターンシッププログラムを経てその理解がどのように変化したかについても共有しました。報告会に出席された方からは、「教師海外研修が先生方の資質向上だけでなく、子どもたちへ国際理解をどのように伝え、持続的な学びにつなげるかまで考えられた研修だと分かった」という感想をいただきました。

今後も、生徒と共に世界を考え続ける授業づくりに向け、教育現場での学びや国際理解に関わる取り組みを重ねながら、世界を見つめる視点を養っていきたいです。

(文教育学部言語文化学科 1年 小沢美奈)

5日間の研修では、「戦争」と「宗教」という2つのテーマについて深く学ぶことができました。特に印象に残っているのは、ミンダナオにおける和平プロセスを支えた「信頼づくり」の実践です。和平合意前から粘り強く現地に入り続け、政治と現場を信頼でつなぐ JICA の姿勢から、国際協力における信頼の重要性を強く実感しました。また、ムスリムの研修員の方々に対する宗教的配慮の取り組みも印象的でした。お祈りの部屋や足洗い場の設置、ハラールへの対応な

ど、宗教を尊重した環境づくりを知り、多文化共生における「見えない配慮」の大切さを学びました。

德音祭当日は、多くの方々に支えられ、温かい雰囲気の中で発表することができました。発表後には多くの感想をいただき、第26代高校生平和大使として平和活動を行ってきた私自身の経験とインターンシッププログラムでの学びが自分の中で結びついたことを実感しました。今後はお茶の水女子大学で学びをさらに深め、将来は国際協力の現場で人と人をつなぐ役割を担いたいと考えています。

(文教育学部言語文化学科1年 佐藤綾音)

最後に、今回このような貴重な機会をくださったグローバル協力センターの皆さま、JICA 東京の職員の皆さま、そして温かく迎えてくださった教師海外研修の先生方、報告会にお越しの皆さまに、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

4) STUDY FOR TWO お茶大支部 活動報告

11月8日に開催された德音祭にて、STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部の活動についての発表をさせていただきました。

発表の中で、参加者の皆様に「国際協力」のイメージをお訪ねし、ご意見をいただきました。多様な意見があることを学びながらも、私たちが大切にする

“FOR ME, FOR TWO”のボランティアについて中心にお話しさせていただきました。私たちの活動が支援先の国との双方向のコミュニケーションを大事にしていることや、私たち大学生がSTUDY FOR TWOの活動を通して様々な利益を得られていることを皆様に知っていただく機会となりました。

また、11月8日と9日を通して行っていたポスター展示においては、写真を交えて、私たちの活動についてより詳しくお伝えできたと感じております。当日の発表に参加できなかったメンバーからもコメントをよせてもらい、ポスターに掲載しました。STUDY FOR TWOでの活動を通して、メンバーがどのようなことを感じているのかを多くの方に見ていただけたことをとても嬉しく感じております。

今後もSTUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部の活動をより盛んにしていけるように、活動に力を入れつつ、私たちの活動が学生のみならず多くの方々が国際協力や教育支援に関して思慮を巡らすきっかけとなればと思っております。



発表の様子

(文教育学部人間社会学科2年 野本茉依)

IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育 に関する支援事業（教育・研究成果の 国際社会への還元）

IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）

1. 乳幼児ケアと就学前教育研修（独立行政法人国際協力機構（JICA）課題別研修）

1.1 概要

本学は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、「中西部アフリカ幼児教育研修」を12年間（2006～2017年度）行ってきた。2018年度からは、それまでの成果を継続するかたちで対象地域を拡大し「乳幼児ケアと就学前教育（アフリカ・中東）」として実施し、2023年度からは対象地域にアジア2カ国も含めている。今年度は、アフリカ・中東・アジア8カ国を対象に実施した。

研修終了時のアンケートでは、研修で掲げた6つの目標（①所属組織での問題点を発見・整理し、解決すべき課題を抽出する、②ECD（Early Childhood Development）の概念・内容・動向に対する理解を深める、③ECDにおける格差問題と是正策について理解を深める、④子どもの発達に応じた適切な保育内容・保育方法について理解を深める、⑤教員養成・研修のシステムに対して理解を深める、⑥ECDにおける評価について理解を深める）について、いずれも高い達成度・満足度が示された。研修員は、帰国後、今回の研修成果を活かし自国の乳幼児ケア・就学前教育の改善に取り組んでいく予定である。

1.2 研修背景

開発途上国においては財源不足と政府関係者のECD（early childhood development: 乳幼児ケアと就学前教育）に関する意識の低さから、国家政策としてECD分野を推進する専門人材が不足している状況がある。こうした状況を踏まえ、本研修では、特にECDへのアクセスや質の改善が急務の課題となっているアフリカ・中東・アジア地域を対象にその整備・普及を図るため、同分野の行政官や視学官、指導主事など指導的な立場の人材の育成と能力向上を行う。

1.3 2025年度の実施内容

- 参加研修員：中央の教育省、子ども省など、政策レベルで幼児教育や就学前教育を監督している省庁の管理職・担当官、もしくは教員を養成する大学の教員等8名（カンボジア、エジプト、キルギス、ラオス、リベリア、モンゴル、シエラレオネ、ベトナム）。また、本研修の具体的な成果を確認するため、バングラデシュ、インドネシア、ラオス、ベトナムから4名の昨年度参加研修員が11月27日にオンラインで参加した。
- 研修期間：2025年11月10日（月）～12月5日（金）

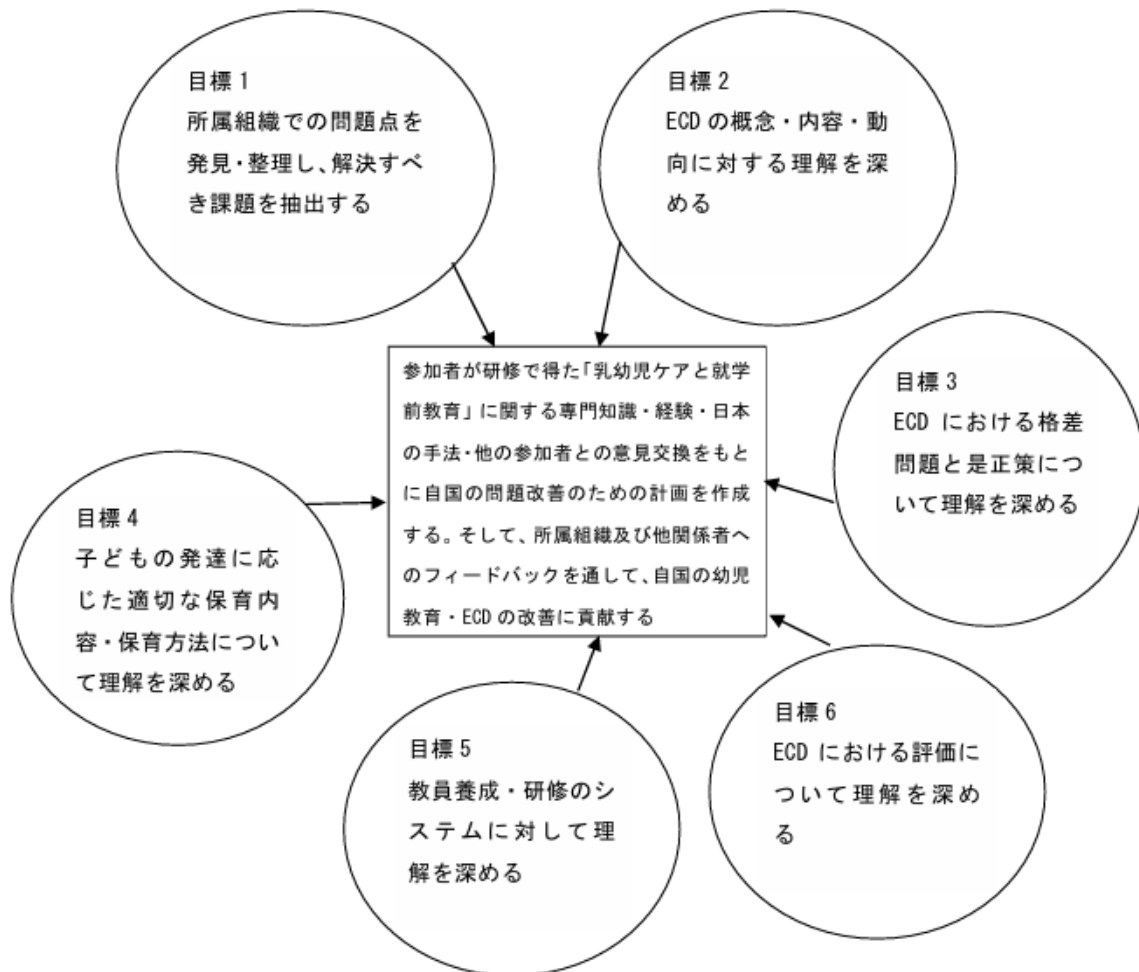
【プログラム概要】

以下の6つの目標に沿って、講義、教育機関視察、教員養成・研修機関視察、遊びを通じた教育や教材作成のワークショップ、研修員によるプレゼンテーション等を実施した。研修員の理解を確実なものにするため、定期的に振り返りも実施した。

- 主な訪問先（順不同）：聖隷クリストファー大学、聖隷クリストファー小学校、聖隷クリスト

ファー大学附属クリストファーこども園、ながかみこども園、東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎、筑波大学附属大塚特別支援学校、ふじようちえん、東京ゆりかご幼稚園、東京おもちゃ美術館、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校

乳幼児ケアと就学前教育研修 6つの単元目標



【日程表】

日付	時刻			形態	研修内容	講師又は見学先担当者等	
						氏名 (敬称略)	所属先及び職位名
11/10(月)	13:30	～	14:15		開講式		
	14:15	～	15:15	視察	お茶の水女子大学	平山雄大	お茶の水女子大学・講師
	15:15	～	16:45	講義	日本の幼児教育 (1) 制度と政策	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
11/11(火)	10:00	～	12:00	講義	日本の幼児教育 (2) 保育の質その他	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
	13:30	～	16:30	講義	論理的思考の芽生え	坪川紅美	松渓会おかさきこども園・ 総園長/JICA 青年海外協 力隊・技術顧問
11/12(水)	9:30	～	12:30	講義	幼児教育における評価 (QOLを中心に)	松本聡子	ベネッセ教育総合研究所・ 研究員
	午後				インセプションレポート・ プレゼン準備		
11/13(木)	10:00	～	12:00	視察	ふじようちえん	加藤久美子	ふじようちえん・副園長
	14:30	～	17:00	講義	保育内容と保育計画 (領域「環境」を中心に)	松島のり子	お茶の水女子大学・講師
11/14(金)	10:00	～	15:00	発表	インセプションレポート発表	宮原千絵	お茶の水女子大学・特任准 教授
11/17(月)	13:00	～	13:20		聖隷クリストファー大学訪問 (挨拶)	大城昌平	聖隷クリストファー大学・ 学長
	13:30	～	14:00	視察	学内施設・歴史資料館見学	太田雅子・ 今西野百合	聖隷クリストファー大学・ 教授
	14:40	～	16:00	講義	創造性を育む保育・教育—音楽	二宮貴之・ モーテン ヴァテン	聖隷クリストファー大学・ 教授・助教
11/18(火)	9:45	～	11:00	視察	発達支援事業所	伊藤信寿	NPO 法人むく
	11:20		12:00		シェアリングタイム 1	司会：研修員	
	12:00	～	13:00		ランチ交流会	グローバル教 育推進セン ター	
	13:25	～	15:00	講義	発達支援について	内山敏	聖隷クリストファー大学・ 准教授

	15:30	～	16:45	講義	子どもの保健・衛生・発育・栄養等について	市江和子	聖隷クリストファー大学・教授
11/19(水)	9:00	～	11:30	視察	インクルーシブ教育について	久保田幸年	ながかみこども園・園長
	12:00	～	12:50		ランチ交流会	太田雅子	聖隷クリストファー小学校・校長
	13:25	～	14:45	視察	小学校との接続 聖隷クリストファー小学校低学年クラス授業見学	山下浩	聖隷クリストファー小学校・校長補佐
	15:00	～	16:30	実習	ワークショップ 造形	梅村康子	聖隷クリストファー小学校・教諭
	16:30	～	17:00	討議	シェアリングタイム 2	司会：研修員	
11/20(木)	9:00	～	11:00	視察	食農保育について	富田知可子	連理の木の下の保育園道理の子・園長
	11:00	～	12:00		ランチ	渡邊拓真	聖隷クリストファー大学・助教
	12:20	～	12:50		ミカン狩り	渡邊拓真	聖隷クリストファー大学・助教
	13:25	～	14:45	講義	子どもと健康	和久田佳代	聖隷クリストファー大学・教授
	15:00	～	16:00	講義	体験を通じた学び（環境）	杉山沙旺美	聖隷クリストファー大学・助教
	16:00	～	16:30	討議	シェアリングタイム 3	司会：研修員	
11/21(金)	9:15	～	11:45	視察	幼保連携認定こども園	山崎五月	聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園・副園長
	11:55	～	13:10	講義	「教職実践演習」日本の保育者・教員養成一実習について	竹本石樹	聖隷クリストファー大学・教授
	13:10	～	14:00	討議	浜松での研修のまとめ	太田雅子	聖隷クリストファー大学・教授
11/25(火)	9:30	～	12:00	視察	東京ゆりかご幼稚園	内野彰裕	東京ゆりかご幼稚園・理事長・園長
	15:00	～	17:00	講義	障害児保育	齊藤彩	お茶の水女子大学・准教授
11/26(水)	9:30	～	12:00	視察	筑波大学附属大塚特別支援学校	佐藤知洋・ 佐藤義竹	筑波大学附属大塚特別支援学校・副校長・主幹教諭
	14:30	～	16:30	講義	母子保健	尾崎敬子・ 萩原明子	JICA・国際協力専門員

11/27(木)	9:30	～	12:00	視察	お茶の水女子大学附属小学校	小松祐子・ 片山守道	お茶の水女子大学附属小学 校・校長・副校長
	13:00	～	15:00	討議	帰国研修員 AP 実施状況調査及 び研修員との意見交換	宮原千絵・ 平山雄大	お茶の水女子大学・特任准 教授・講師
	15:00	～	16:30	視察	お茶の水女子大学こども園	刑部育子	お茶の水女子大学こども 園・園長
11/28(金)	10:00	～	12:00	講義	日本の教員養成	小原優貴	東京大学・准教授
	13:30	～	16:30	講義	子どもの言葉を育む保育	ドー小山祥 子	昭和女子大学・特命教授
11/30(日)	10:00	～	17:00	実習	幼児教育ネットワーク ワークショップ	坪川紅美	松渓会おかさきこども園・ 総園長/JICA 青年海外協 力隊・技術顧問
12/1(月)	10:00	～	10:05		【オープニング】本日の流れの 説明	花房佳奈	東京おもちゃ美術館・ディ レクター
	19:05	～	11:05	講義	【講話①】「遊び力が身につく おもちゃ実践論」	岡田哲也	東京おもちゃ美術館・ディ レクター
	11:20	～	12:00	講義	【講話②】認定 NPO 法人芸術 と遊び創造協会が行う取り組み ／東京おもちゃ美術館とは	貝原亜理沙	東京おもちゃ美術館・副館 長
	13:00	～	14:00	実習	【ワークショップ】身近な素材 でおもちゃを作ろう	天野乃慧	東京おもちゃ美術館・ディ レクター
	14:15	～	15:45	視察	館内ツアー	花房佳奈	東京おもちゃ美術館・ディ レクター
12/2(火)	9:30	～	12:00	視察	お茶の水女子大学附属幼稚園	出口哲生・ 高橋陽子	お茶の水女子大学附属幼稚 園・園長・副園長
	13:30	～	17:00	講義	子ども中心の保育	内田伸子	IPU・環太平洋大学・教授
12/3(水)	9:30	～	12:00	視察	日本の幼稚園教育（東京学芸大 附属幼稚園竹早園舎）	八木亜弥子	東京学芸大附属幼稚園竹早 園舎
	午後				アクションプラン作成		
12/4(木)	10:00	～	15:00	発表	アクションプラン発表	平山雄大	お茶の水女子大学・講師
12/5(金)	10:00	～	11:00	講義	取りまとめ／ 日本の幼児教育（3）	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
	11:15	～	12:00	討議	評価会		
	13:30	～	14:00		閉講式		

【研修員からのコメント（抜粋）】

※改善要望については、次年度の研修計画策定において配慮する予定。

- ・ 講師の説明や演習が学習者中心で、内容もよくまとまっていたため、プログラムの内容を十分に理解することができた。
- ・ 講義とプレゼンテーションはすべて分かりやすく、魅力的だった。
- ・ コースの内容を理解することを目的とした教材、アクティビティ、エクササイズゲームは非常に興味深く、自国でテストして実装するのに適していた。
- ・ 多くの事を学んだ。いつか自分の国で日本のこども園、保育所、幼稚園のモデルを自分で作るつもりなので、自身にとっては最初から最後まですべてが充実したものだだった。
- ・ 日本の保育者養成と遊びを通じた学びに関するコンテンツは、非常に役に立った。幼稚園やこども園の訪問も、日本の幼児教育の実態を理解するのに役立った。
- ・ プログラムの内容は現代の幼児教育が直面する課題の解決を目指したもので、非常に興味深いものだった。
- ・ 帰国後に本プログラムの成果をどのように活用するかを考えるうえで、元研修員との意見交換は非常に有益だった。
- ・ 来年の「元研修員との意見交換会」への参加を強く希望している。自身の経験を共有し、他の参加者から学び、議論に積極的に貢献したいと考えている。
- ・ 学校や幼稚園と文部科学省、都道府県の教育担当当局との連携、具体的な授業の実施、授業の最初から最後まででの立ち会い等（があれば、より充実したプログラムになったと思う）。
- ・ 地元の素材を教材として活用する方法をもっと探求したかった。
- ・ 公立幼稚園の現状も知りたかった。
- ・ 可能であれば山間にある施設と、海の近くにある施設の両方を見学してみたかった。

【写真】



開講式



ふじようちえん視察



お茶の水女子大学での講義



東京ゆりかご幼稚園視察



幼児教育ネットワークによるワークショップ



東京おもちゃ美術館訪問



お茶の水女子大学こども園視察



閉講式

2. アフガニスタン Mosaic for Afghan Women モザイク作品寄贈

【背景】

2021年10月、世界のモザイク作家たちが、アフガニスタンの女性がいつの日か平等な権利と自由を獲得することを願い、またアフガニスタンの豊かな文化を称えるために Mosaic for Afghan Women というプロジェクトを立ち上げた。同プロジェクトには世界約 43 カ国のモザイク作家 1,300 人以上が参加し、モザイク小作品を作り、大きなスカーフの形状に統合して、多くの国で美術館やギャラリー、教育機関などの公的スペースで展示してきた。アジア地域でも同様の作品が作製され、これまで東京、京都等で展示会を開催してきたが、恒久的な展示を希望し本学に寄贈を打診、五女子大コンソーシアムとして、また直接的な留学生受け入れ等を通じアフガニスタン女性教育支援を行ってきた本学がその寄贈を受け、2026年3月、国際交流留学生プラザ3階に設置した。同年3月18日に、関係者によるお披露目会を開催した。



【お披露目会内容】

日時：2026年3月18日（水曜日） 14:00～15:30

場所：お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ 2階 多目的ホール

内容：

- モザイク画のお披露目
- 本モザイク作品について（Mosaic for Afghan Women プロジェクト）
- お茶の水女子大学等によるアフガニスタン女性教育支援の歩み（森義仁教授）
- 2022年度アフガニスタン勉強会参加学生による活動の振り返り（学部生）
- 懇談会

【出席者】

35名

【当日の写真】



森教授による、お茶の水女子大学等によるアフガニスタン女性教育支援の歩みの説明



2022年度アフガニスタン勉強会参加学生による活動振り返り



アフガニスタン女性教育支援関係者と Mosaic for Afghan Women プロジェクト関係者との記念写真

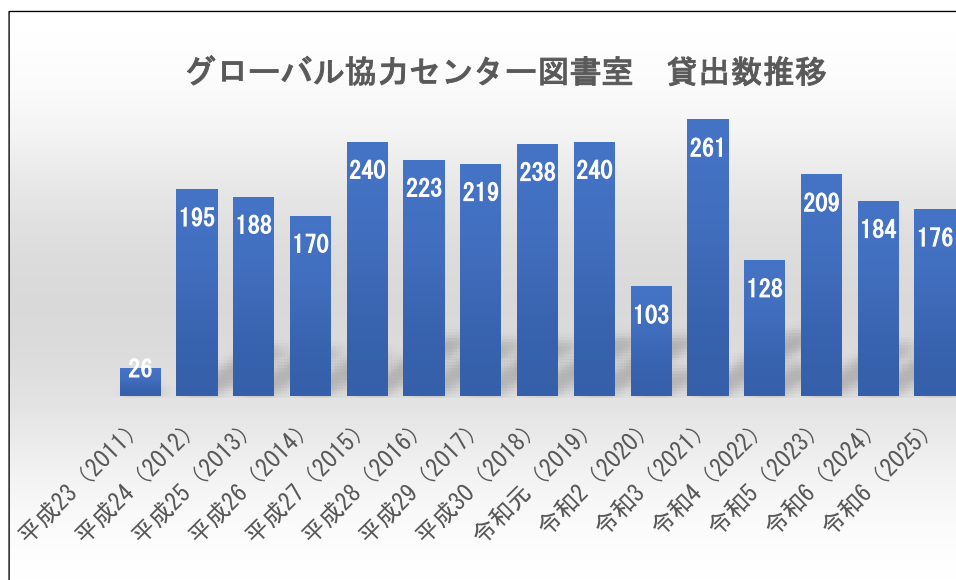
V. その他

V. その他

1. グローバル協力センター図書室運営

グローバル協力センター図書室は平成 23（2011）年から開室しており、国際協力、平和構築、開発に関する教育・研究、学習に必要な図書およびその他の資料を収集・管理し、お茶の水女子大学学部生、大学院生、附属高校性、卒業生および教職員の利用に供するように務めている。2025 年度は 24 冊図書を受入れ、2026 年 3 月 11 日時点で 2,293 冊蔵書している。開室時間は祝祭日、夏季・冬季一斉休業日を除く月曜日から金曜日の 10：00～16：00 としているが、センタースタッフが対応可能な場合は時間外でも利用が可能である。貸出方法はセンターに利用登録をし、直接貸出、返却をする。年間開室日について、2025 年度は 226 日であった（一部予定）。2025 年度の延べ利用者数は 59 人で、内訳は学部生 42 人、大学院生 8 人、教職員 9 人（複数回利用者あり）で 176 冊の貸出があった（2026 年 3 月 11 日時点）。新規利用登録は 17 人であった（同）。平成 23（2011）年のセンター図書室開室以来延べ 2,800 冊の貸出を行ったこととなる（2026 年 2 月 27 日時点：下記図参照）。

利用者は、附属図書館の蔵書検索 OPAC で資料を検索し来室している。センター図書室の貸出期間は学部生でも 4 週間（貸出予約がない場合は貸出延長可）であり、返却ボックスをセンター室前に設置し、利用者の都合のよい時間に返却ができるよう工夫している。貸出本については、台帳と Access で管理し、利用者にはメールで返却のリマインドを行い、長期未返却の利用者が生じないように注意を払っている。



2. 情報発信（ウェブでの発信、パンフレット更新など）

2.1 ホームページによる情報発信

グローバル協力センターのホームページは、センターが主催・協力する各種イベント（公開講座、講演会、大学間連携イベント、履修説明会など）の学内外への通知・案内と活動報告を中心とした情報を掲載している。

2025年度はグローバル協力センターが主催するイベント等（SDGs セミナー8回、途上国研究・国際協力分野海外調査支援、「国際共生社会論実習」（海外スタディツアー）、学生自主活動、ブータン連続セミナー15回等）の開催情報を日本語で36件、英語で3件、新着情報（実施報告）を日本語で49件、英語で14件掲載した（いずれも2026年3月11日時点）。また、2023年度からは五女子大学コンソーシアム連絡協議会が再開されたことに伴い「五女子大学コンソーシアム」の活動紹介ページをホームページ内に開設し、関連情報を掲載している。活動報告は、「共に生きる」スタディグループメンバーをはじめとするイベント参加学生、及びグローバル協力センター所属教員・スタッフが執筆している。

2.2 メーリングリストによる情報発信

2025年度の「共に生きる」メーリングリストへの登録者は150名（2026年2月27日時点）となった。メーリングリストでは、学内及び学外（国連機関、JICA、NGO等が主催するもの）のイベント情報や「共に生きる」スタディグループの活動情報を92件（2026年3月11日時点）発信し、関連するイベント等への関心を高めるきっかけを作った。

2.3 大学メールマガジン、公式 SNS 等による情報発信

上記以外の広報手段として、学内者に向けてイベント情報を発信する場合は大学メールマガジン（OchaMail）、学内掲示板及び電子掲示板（Digital Signage）、Slack（Ochat）を利用し、一般向けに広く発信する場合は大学ホームページ、Instagramを利用する等、よりタイムリーかつ広範囲にグローバル協力センターの活動や取組みを発信することに努めた。また、2025年度はFacebook ページを開設した。

2.4 パンフレットによる情報発信

グローバル協力センターでは、2022年度以降、コンパクトなA4版のパンフレットの更新・編集・印刷を行っており、今年度も日本語版の更新、英語版の作成・印刷を行った。更新したパンフレットPDF版はグローバル協力センターホームページに掲載済である。

パンフレットは、大学院オープンキャンパス（4月開催）や学部オープンキャンパス（7月開催）の来訪者、海外スタディツアーにおける訪問先等に配布し、その活動や取組みを発信している。

【日本語パンフレット】(3枚折・表)

グローバル協力センターとは

当センターは、国際協力を通じて女子教育を促進するための活動拠点として、2003年7月に「開発途上国女子教育協力センター」として開設されました。

2008年4月に「グローバル協力センター」に改組され、国際協力、平和構築に関するお茶の水女子大学の教育、研究、国際貢献を促進しています。

また、2017年からは、「持続可能な開発のための2030アジェンダ・持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」を巡って、議論を深める機会を提供するとともに、大学の国際協力に取り組んでいます。



Access Map

- ・東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷」駅より徒歩7分
- ・東京メトロ有楽町線「護国寺」駅より徒歩8分
- ・都営バス「大塚二丁目」停留所より徒歩1分



共に
生きる



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

お茶の水女子大学グローバル協力センター
Global Collaboration Center (GCC)

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 (学生センター棟308室)

TEL/FAX : 03-5978-5546
E-mail : info-cwed@cc.ocha.ac.jp
<https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/>



グローバル協力センター
Global Collaboration Center



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

(3枚折・裏)

国際的な課題に関する教育・研究と女性リーダーの育成

調査研究・自主活動支援

国際的な課題について、本学学生が調査研究や自主活動を行い、解決につながる道筋を見出してもらうことを目指し、海外調査支援や活動の支援等を実施しています。

- ・「産上国研究・国際協力分野海外調査支援」
- ・「共に生きる」スタディグループ学生の自主活動支援
- ・大学関連イベント
- ・センター図書室開室・貸出
- ・JICA東京特設インターンシップ
- ・国際協力分野のキャリア等の情報提供

開発途上国の社会経済、国際協力、NPO等に関する授業

NPOや国際協力実務経験を有するセンター所属の教員が授業・演習を開設しています。スタディツアーでは、講義・文献等から学んだことを基礎としつつ、開発途上国の現場を実際に訪問し、フィールドワークを通して途上国の課題や国際協力に関する理解を深め、自らが何をしたいか、よいのかを強く意識してもらうことを目指します。

【2025年度の実績】

- ・国際共生社会論実習 (全学共通)
- ・リベラルアーツ演習 (国際協力とSDGs)
- ・平和と共生演習 (全学共通)
- ・国際協力特論 (グローバル文化学専攻)
- ・NPO入門 (全学共通)
- ・NPOインターンシップ (LA)

グローバル協力センターの取り組み

シンポジウム・講演会・セミナー

国際的な課題解決に向けて活躍している専門家の講演を通して、どのような課題があるのか、どのようにしてそれらの課題に挑戦していけばよいのかなど、学生自らが目標を見出していく場を提供することにより、女性リーダー育成を目指します。

【2025年度の実績】

- ・持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー
- ・「国際協力の現場を知る」連続セミナー
- ・ブータン連続セミナー
- ・「平和と共生演習」における特別講義

開発途上国の女子教育・乳幼児ケア・就学前教育に関する支援

開発途上国の女子教育支援のための五女子大学コンソーシアム

本学では、日本政府のアフガニスタン復興支援の一環として、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学と連携し、2002年に五女子大学によるコンソーシアムを締結しました。コンソーシアムのもと、アフガニスタン女子教育復興のための教員研修を、2002年から2012年の間実施し、女性教員等169名を受け入れました。五女子大学コンソーシアムは、2006年より支援対象を開発途上国の女子教育に広げています。

- ・五女子大学コンソーシアム協定調印 (2022年更新)
- ・五女子大学コンソーシアム協定に基づく連絡協議会の開催 (年2回)
- ・五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー
- ・津田塾大学、奈良女子大学との国際協力・開発途上国・SDGsに関する科目の単位互換

JICA課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育」

JICA (独立行政法人国際協力機構) の委託を受け、途上国においても重要性が高まっている幼児教育分野の人材育成のための研修を実施しています。「幼児教育」をテーマとして2006年より12年間にわたって中西部アフリカ諸国から135名の研修員を、2018年からは「乳幼児ケアと就学前教育」をテーマとしアフリカ・中東・アジア諸国から81名の研修員を受け入れ、同分野の政策・実務レベルでの人材育成に貢献しています。

野々山基金

本学卒業生故野々山恵美子様の遺贈により設立された基金を原資として、2012年以降、研究支援とネットワーク強化のため、毎年2名のアフガニスタン女性大学教員等を対象に短期研修を行い、2019年までに16名を受け入れました。また、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) と連携し、アフガニスタンにおけるオリジナル絵本作成と学校図書館への配布支援を実施し、これまでに9タイトル、計21,600冊のオリジナル絵本を作成・配布しました。2023年からは、五女子大学コンソーシアム活動、開発途上国に関するテーマでの海外調査支援など、開発途上国への協力を軸とした活動に取り組んでいます。

◆センター主催のセミナーやシンポジウム、報告書など活動成果についてはホームページにて随時公開しています。
<https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/index.html>


情報共有、ネットワーキング

「共に生きる」スタディグループを通じて、スタディグループメンバーの学生による自主活動を支援するとともに、メーリングリストによる国際協力や平和構築に関する学内外の講演会、セミナー、イベント等の情報提供を行っています。

【英語パンフレット】（3枚折・表）

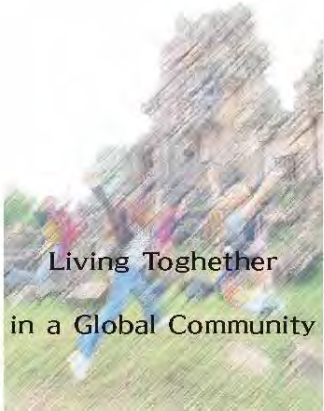
About us

The Global Collaboration Center was founded as the Center for Women's Education and Development, in July 2003 to promote the University's international cooperation in support of women's education. Renamed the Global Collaboration Center in April 2008, the Center has since pursued the broader mission of planning and coordinating the University's educational, research, and social action programs related to peace-building and international collaboration. Since 2017, the Center has also been providing opportunities to deepen discussions around the "the 2030 Agenda for Sustainable Development" and the Sustainable Development Goals (SDGs), and are committed to the University's international cooperation.




Access Map

- 7-minute walk from Myogadani Station on the Tokyo Metro Marunouchi Subway Line
- 8-minute walk from Gokokuji Station on the Tokyo Metro Yurakucho Subway Line
- 1-minute walk from Otsuka 2-chome bus stop on the Toei Bus




**Living Together
in a Global Community**



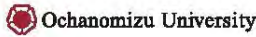
Ochanomizu University
Global Collaboration Center (GCC)
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610
(3rd Floor, Student Service Building)

TEL/FAX : +81-3-5978-5546
E-mail : info-cwed@cc.ocha.ac.jp
<https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed-en/>

Feb. 2026



Global Collaboration Center



（3枚折・裏）

Nurturing Women's Leadership to Cope with Global Issues

Support for Overseas Research and Activities

The Center provides support for overseas research and student voluntary activities with the aim of encouraging students to explore, investigate and find solutions to international issues.

- support for overseas research conducted by graduate students
- support for student voluntary activities
- conducting inter-college events
- library services
- JICA Tokyo Special Internship Program
- providing information about international cooperation etc.

Lectures on International Cooperation and NGOs Activities

The faculty of the Center, who have backgrounds in international cooperation and practical experience working with NGOs provide lectures and exercises. Through pre-study research and fieldwork, students are provided with a chance for deepening their understanding of issues in developing countries and international cooperation, and with the aim of making themselves aware of what has to be done.

[Recent Activities]

- Convivial Global Society (Cambodia/Bhutan study tour)
- Seminar of Liberal Arts (International Cooperation and SDGs)
- Advanced Lecture of International Cooperation
- Peace and Coexistence
- Introduction to NPO・NPO Internship

Initiatives of the Global Collaboration Center

Symposia/Public Lectures/Seminars

The Center aims to foster female leadership by giving students the opportunity to discover challenges, solutions and their own goals through lectures by professionals who are active in SDGs related issues.

[Recent Activities]

- SDGs (Sustainable Development Goals) seminar
- "Understanding the Frontlines of the International Cooperation" seminar series
- Bhutan seminar series
- special lecture on "Seminar on Peace and Coexistence"

Support for Women's Education and Early Childhood Development

Five Women's University Consortium to support women's education in developing countries

As a part of reconstruction support to Afghanistan by the Japanese government, Ochanomizu University, in collaboration with Tsuda University, Tokyo Woman's Christian University, Nara Women's University, and Japan Women's University, concluded a five women's university Consortium in 2002 to provide training for Afghan female educators. From 2002 through 2012, 169 educators in total participated in the training. Since 2006, the Consortium has expanded its support to women's education in developing countries.

- renewal of the Five Women's University Consortium Agreement (2022)
- liaison councils under the Five Women's University Consortium Agreement (twice a year)
- the Five Women's University Consortium joint study tour in Japan
- credit transfer with Tsuda University and Nara Women's University for courses related to international cooperation, developing countries, and the SDGs

JICA Training Program for Early Childhood Care and Education

Commissioned by Japan International Cooperation Agency (JICA), the training programs have been provided to develop human resource in the field of early childhood care and education, an area of growing importance in developing countries. From 2006 to 2017, the programs trained 135 participants from ten countries in Central and West Africa. Since 2018, the program has been conducted under the theme of infant care and preschool education for participants from Africa, the Middle East, and Asia. A total of 81 participants have taken part, contributing to human resource development at policy and practical levels.

Nonoyama Endowment

Funded by an endowment established with a bequest from the late Emiko Nonoyama, a graduate of Ochanomizu University, since 2012, short-term training program for Afghan women teachers/researchers has been provided to support research and strengthen networks, with 16 participants accepted by 2019. Also, in collaboration with Shanti Volunteer Association, a total of 21,600 original picture books with 9 titles have been created and distributed to school libraries in Afghanistan. From 2023, the Center have been engaged in activities centered on cooperation with developing countries, including the Five Women's University Consortium initiatives and support for overseas research on themes related to developing countries.

Information Sharing and Networking

Through "Living Together in a Global Community" Study Group, the Center supports student voluntary activities. Through its mailing list, information about lectures, seminars, and events in/outside the university is provided.

◆Our activities and reports are available on the following website.

<https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed-en/>



VI. 資料

VI. 資料

1. 各種イベント・案内のポスター

【持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー (第 48-55 回)】

お茶の水女子大学
グローバルセンター公開講座 第 48 回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

世界の栄養問題：
地球も人々も健康になる食事の実現に向けて

講師 野村 真利香 氏
独立行政法人国際協力機構・国際協力専門員

2025 年 5 月 1 日 (木) 15:00 ~ 16:30

会場：文教育学部 1 号館 301 室

対象：お茶の水女子大学学生・関係者、関心のある一般の方

【お問合せ】お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所
【お問合せ】お茶の水女子大学グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp
【詳細 URL】https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/event/e20250501s.html

お茶の水女子大学
グローバルセンター公開講座 第 49 回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

尊厳と SDGs - 「誰も取り残されない」社会を目指して

2025 年 5 月 19 日 (月) 10:40 ~ 12:10

講師 峯陽一 氏
独立行政法人国際協力機構 (JICA) 経方員手前開発研究所

2025 年 5 月 19 日 (月) 10:40 ~ 12:10

会場：国際交流留学生プラザ 2 階多目的ホール

対象：お茶の水女子大学学生・関係者、関心のある一般の方

【お問合せ】お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所
【お問合せ】お茶の水女子大学グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp
【詳細 URL】https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/event/e20250519.html

お茶の水女子大学グローバル協力センター学内公開講座
第 50 回 持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

カンボジアの幼児教育を考える

2025 年 6 月 17 日 (火曜日) 10:40 ~ 12:10

会場：国際交流留学生プラザ 3 階セミナー室

対象：お茶大関係者、関心のある一般の方

講師 石塚 咲 氏
公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 国内事業課 課長

【お問合せ先】お茶の水女子大学グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp
【参加申込】お茶の水女子大学グローバル協力センター https://x.gd/HGuuHhからお申し込みください。
【申込締切】6 月 16 日 (月) 17:00
【詳細はこちら】https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/event/e20250617.html

お茶の水女子大学グローバル協力センター
第 51 回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

現場から考える
多文化共生の今

2025 年 6 月 19 日 (木) 15:00 ~ 16:30

会場：文教育学部 1 号館 301 室

対象：お茶の水女子大学学生、関係者、関心のある一般の方

講師 谷口 友理 氏
独立行政法人国際協力機構 横浜センター 市民参加協力課 国際協力推進員

【お問合せ】お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所
【お問合せ】お茶の水女子大学グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp
【詳細 URL】https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/event/e20250619.html

お茶の水女子大学 グローバル協力センター持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

「質の高い教育をみんなに」

池田 亜美氏



独立行政法人国際協力機構 (JICA) 緒方真子平和開発研究所 主任調査役兼研究員。大学院在学中に JICA 海外協力隊 (ボンジュラス短期、JICA インターンシップ (ボリビア) 参加、JICA 入籍後、青年海外協力隊事務局、人間開発部基礎教育グループ、ミャンマー事務所、東南アジア・太平洋部 (広島)、広島大学出向を経て、現職。

国際協力、平和構築、SDGs (持続可能な開発目標) に関するお茶の水女子大学の教育、研究、国際貢献を促進するグローバル協力センターでは、このたび「国際協力の現場を知る」連続セミナーを開催します。開発途上国が抱える現状や課題、解決に向けて、国際協力の現場で活躍されておられる専門家をお招きし、JICA による開発途上国での具体的な取り組みについてお話しいただきます。国際協力の現場について詳しく知り、国際協力や進路について考える貴重な機会です。関心のある方は、是非ご参加ください。

11月6日 15:00 ~ 16:30
国際交流留学生プラザ3階セミナー室

【お問合せ・申込先】お茶の水女子大学グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp
【詳細 URL】https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/event/e20251106.html

お茶の水女子大学 グローバル協力センター持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

「ジェンダー平等と女性のエンパワメントに向けて：国際協力の現場から」

11月13日 15:00 ~ 16:30
国際交流留学生プラザ2階多目的ホール

宇佐美 茉莉氏



独立行政法人国際協力機構 (JICA) 国際協力専門員 (ジェンダーと開発)。学際的ジェンダースタディーズ修士。JICA にて、ジュニア専門員、ニカラガ家族とコミュニティのための社会リスク予防・ケア総合行政サービス能力強化プロジェクト・長期専門家、パキスタンジェンダーに基づく暴力 (GBV) 被害者支援における被害者中心アプローチ促進支援アドバイザーを経て現職。専門・関心分野は、GBV、女性のエンパワメント。

田島 冬馬氏



独立行政法人国際協力機構 (JICA) ガバナンス・平和構築部ジェンダー平等・貧困削減推進室職員。22年に新卒で入籍し、資金協力部に非営利資金協力の実施監理を担当。24年より現部署にて、JICA 事業のジェンダー主流化やジェンダー主要目的案件の実施、形成等を担当。

国際協力、平和構築、SDGs (持続可能な開発目標) に関するお茶の水女子大学の教育、研究、国際貢献を促進するグローバル協力センターでは、このたび「国際協力の現場を知る」連続セミナーを開催します。開発途上国が抱える現状や課題、解決に向けて、国際協力の現場で活躍されておられる専門家をお招きし、JICA による開発途上国での具体的な取り組みについてお話しいただきます。国際協力の現場について詳しく知り、国際協力や進路について考える貴重な機会です。関心のある方は、是非ご参加ください。

【お問合せ・申込先】お茶の水女子大学グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp
【詳細 URL】https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/event/e20251113.html

お茶の水女子大学 グローバル協力センター持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

「グローバルヘルスと日本～パンデミックの脅威に世界と日本はどう立ち向かったか」

瀧澤 郁雄氏



ハーバード大学公衆衛生大学院で人口・国際保健学の修士号を取得。1992年に国際協力事業団 (当時) に入団し、30年以上にわたり、アジア、アフリカ、中東、南北アメリカなどをさまざまな地域で、JICA の保健および保健関連プロジェクト、プログラムに携わり、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC)、パンデミックの予防、準備、対応 (PPRE)、技術・社会的イノベーションの適用など、幅広い開発課題に取り組んできました。新型コロナウイルス感染症パンデミック時には、JICA の組織全体でパンデミックへの対応を促進するために設立された新型コロナウイルス感染症対策協力推進室の室長を務めた。現在は、グローバルヘルスに焦点を当て、人間開発クラスター (健康と教育) における JICA 研究所の研究プロジェクトを統括している。

国際協力、平和構築、SDGs (持続可能な開発目標) に関するお茶の水女子大学の教育、研究、国際貢献を促進するグローバル協力センターでは、このたび「国際協力の現場を知る」連続セミナーを開催します。開発途上国が抱える現状や課題、解決に向けて、国際協力の現場で活躍されておられる専門家をお招きし、JICA による開発途上国での具体的な取り組みについてお話しいただきます。国際協力の現場について詳しく知り、国際協力や進路について考える貴重な機会です。関心のある方は、是非ご参加ください。

11月20日 15:00 ~ 16:30
国際交流留学生プラザ3階セミナー室

【お問合せ・申込先】お茶の水女子大学グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp
【詳細 URL】https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/event/e20251120.html

グローバル協力センター公開講座第55回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

紛争地、被災地に生きる人々の声～取材から見てきたこと～

3月5日 (木曜日) 18:00 ~ 19:30
お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ2階多目的ホール

安田 菜津紀氏



1987年神奈川県生まれ。認定NPO法人 Dialogue for People (ダイアログフォーピープル/D4P) フォトジャーナリスト。同団体の副代表。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や露宿、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、津波地を記録し続けている。

1987年神奈川県生まれ。認定NPO法人 Dialogue for People (ダイアログフォーピープル/D4P) フォトジャーナリスト。同団体の副代表。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や露宿、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、津波地を記録し続けている。

シリアでは長らく過激な弾圧や戦争が続き、パレスチナ・ガザ地区ではイスラエルによる爆撃で多くの人が犠牲になってきました。果たしてそれは、海を向こうの、自分たちとは遠い問題なのでしょうか？東日本大震災で被災地に出会った人々の行動が、遠いと思われがちな地との心距離を縮めてくれました。こうした取材を写真でお伝えしながら、私たちがどんな未来を選んでいきたいのかを、改めて考えたいと思います。

・お茶大関係者および関心のある一般の方
・参加無料・対面のみ・要事前申込

【お問合せ先】右のQRコードあるいは、https://x.gd.uo004 からお申し込みください。
【申込締切】3月4日 (水) 17:00
【詳細 URL】https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/event/e20260305.html

【2025年度ブータン連続セミナー】

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所 共催



2025年度 第①回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【9月8日セミナーは、日本ブータン研究所の定例勉強会（第201回ブータン勉強会）と兼ねます。】

◆日時：
2025年4月25日（金） 15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（61）
—『Curly Tales: One World Ep4. Bhutan 10 Day Itinerary: Festivals, Off Beat Wonders & Cultural Secrets』（インド・2024年）—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hirayama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所 共催



2025年度 第②回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【9月8日セミナーは、日本ブータン研究所の定例勉強会（第202回ブータン勉強会）と兼ねます。】

◆日時：
2025年5月23日（金） 15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（62）
—『冒險者探長 (Lei's adventure)』『344集 不丹人具的幸運嗎？
走進不丹國王愛情畫話 探訪不丹藏鏡師』（中国・2023年）—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hirayama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所 共催



2025年度 第③回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【9月8日セミナーは、日本ブータン研究所の定例勉強会（第203回ブータン勉強会）と兼ねます。】

◆日時：
2025年6月13日（金） 15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（63）
—『冒險者探長 (Lei's adventure)』『346集 不丹是世界上旅行最貴的国家
當探長抽查不丹農村了解當地人員實生活品質』（中国・2023年）—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hirayama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所 共催



2025年度 第④回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【9月8日セミナーは、日本ブータン研究所の定例勉強会（第204回ブータン勉強会）と兼ねます。】

◆日時：
2025年7月4日（金） 15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（64）
—『I01 EAST』『Bhutan's Climate Crisis』（カタール・2025年）他—

◆コメンテーター：
高橋洋氏
（日本ブータン研究所研究員／『地球の歩き方 ブータン』編纂者）
平山雄大（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hirayama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催

2025年度 第⑥回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る建構に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【詳細はこちら】 <https://www.socha.ac.jp/~gcs/2025/06/>（2025年度ブータン連続セミナー事務局）を参照してください。

◆日時：
2025年7月18日（金） 15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（65）
—『60 Minutes』「Bhutan Building Mindfulness City to Create Jobs, Lure Young Bhutonesse Home from Abroad」（アメリカ・2024年）他—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hirayama.takehiro@socha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催

2025年度 第⑥回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る建構に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【詳細はこちら】 <https://www.socha.ac.jp/~gcs/2025/06/>（2025年度ブータン連続セミナー事務局）を参照してください。

◆日時：
2025年8月8日（金） 15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（66）
—『CNA Correspondents』「Can Bhutan's New Megacity Help Reduce High Youth Unemployment & Brain Drain?」（シンガポール・2024年）他—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hirayama.takehiro@socha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催

2025年度 第⑦回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る建構に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【詳細はこちら】 <https://www.socha.ac.jp/~gcs/2025/07/>（2025年度ブータン連続セミナー事務局）を参照してください。

◆日時：
2025年9月5日（金） 15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（67）
—『DW Documentary』「Bhutan: A Journey to the Unknown South」（ドイツ・2024年）—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hirayama.takehiro@socha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催

2025年度 第⑧回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る建構に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【詳細はこちら】 <https://www.socha.ac.jp/~gcs/2025/08/>（2025年度ブータン連続セミナー事務局）を参照してください。

◆日時：
2025年10月3日（金） 15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（68）
—『Tigers of the Dragon Kingdom』（ブータン・2023年）—

◆コメンテーター：
高橋洋氏
（日本ブータン研究所研究員／『地球の歩き方 ブータン』編集者）
平山雄大（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hirayama.takehiro@socha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催



2025年度 第⑨回 ブータン連続セミナー

◆ 全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎年ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【今回のセミナーは、日本ブータン研究学会の共同協賛（第10回ブータン連続セミナー）を兼ねます。】

◆ 日時：
2025年10月17日（金） 15:00～16:30

◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（69）
—『Bhutan's Democracy: A Decade On』（ブータン・2019年）—

◆ コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆ 協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆ 問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hiroyama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催



2025年度 第⑩回 ブータン連続セミナー

◆ 全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎年ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【今回のセミナーは、日本ブータン研究学会の共同協賛（第10回ブータン連続セミナー）を兼ねます。】

◆ 日時：
2025年11月7日（金） 15:00～16:30

◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（70）
—『Making a Difference』（ブータン・2018年）—

◆ コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆ 協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆ 問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hiroyama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催



2025年度 第⑪回 ブータン連続セミナー

◆ 全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎年ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【今回のセミナーは、日本ブータン研究学会の共同協賛（第11回ブータン連続セミナー）を兼ねます。】

◆ 日時：
2025年11月21日（金） 15:00～16:30

◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（71）
—『Made in Bhutan』（ブータン・2013年）—

◆ コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆ 協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆ 問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hiroyama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催



2025年度 第⑫回 ブータン連続セミナー

◆ 全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎年ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【今回のセミナーは、日本ブータン研究学会の共同協賛（第12回ブータン連続セミナー）を兼ねます。】

◆ 日時：
2025年12月19日（金） 15:00～16:30

◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（72）
—『Interview with Tshering Tobgay: Bhutan Prime Minister on the Country's Economy, Culture, Environment』（シンガポール・2024年）—

◆ コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆ 協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆ 問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hiroyama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所 共催



2025年度 第⑬回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【今回のセミナーは、日本ブータン研究所の定例活動（第13回ブータン連続セミナー）とさせていただきます。】

◆日時：
2026年1月9日（金）15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（73）
—「Bhutan PM Tshering Tobgay on Building the Silicon Valley of the East, and How It Will Help India」（インド・2024年）—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hiroyama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所 共催



2025年度 第⑭回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【今回のセミナーは、日本ブータン研究所の定例活動（第14回ブータン連続セミナー）とさせていただきます。】

◆日時：
2026年2月6日（金）15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（74）
—「Hello from Bhutan Documentaries: Pema Gatsel Like Never Seen Before」（ブータン・2024年）—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hiroyama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所



2025年度 第⑮回 ブータン連続セミナー

◆全体概要：
本セミナーは、南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れることを主目的とした、地域研究型のセミナーです。初學者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、①映像作品の紹介と視聴、②コメンテーターからの解説、③質疑応答という流れで実施します。ぜひ気軽にご参加ください。
【今回のセミナーは、日本ブータン研究所の定例活動（第15回ブータン連続セミナー）とさせていただきます。】

◆日時：
2026年3月6日（金）15:00～16:30

◆形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）

◆題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（75）
—「Trashi Yangtse Series: 「Epi Welcome to Trashi Yangtse, Bhutan」「Ep2 Sacred Sites of Trashi Yangtse」他（ブータン・2020年）—

◆コメンテーター：
平山雄大
（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

◆協力：
海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会、
LASOLA: Bhutan Restaurant

◆問合せ：
グローバル協力センター講師
平山雄大 hiroyama.takehiro@ocha.ac.jp

要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ▶



3. 途上国研究・国際協力分野海外調査支援（春募集・秋募集）

2025 年度
海外調査支援募集
「途上国研究・国際協力分野調査支援」

応募説明会

日時 **2025 年 5 月 14 日（水）**
12:30 ~ 13:00


場所 **学生センター棟 308 室**

対象 **本学大学院博士課程（前期・後期）在学者**
（休学中の者を除く）

グローバル協カセンターは、2025 年度「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」募集を行います。
本事業は、本学博士前期・後期課程に在籍する学生が行う海外調査のための費用を一部支援するものです。
応募される方は必ずご出席ください。事前申込は不要です。

問合せ先：お茶の水女子大学グローバル協カセンター
TEL:03-5978-5546
E-Mail: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

2024 年度の実施報告は
こちらよりご覧いただけます



2025 年度 **申請受付**
海外調査支援募集
「途上国研究・国際協力分野調査支援」

グローバル協カセンターは、2025 年度「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」募集を行います。
本事業は、本学博士前期・後期課程に在籍する学生が行う海外調査のための費用を一部支援するものです。
募集要項をセンターホームページに掲載しましたのでご確認ください。


内容 **開発途上国、国際協力等に関する分野・テーマ**

対象 **本学大学院博士課程（前期・後期）在籍者**
（休学中の者を除く）

期間 **5 月 14 日（水）～ 6 月 11 日（水）17 時**

※説明会は終了しましたが、参加できなかった方で応募を希望される方はグローバル協カセンターまでお問合せください。

問合せ先：お茶の水女子大学グローバル協カセンター
TEL:03-5978-5546
E-Mail: info-cwed@cc.ocha.ac.jp



詳細はこちら

2025 年度
海外調査支援説明会
～途上国研究・国際協力分野～ **秋募集**

日時 **2025 年 10 月 15 日（水）12:30～13:00**

場所 **学生センター棟308室**

対象：**本学大学院博士課程（前期・後期）在学者**
（休学中の者を除く）

2025 年度「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」秋募集を行います。
本事業は、本学博士前期・後期課程に在籍する学生が行う海外調査のための費用を一部支援するものです。
応募される方は必ずご出席ください。事前申込は不要です。

【問い合わせ】グローバル協カセンター（学生センター棟308室）
Tel:03-5978-5546 Email: info-cwed@cc.ocha.ac.jp



これまでの支援実績は
こちらからご覧ください

2025 年度 **申請受付**
海外調査支援秋募集
「途上国研究・国際協力分野調査支援」

グローバル協カセンターは、2025 年度「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」秋募集を行います。
本事業は、本学博士前期・後期課程に在籍する学生が行う海外調査のための費用を一部支援するものです。
募集要項をセンターホームページに掲載しましたのでご確認ください。


内容 **開発途上国、国際協力等に関する分野・テーマ**

対象 **本学大学院博士課程（前期・後期）在籍者**
（休学中の者を除く）

期間 **10 月 15 日（水）～ 11 月 12 日（水）17 時**

※説明会は終了しましたが、参加できなかった方で応募を希望される方はグローバル協カセンターまでお問合せください。

問合せ先：お茶の水女子大学グローバル協カセンター
TEL:03-5978-5546
E-Mail: info-cwed@cc.ocha.ac.jp




詳細はこちら

4. その他

- ・五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー

五女子大学コンソーシアムスタディツアー

国際協力を学ぶ！長野県駒ヶ根市「国内スタディツアー」募集



お茶の水女子大学は、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学との間で、開発途上国の女子教育などに関する取り組みを共同で実施する「五女子大学コンソーシアム」を締結しています。このたび、五女子大学コンソーシアムでは、日本政府の国際協力機関である JICA（独立行政法人国際協力機構）と連携し、海外協力隊の訓練所を擁し、ネパールにおける国際協力活動に取り組む長野県の駒ヶ根市で、五女子大学合同国内スタディツアーを実施することとなりました。

将来は海外協力隊でボランティアとして途上国に行ってみたい、自治体レベルでどのような国際協力ができるのか知りたい、という問いに答えるスタディツアーです。興味関心のある方は是非ご応募ください。

募集時期：
6月6日（金）～6月27日（金） 17:00


スタディツアー実施時期：
9月1日（月）～3日（水）

場所：長野県駒ヶ根市

対象：学部・博士前期課程在籍学生
(休学中の者を除く)

定員：3名まで


詳細を知りたい方、応募を希望される方は、右記 QR コードから募集要項、応募申請書類をダウンロードしてください。
【お問合せ】グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp（学生センター棟3階308室）



- ・JICA 東京特設インターンシッププログラム

グローバル協力センター

JICA東京特設インターンシッププログラム募集



2024年度JICA東京特設インターンシップの様子

日本政府の国際協力事業実施機関である JICA（独立行政法人国際協力機構）の国内拠点のひとつ JICA 東京（所在地：渋谷区西原2-49-5）より、JICA が独自に実施している特設インターンシッププログラムの参加募集がありました。

JICA 事業への理解を深め、国内の国際協力の現場に直接触れられる貴重な機会です。興味関心のある方は是非ご応募ください。

募集期間：
6月2日（月）～6月27日（金） 17:00

インターンシップ実施時期：
8月21日（木）～8月26日（火）
うち8月23日（土）を除いた5日間


場所：JICA東京

対象：本学学生（休学中の者を除く）

定員：2名まで

※学内選考（書類・面接）を行います。

詳細を知りたい方、応募を希望される方は、右記 QR コードからメールをしてください。募集要項、応募申請書類をお送りします。
【お問合せ】グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp（学生センター棟3階308室）



2. 「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」採択者報告書（本文3. 3参照）

氏名	菅野 萌々寧
所属	人間文化創成科学研究科生活工学共同専攻
テーマ	スリランカ国における住民の生活排水処理と健康状態に関する意識調査

氏名	井上 眞菜
所属	人間文化創成科学研究科生活工学共同専攻
テーマ	モンsoonアジアでの個別排水処理（On-Site Sanitation）による微生物除去性能の評価～季節性や土壌特性との関連～

スリランカ国における住民の生活排水処理と健康状態に関する意識調査

Survey on Residents' Awareness of Domestic Wastewater Treatment and Health Status in Sri Lanka

大学院人間文化創成科学研究科
生活工学共同専攻 M1 菅野 萌々寧

1. 要約

(和文)

アジア諸国では、都市の一部を除いて生活排水は各家庭で個別に処理する方法が主流である。病原体や汚濁指標の負荷が高いトイレ排水は簡易処理の後土壌浸透され、また雑排水は未処理で放流される場合が多い。本調査の対象であるスリランカ国では、約 80%の家庭で水洗トイレが導入されていても、個別処理として本来非水洗トイレ用の「Pit Latrine」が流用されており、水洗トイレ排水が不十分な処理にて環境へ放出していると考えられる。加えて、スリランカ国では地下水を水源とする地域も多く、生活排水が地域の環境水や地下水、さらには住民の健康に影響を及ぼす可能性がある。一方、生活排水や地域の水環境に対する住民の意識を調べた事例は限られている。そこで本調査では、上記のような排水処理状況であるスリランカ国において、個別排水処理の選定権者である住民が適切な選択をするための情報収集として、生活排水処理の実態や住民が持つ水環境への意識、健康状態に関する意識を把握するために、アンケート調査を実施した。調査は南西部の Galle 市および中央部の Kandy 市周辺の観光地・学校・住宅地にて行い、トイレ排水処理、水利用、下痢症、生活雑排水処理を主な質問項目とした。結果として 314 件の回答を収集し、トイレ排水処理に関して、住民は自宅に設置されたタンクの存在を認識している一方で、その設備が「トイレ排水を処理する」機能を持つことを十分理解していない可能性が示唆された。また、下痢症の罹患頻度は低い傾向にあり、「不衛生な食物」や「飲み水」が主な原因として認識されていた。以上の結果を踏まえ、今後は、排水処理に関する住民のリテラシー向上に効果的な情報の内容や提供の方法を、介入研究を通じて明らかにすることを目指す。

(英文)

In many Asian countries, domestic wastewater is primarily treated at the household level, except in urban areas. Toilet wastewater, which contains high loads of pathogens and pollution indicators, is often subjected to simple on-site sanitation before being discharged into the soil, while greywater is typically discharged untreated into the nearby environments. In Sri Lanka, the focus of this survey, approximately 80% of households use pit latrines originally designed for non-flush toilets, even though flush toilets have already been installed. Therefore, it is assumed that flush toilet wastewater may be discharged into the environment with insufficient treatment. Moreover, many communities in Sri Lanka rely on groundwater as their main water source, meaning that residents' domestic

wastewater may potentially affect local water bodies, groundwater quality, and public health. However, only a limited number of studies have examined residents' awareness related to domestic wastewater management and local water environments. To address this issue, this study conducted a questionnaire survey exploring residents' awareness of the actual state of domestic wastewater treatment and their health status to collect information supporting residents, who are the decision-makers of on-site sanitation systems, to make appropriate decisions. The survey was conducted in tourist areas, schools, and residential areas around Galle City in the southwest and Kandy City in the central region. The main questions focused on toilet wastewater treatment, water usage, diarrheal diseases, and domestic wastewater treatment. As a result, 314 responses were collected. Regarding toilet wastewater treatment, while residents were aware of the tanks installed in their houses, the findings suggest they do not fully understand the function of the equipment, which is to treat toilet wastewater. Additionally, the incidence of diarrheal disease over the past years was generally low, while “unsanitary food” and “drinking water” were recognized as major causes. Based on these findings, future research will aim to conduct intervention studies and clarify the content and delivery methods of information that can effectively improve residents' literacy regarding wastewater treatment.

2. 現地調査期間：2025年10月7日～10月23日

3. 調査背景

アジア諸国では、都市の一部を除いて生活排水は各家庭で個別に処理する方法が主流であり、特に生活雑排水は未処理で環境中に放流される場合が多い。そのため、住民の生活圏にある水環境の状態は住民の生活排水の管理状況に大きく影響を受ける。

学士過程においてタイ王国チェンマイ市を対象に実施した先行研究¹では、住民は地域の複数の水辺空間について改善の必要があると認識している一方で、自身の生活排水が与える影響に関しては、家の近くの水路に対してのみ、飲食店など他の要因と同程度に実感している傾向が明らかになった。これは、自分の排水の影響が身近な水辺空間に対してのみ認知されやすい一方、実際にその水が流入する公共性の高い水辺空間に対しては当事者意識が低いことが示唆された。この結果を踏まえ、その他の地域においても環境水の保全や生活排水の管理を考える上で、同様に住民の生活排水に対する意識や日常的な行動を把握する必要があると考えられる。

本調査の対象であるスリランカ国においても、首都の都市部を除けばチェンマイ市と同様に生活排水処理は各家庭の個別処理に依存している。病原体や汚濁指標の負荷が高いトイレ排水は簡易処理の後、また生活雑排水は未処理のまま環境中に排出される場合が多い。タイ王国では水洗トイレ用の「Soakage pit」や「Septic tank」などの簡易的な処理機能をもつタンク設備が普及しているが、スリランカ国ではこれらの普及率は約2%にとどまり、約80%の家庭では水量の多い水洗トイレを導入した後も非水洗トイレ用の設備である「Pit Latrine」

の使用を続けている²。そのため、不十分な処理にてトイレ排水が環境へ放出されていると考えられる。さらに、スリランカ国では地下水を水源とする地域が多い。実際に農村部人口の70%以上が地下水に依存しており、総人口約2200万人のうち約360~380万人(16.4~17.4%)が劣化した地下水を飲用水として利用している³。そのため、十分な処理が行われないまま流出した生活排水が環境水や地下水、さらには住民自身の健康に影響を及ぼす可能性が考えられる。しかし、生活排水処理やその環境・健康への影響に着目して住民の意識を調べた事例は限られており、住民がどのような意識・方法で生活排水処理を行っているのか、また生活排水が健康に影響していると考えているのか、その実態を探る必要がある。

4. 調査目的

本調査では、スリランカ国における住民の①トイレ排水処理方法と管理の実態、②生活用水の水源および使用する水に対する認識、③下痢症罹患状況とその原因に関する認識、④トイレ排水以外の生活雑排水の処理方法と工夫、の4項目に焦点を当て、生活排水処理の実態や住民の健康状態、さらに使用水の健康への影響に対する住民の意識を明らかにすることを目的とする。昨年度にチェンマイ市で実施した先行研究では、住民生活と特定の地域水環境との関連性に着目してデータを収集した。一方、本調査では、住民の生活圏に身近な川や水路といった水環境が存在するか否かに左右されることなく、より幅広い地域の住民の生活行動や意識を把握することを重視した。従って、住民自身の健康状態や水に関する日常的な行動といった住民個人の生活圏の行動・認識に焦点を当て、地域を限定せずに幅広い地域の住民からデータを収集することとした。

5. 調査方法

調査方法は、現地におけるアンケート調査である。お茶の水女子大学人文研究科学研究の倫理審査委員会の承認を得たうえで(承認番号2025-132)、2025年10月10日から10月21日以内に、スリランカ国のGalle市、Kandy市周辺の複数地点を訪れ、無作為に抽出したスリランカ国住民に対してアンケート調査を実施した。本調査は、共同研究を行っているRuhuna大学(スリランカ国、Galle市)と協力して進め、データ収集はRuhuna大学の学生の協力のもとで行った。

(1) 調査対象国・地域について

スリランカ国は人口約2,204万人、面積が約6万5610 km²の島国であり、北海道と比較すると約0.8倍の面積に約4倍の人口の人々が暮らしている^{4,5}。気候は全域が熱帯性気候に分類され、年間平均気温は27°C前後ではほぼ一定しており年間を通じて高温である。降水量の面では、年2回のモンスーンの影響を受け、5月から9月が南西モンスーン期、10月から2月が北東モンスーン期である⁶。この特徴から島の中央高地から南西地域は降水量が多く湿潤であり、島の北半分から東・南東部の海岸沿いの地域は乾燥地帯である。

今回データ収集を行った都市は南西部の Galle 市、中央部の Kandy 市である。両地域の気候情報は下記の表 1 の通りである。両地域ともに降水量が多く温暖湿潤の地域であるが、中央部の高原地域に位置する Kandy 県の方が Galle 県よりも年平均気温・湿度が低く降水量も少ない⁷⁾。

表 1 対象地域の気候情報 (2023 年)⁷⁾

	年平均気温 (°C)	年間降水量 (mm)	日中相対湿度 (%)
Galle 市	27.6	3942.2	82
Katugastota 市 (Kandy 県)	25.7	2264.8	75

民族に関してはシンハラ人が人口の 74.9%、タミル人が 15.3%、スリランカ・ムーア人が 9.3%を占める多民族国家である。シンハラ人の大多数が仏教徒であるため、人口の 70.1%が仏教徒であり、ヒンドゥ教徒が人口の 12.6%、イスラム教徒が 9.7%、キリスト教徒が 7.6%を占めている。公用語はシンハラ語、タミル語、そして両言語をつなぐ連結語の英語の 3 種類である⁴⁾。



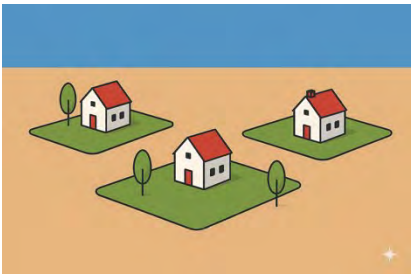
(2) 調査票の内容

調査票の作成およびデータ収集にはオンライン調査プラットフォームである Qualtrics[®]を用いた。質問項目は①属性、②トイレ排水処理、③水使用の実態、④下痢症、⑤生活雑排水処理の 5 つのセクションで構成され、回答する順番も上記の番号の通りである。調査票はまず日本語・英語で作成し、その後、日本語・英語および現地語に精通したスリランカ出身者と、現地の日常会話で使用されるキーワードやニュアンスのすり合わせを行いながら、シンハラ語、タミル語に翻訳したものを使用した。10 月 8 日、9 日に Ruhuna 大学内で予備調査を行い、アンケート内容や表現に関して最終的な修正を行った上で、10 日以降現地調査を開始した。

① 属性

年齢、性別、自宅周辺の住宅密集度、日頃実施している家事に関して回答を収集した。自宅周辺の住宅密集度に関しては、住んでいる地域や都市によらない調査協力者個人の住環境を調べるために属性項目として設定した。その際、以下の表 2 に示すように選択肢には文章とともに近隣住宅の位置関係を表現したイラストを提示し、最も実情に近いものを選択してもらった。

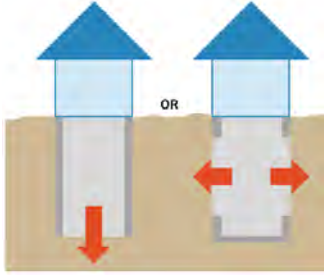

表2 自宅周辺の住宅密集度に関する質問内容

質問内容	あなたの家と近隣住宅の様子を以下のイラストから選んでください。	
回答形式	多肢選択式（単一回答）	
選択肢1	家同士が密集している	
選択肢2	家がまばらに存在している	
選択肢3	周りの家は遠い	

② トイレ排水処理

トイレ排水処理手法の認知度や処理方法を調べるために処理設備の有無、具体的な処理方法に関して回答を収集した。また、以下の表3に示す具体的な排水処理手法の質問に対して、選択肢1「Pit latrine」または 選択肢2の「Septic tank (+ Soakage Pit)」を選択した人にも、タンクからの Sludge の引き抜き頻度やその実施者についても回答を得た。

表3 トイレ排水処理手法に関する質問内容

質問内容	トイレ排水をどのように処理していますか。	
回答形式	多肢選択式（単一回答）	
選択肢1	Pit Latrine【説明】完全にシールドされておらず、底がなかったり、側面が覆われていなかったりする。Sludge が貯まったら埋めて次のタンクを作る。	
選択肢2	Septic tank (+ Soakage Pit)【説明】底と側面が、液体の排出口を除きシールドされている。タンクの中では固体と液体が分離されて、堆積したSludge は定期的に引き抜かれる。	
選択肢3	下水道【説明】下水がパイプで集められて集合処理場でまとめて処理される。	
選択肢4	その他：（自由記述欄）	

③ 水使用の実態

飲用水源、非飲用水源、飲み水の前処理、自宅周辺の地下水の安全性、他の家庭の生活排水の飲み水への影響に関して回答を収集した。地下水の安全性に関する質問は飲用水源または非飲用水源を尋ねる質問において地下水に該当する項目を選択した場合にのみ表示される。回答方法にはVAS（Visual Analog Scale）を用い、「とても危険」を0、「とても安全」を100として直線上の矢印の位置を動かすことで、主観的な評価を101段階で数値化した。

④ 下痢症

直近1年間の罹患頻度、対処法、生活への影響、下痢症の原因に関して回答を収集した。下痢症の原因を尋ねる質問では、不衛生な食べ物、辛味の強い食べ物、飲み水、精神的要因、その他の5項目について、あまり関係はない/少し原因がある/大きな原因であるの3つの選択肢から影響の度合いを尋ねた。

⑤ 生活雑排水処理

属性項目における日常的な家事の回答に基づき、調理または皿洗いを行っている回答者にはキッチン排水について、洗濯またはシャワーを行っている回答者には洗濯・シャワー排水について、それぞれ排水の処理方法および実施している工夫を尋ねた。

(3) データ収集方法と参加者

2025年10月10日から21日にかけて Galle 市、Galle 市近郊の Ahangama 市、Kandy 市の住宅地や観光地に出向きアンケート調査を実施した。回答の入力には持参した電子機器端末を使用し、回答時には Ruhuna 大学に所属するスリランカ人の学生に通訳者として協力してもらい、調査協力者への説明や聞き取りを行った。調査協力者の選定に関しては、休日を中心に人が集まる観光地に出向き無作為に抽出する方法を取った。実際に調査を行った地点を下記の表4、図1、図2に示す。地点 G2、K2 に関しては、同時期に実施されていた土壌調査のサンプリングに同行し、対象家庭を起点として、スノーボールサンプリング（調査に必要なサンプルを集めるために既存の調査協力者が紹介を行うサンプリング手法⁹⁾）によって対象者を集めた。10月10日（金）～10月14日（火）は一橋大学社会科学部の協力を得て、3台の電子端末で同時にデータ収集を行った。

表4 データ収集地域情報

番号	位置	特徴	調査日時
G1	Galle 市	観光地 (Galle Fort)	10/11、12、18、20、21
G2	Ahangama 市	海岸沿いの住宅地	10/10
K1	Kandy 市	Peradeniya 大学工学部	10/13
K2	Kandy 市	住宅地	10/14
K3	Kandy 市	植物園前バス停	10/14
K4	Kandy 市	観光地 (湖、仏歯寺)	10/13、14



図1 調査地点 (Galle 地域)⁸⁾



図2 調査地点 (Kandy 地域)⁸⁾

サンプル数の目安は事前の検定力分析により決定した。属性項目である「自宅周辺の住宅密集度」の3カテゴリーを説明変数として結果を比較することを想定し、対応なしの一元配置分散分析 (one-way ANOVA) の検定力分析を実施した¹¹⁾。効果量は Cohen (1988)¹⁰⁾ の基準から 0.25 とし、検定の実施にはフリーソフト G*Power を用いた。その結果、各群 53、合計で 159 のサンプルサイズが必要であるとわかった。実際に収集したデータ数は合計で

314、各選択肢の回答数も 53 を上回っており、これは目安のサンプル数を満たしていると言える。

6. 調査結果

(1) 回答者の属性

以下の図 3～図 6 に属性項目の結果を示す。回答者の年齢は 20 代を中心とした若年層が多く、男性の回答者数の割合が大きい。自宅周辺の住宅の密集度は家がまばらに点在すると回答した人が約半数を占めており、普段実施する家事に関しては洗濯とシャワーを多くの人が選択する一方で、調理や皿洗いといったキッチンの家事に携わる人数が少ないことがわかった。回答者の年齢属性が若年層に偏った原因としては、住宅地から離れた日中の観光地や Peradeniya 大学内など、若年層や学生が集まりやすい地点でデータ収集を行ったことが影響していると考えられる。

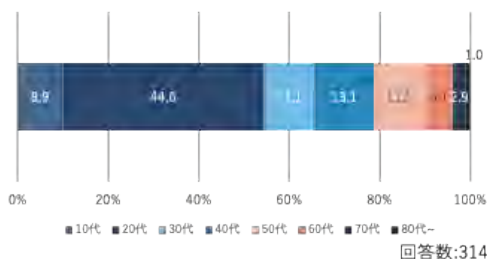


図 3 回答者の年齢



図 4 回答者の性別

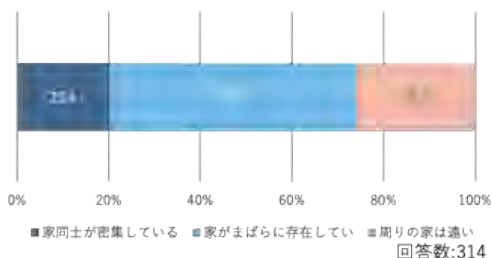


図 5 自宅周辺の住宅密集度

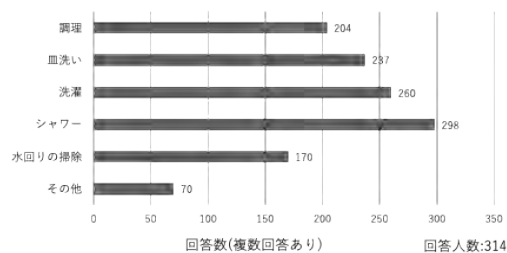


図 6 家事の実施状況

(2) トイレ排水処理

トイレ排水処理方法の有無の質問に関する結果を図 7、具体的な処理方法に関する結果を図 8 に示す。トイレ排水処理を行う設備・方法の有無に関しては「ある」と回答した人は全体の約 4 割であった。その一方で、具体的な処理方法を尋ねた際には、約 7 割が「Pit Latrine」あるいは「Septic tank (+ Soakage Pit)」と回答しており、この 2 つの質問の結果に差異が確認された。この結果から、住民は「自宅にタンクが設置されていること」は理解しているが、このタンクを「トイレ排水の処理設備」と明確に認識していないことが示唆される。

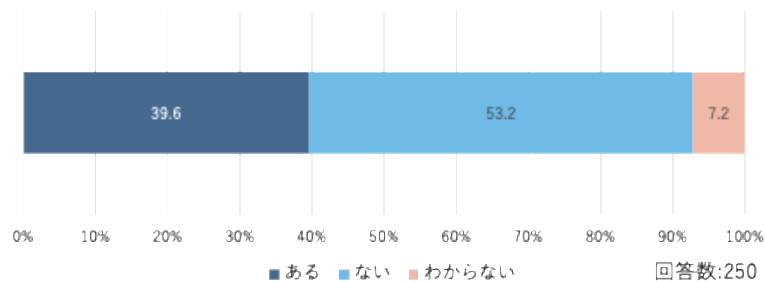


図7 トイレ排水処理方法の有無

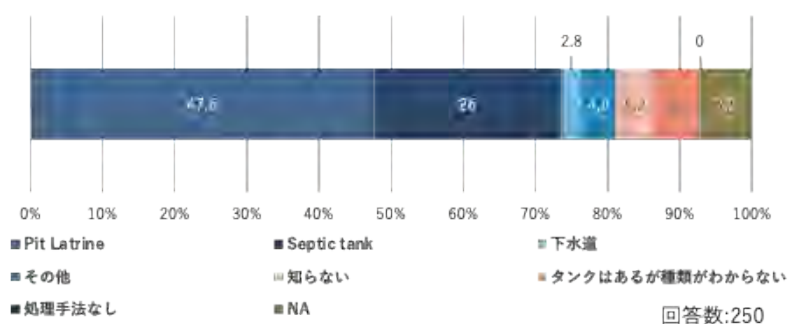


図8 トイレ排水処理手法

また、トイレ排水処理設備の有無に関して「ある」と回答した人の割合が低い点に関して、年齢属性の10代、20代への偏りが影響しているかを調べるため、クロス集計表を作成しカイ二乗検定を実施した。結果としては下記の表5に示すように、年齢による有意差は確認されず（カイ二乗検定、 $\chi^2 = 3.3734$ 、 $p = 0.1851 > 0.05$ ）、むしろ30代以上の回答者群の方が「ない」と回答した人の割合が多いことがわかった。従って、若年層の回答者が多いことは排水処理設備の有無の認知の傾向には影響を及ぼしていないと考えられる。

表5 クロス集計表

	10代～20代	30代以上
ある	52	47
ない	54	79
わからない	9	9

(3) 水使用の実態

生活用水の水源に関する結果を図9に示す。飲み水、飲用以外の水ともに水道水を選択した人が全体の約3分の2にのぼる。その一方で約3分の1の回答者が、自宅の家の庭などに設置された浅い井戸、ポンプで汲み上げる深い井戸を水源として使用していると回答し

ており、地下水も依然として主要な生活用水源となっていることがわかった。この質問において、浅い井戸または深い井戸を水源として回答した 123 人に対して地下水の安全性を尋ねた図 10 に示す。回答の分布が「とても安全」から「どちらとも言えない」の範囲に偏っていることから、住民は地下水を安全と考えていることがわかった。この結果に関連して、回答者の自宅周辺の住宅密集度が地下水の安全性評価に影響を与えているかを確認するために Kruskal-Wallis 検定を行ったが、住宅密集度によって地下水の安全性評価に有意な差は認められなかった (Kruskal-Wallis 検定、 $H(2) = 2.1018$ 、 $p = 0.3496 > 0.05$)。

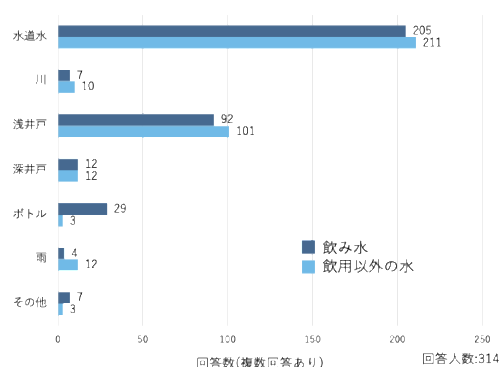


図 9 使用する水の水源

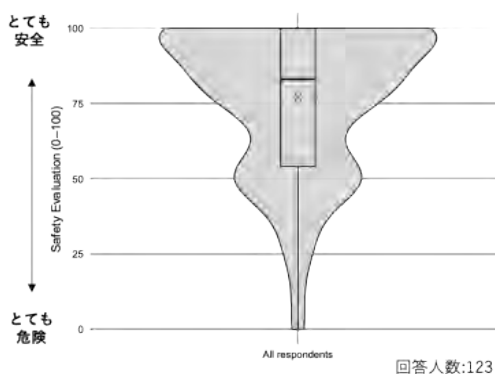


図 10 地下水の安全性

(4) 下痢症

下痢症の罹患頻度に関する結果を図 11 に示す。回答者全体の約 3 分の 2 が直近 1 年間で下痢症の罹患頻度を「一度もない」と回答し、日常的に罹患すると回答した人は存在しなかった。また、「ときどきある」あるいは「しばしばある」と回答した残りの約 3 分の 1 に対して日常生活に下痢症が支障をきたしたかどうかを尋ねたところ、46.2%は「全く支障はない」と回答し、回答者全体の約 6 分の 5 が直近 1 年間で下痢症を罹患していない、あるいは罹患しても日常生活に支障を感じていないことがわかった。

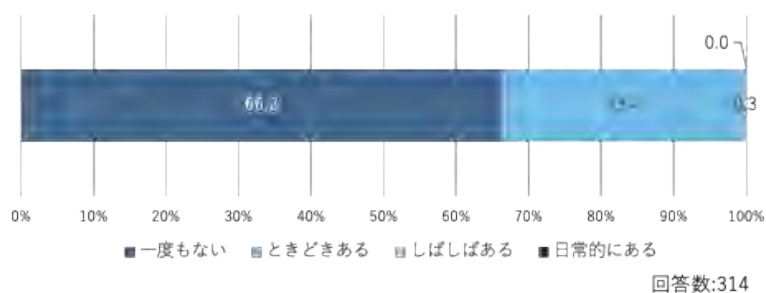


図 11 直近 1 年間で下痢症の罹患頻度

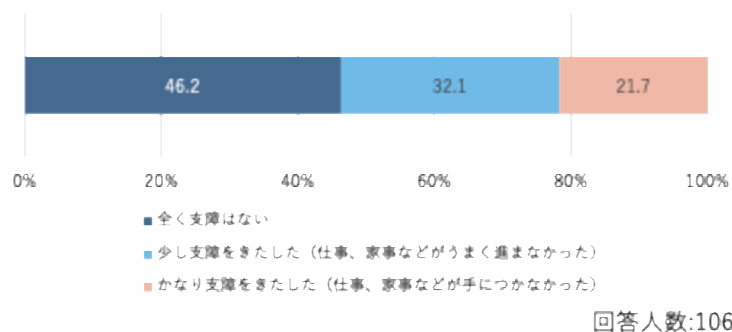


図 12 下痢症の日常生活への影響

また、不衛生な食物、辛味の強い食物、飲み水、精神的要因、その他の 5 項目の下痢症との関連性の認識に関して尋ねた質問への結果を図 13 に示す。不衛生な食物と飲み水に関して約半数が下痢症の大きな原因であると評価した。この 5 項目の結果に差があるかを検証するため Friedman 検定を行ったところ、5 群の間には有意差が確認され (Friedman 検定、 $\chi^2=272.78$ 、 $p<0.001$)、多重比較により「不衛生な食べ物と飲み水」と「辛味の強い食べ物と精神的要因以外の組み合わせ」以外の組み合わせに有意差があることが明らかになった (Wilcoxon 符号付順位検定、 $p<0.001$)。

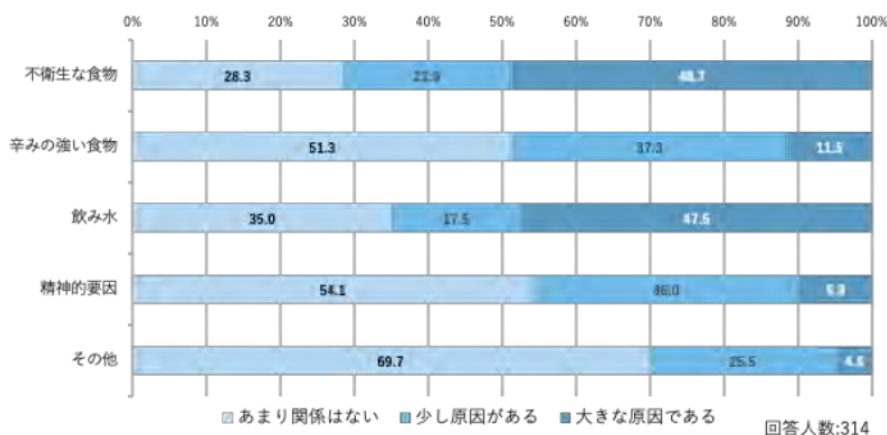


図 13 下痢症の原因としての評価

(5) 生活雑排水処理

キッチン排水、洗濯・シャワー排水の処理方法を尋ねた結果を、それぞれ図 14、図 15 に示す。キッチン排水と洗濯・シャワー排水で同様の傾向が見られ、排水路に放出している人と土壌浸透を行っている人が約 1:1 の割合で存在し、この 2 手法が全体の 9 割弱を占めた。

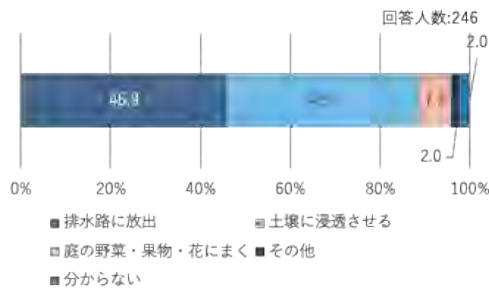


図 14 キッチン排水処理方法

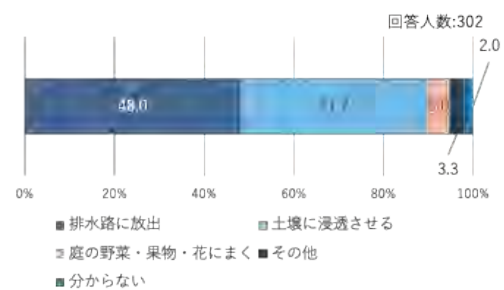


図 15 洗濯・シャワー排水処理方法

7. 考察

以上の結果から、スリランカ国における生活排水処理と住民の健康・衛生認識に関して以下のような考察が得られた。

まず、トイレ排水処理手法に関しては、処理設備の有無尋ねた質問で「ない」「わからない」と回答した住民の中にも、具体的な設備の種類を尋ねると回答できる者が一定数確認された。この回答の不一致は、住民が自宅に設置されているタンク等の存在・種類については認識しているものの、その機能や目的を十分に理解していない可能性を示唆している。結果として、不適切な設備管理につながる懸念がある。

次に、地下水の安全性に関しては、地下水を安全と評価する傾向が見られた。しかし、この質問は地下水を生活用水として利用している住民のみを回答の対象としており、普段から地下水を利用している経験が「地下水は安全である」という認識に影響した可能性がある。そのため、住民全体の傾向とは断定できない。

下痢症罹患に関する質問では、飲み水が不衛生な食物と並んで下痢症の大きな要因と認識されていた。一方で、下痢症の罹患頻度や生活への影響に関しては、日常的に下痢症に罹患するとした回答者はおらず、約6分の5の住民が直近1年間で下痢症を罹患していない、あるいは罹患しても日常生活に支障はないと回答していた。このような下痢症をあまり罹患しないことが「地下水（自分が利用する水）は安全である」という認識の傾向に影響を及ぼした可能性がある。

8. 今後の研究への展望

今回の調査では、スリランカ国における住民の生活排水処理の実態および住民自体の把握状況と住民の健康・衛生認識に焦点を当て、一般的な実施状況が把握できた。また設備や処理方法の存在の認識と「トイレ排水を処理する」という設備が持つ機能の認識が必ずしも一致していないことが示唆された。すなわち、設備が有する効果や目的が住民に十分理解されていない可能性があり、これが不適切な管理に繋がる可能性が考えられた。この点は、今後の研究においてさらに検討すべき課題である。今後の研究では、本調査で収集したデータについて、項目間の関連性をより詳細に分析し、どのような働きかけが住民の排水処理に対

する認識や行動に影響を与えるのかを探る。また、今後の展望としては、住民に対して排水処理行動や処理設備がもたらす効果や利点に関する情報を提示し、その前後での意識・行動変容を測定する介入型調査を実施し、住民の排水リテラシー向上に寄与する効果的な情報内容および提示方法を検討していきたい。

参考文献

1. 菅野萌々寧 (2024) 『タイ王国チェンマイ市住民への生活と水環境に関する意識調査』令和6年度卒業論文。
2. Department of Census and Statistics, Sri Lanka 「Demographic and Health Survey Report – 2016, Chapter 2 – House Hold Population and Housing Characteristics」
<https://www.statistics.gov.lk/Health/StaticInformation/DHS> (2025/11/28 アクセス)
3. Shamsudduha, M., Lee, J., Joseph, G., Bahuguna, A., Wijesundera, S., Sreeshankar S. Nair, Yi R. Hoo, Wang, Q., Sophie C. E. Ayling (2025), “Assessing the water quality hazard and challenges to achieving the freshwater goal in Sri Lanka.” *Scientific Reports 15*: pp.10187.
4. 外務省 「スリランカ民主社会主義共和国 (Democratic Socialist Republic of Sri Lanka) 基礎データ」 https://www.pwri.go.jp/icharm/publication/pdf/pdf_0706/sri_j.pdf (2025/11/28 アクセス)
5. 北海道庁 「住民基本台帳人口・世帯数」
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tuk/900brr/index2.html#1> (2025/11/28 アクセス)
6. 独立行政法人土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター 「スリランカにおける水災害に関する要因分析」 https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/11720380_02.pdf
(2025/12/1 アクセス)
7. Department of Census and Statistics 「Statistical Abstract 2024 CHAPTER I - AREA AND CLIMATE」 <https://www.statistics.gov.lk/abstract2024/chapter1> (2025/12/1 アクセス)
8. Google (n.d.) 「Google Maps location of Sri Lanka」 <https://x.gd/YNQhR> (2025/12/1 アクセス)
9. QuestionPro Survey Software 「スノーボールサンプリング：定義、方法、長所と短所」
<https://x.gd/FySow> (2025/11/28 アクセス)
10. Cohen, J. (1988), *Statistical power analysis for the behavioral sciences (2nd ed.)*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
11. 水本篤、竹内理 (2010) 「効果量と検定力分析入門 —統計的検定を正しく使うために—」『より良い外国語教育研究のための方法 外国語教育メディア学会 (LET)関西支部 メソドロジー研究部会 2010 年度報告論集』、47-73 ページ。

モンスーンアジアでの個別排水処理 (On-Site Sanitation) による
微生物除去性能の評価 ～季節性や土壌特性との関連～

Evaluation of Microbial Removal by On-Site Sanitation in Monsoon Asia
-Relationship with Seasonality and Soil Characteristics-

大学院人間文化創成科学研究科
生活工学共同専攻 M2 井上 眞菜

1. 要約

(和文)

し尿排水処理方法として、途上国や中進国では個別排水処理 (On-Site Sanitation systems ; 以下 OSS) が普及しており、この中でも底のない筒にし尿を流し込み土壌浸透させる型を Pit latrine という。Pit latrine は本来非水洗のトイレに接続されることを想定しているが、昨今はトイレの水洗化が進みトイレ排水量の増加に適応できず病原微生物リスクの抑制が不十分である可能性がある。特に、OSS が多く導入されているモンスーンアジアでは、多量の降雨により OSS の周辺土壌への糞便汚染が拡大する懸念があり、これら気候および地理的要因、土壌浸透を含めて実態を探ることが必要である。本研究では OSS 周辺土壌を採取し、ヒト糞便由来のウイルス指標として Pepper mild mottle virus (PMMoV) および大腸菌ファージ、その他大腸菌等の細菌指標を測定することにより、OSS 周辺土壌による微生物除去性能を評価することを目的とした。調査方法として、OSS の普及するスリランカ国にて家庭用 Pit latrine および似た型である Soakage pit の計 6 カ所を対象とし、その近傍および遠方の箇所にて土壌を採取、各微生物指標の測定を行った。PMMoV に関しては、農業分野で土壌からの検出手法として用いられている ELISA (Enzyme-Linked Immuno-Sorbent Assay) を、OSS 周辺土壌を対象として新たに試みた。その結果、OSS より十分に離れた地点から、OSS 近傍と同レベルの PMMoV が検出されたことから、スリランカ国における ELISA による PMMoV の評価は困難である可能性が高いと示唆された。また、大腸菌ファージの結果により OSS のウイルス除去性能を評価したところ、沿岸部 1 地点における Pit latrine より最大で 3.9 Log のウイルス除去が確認され、特に降雨の少ない時期に周辺土壌によって有意に除去される傾向にあることがわかった。また、大腸菌ファージと大腸菌には相関が見られず、ウイルスと細菌の土壌中の挙動は異なることが示唆された。

(英文)

In many parts of the developing countries, On-Site Sanitation (OSS) is prevalent for treating human waste water. Among them, pit latrines are one of the common types and designed for use with non-flushing toilets. However, with the increase of flush toilets, they are likely incapable of handling the increased wastewater volumes, potentially leading to insufficient control of pathogen risks. The

effectiveness of OSS in reducing pathogen risks through soil infiltration remains unclear, necessitating further investigation. Particularly in monsoon Asia, there is concern that heavy rainfall may expand fecal contamination of soils surrounding OSS. It is, therefore, necessary to investigate the actual conditions, taking climatic and geographic factors into account, including soil infiltration. This study aimed to evaluate the microbial removal performance of OSS by collecting soil samples around them and measuring viral indicators from human feces, including the Pepper Mild Mottle Virus (PMMoV) and coliphages, along with bacterial indicators like *Escherichia coli*. The research was conducted in Sri Lanka, focusing on six sites, including household pit latrines and soakage pits. Soil samples were collected from both nearby and distant locations for microbial analysis. Enzyme-Linked Immuno-Sorbent Assay (ELISA) was implemented to detect PMMoV in soil samples. Results indicated that PMMoV levels in samples collected from areas sufficiently distant from OSSs were similar to those found near OSS, suggesting challenges in accurately assessing PMMoV in Sri Lanka using ELISA. Additionally, coliphage results revealed a maximum virus removal of 3.9 Log from a coastal pit latrine, particularly during drier periods, indicating a significant role of surrounding soil in virus removal. Notably, no correlation was found between coliphages and *E. coli*, suggesting differing behaviors of viruses and bacteria in soil environments.

2. 現地調査期間：2025年10月7日～10月23日

3. 調査背景

WHO とユニセフの報告書¹によると、世界では約7億300万人が安全な水にアクセスできず、36億人が適切な衛生設備（他世帯と共有せず使用され、かつ排泄物が適切に処理される設備）を欠いている。2000年以降多くの水・衛生環境が改善されたものの、未だ適切なサービスを得ることのできない人々のいる現状に対し、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals ; SDGs）では2030年までに「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」²ことを目標に掲げており、水・衛生環境に関して改善が求められている。公衆衛生上、扱いが非常に重要となるヒトの排泄物（し尿）について適切な衛生設備とは、先進国を始めとして日本の都市部で導入されている水洗化トイレおよび下水道による生活空間からの排除と下水処理による適切な処理といえる。一方、途上国や中進国では都市部では上記システムの導入が進みつつあるが、多くの地域が個別排水処理（On-Site Sanitation ; 以下 OSS）に依存している状況である。OSSとは、家庭などから排出されたし尿排水を処理槽内に貯蔵し嫌気環境下で消化処理を行う仕組みであり、家庭で使用される OSS には主に図1の種類が挙げられる。2000年以降、下水道接続人口は増加し続けているものの OSSs の増加率はより高く、2020年には OSS 使用人口が下水道接続を使用する人数を初めて上回った¹。この要因としては、国連の主導により世界的に屋外排泄をなくす取り組みが行われている中、OSS が下水道と比較して費用が安く済み、かつ共同

体でまとめて処理を行うことも可能であるため、特に農村部にて積極的に導入されていることが挙げられる。



図1 OSSの主な種類

このうち、低・中所得国を中心とした約17億人は非水洗式トイレ用のOSSであるPit latrineを使用しており³、これは底がない筒に流入したし尿排水は比較的短い期間のうちに土壌に浸透する仕組みをとっている。また、Septic tankにて処理を行った後Pit latrineにて土壌浸透を行うSoakage pit型も存在する。特にPit latrineは本来非水洗のトイレに接続されることを想定しているが、昨今はトイレの水洗化が進みトイレ排水量の増加に適応できず病原微生物リスクの抑制が不十分である可能性がある。しかし、個々のOSSによって設計や運用状況が異なるため、実際のOSS処理による病原リスク低減効果がどの程度なのかは明らかでない。また、OSS処理に加え土壌浸透による病原リスクの低減効果について不明な点が多く、特に飲み水として井戸水が使用されている地域では地下水の汚染からの水系感染症の要因となる可能性があると考えられる。加えてOSSが比較的多く導入されているモンスーンアジアでは、季節によって卓越風向が反対になることにより雨季や乾季に分かれているのが特徴であるが、特に雨季には多量の降水が発生し、OSSの周辺土壌の状況が変わることで糞便汚染が拡大する報告がある。

以上の背景からもOSSの周辺への汚染に関する評価を土壌浸透も含めて検討する重要であり、かつ、モンスーンアジア地域では土壌浸透によるウイルスの伝搬を、気候を含めた地理的な要因も含めて実態を探ることが必要である。

4. 調査目的

本研究では、モンスーンアジアにおいて運用中のPit latrineおよびSeptic tankが前段に接続されたSoakage pitからの糞便由来病原微生物の流出状況を調査した。実際に稼働するOSS処理槽からのサンプリングが難しいことから、OSS近傍および周辺土壌中の糞便汚染指標を測定することで、OSS周辺土壌による微生物除去性能の評価を目的とした。

除去性能の評価を行うための糞便性微生物指標として、細菌及びウイルスを対象とした。ヒト糞便汚染の指標微生物としては大腸菌が一般的に使われるが、細菌指標である大腸菌はサイズ・構造が大きく異なる病原ウイルスの挙動を示しているかは疑わしい。そこで、人

糞便汚染のウイルス指標として Pepper mild mottle Virus (PMMoV)、および大腸菌を宿主とする大腸菌ファージを測定することで病原ウイルスの挙動を推定することとした。なお先行研究⁴では PMMoV 濃度を定量 PCR にて測定したが、PCR 法に対する共存物質の影響、また定量下限値が高いことから、多くのサンプルで不検出となっていた。そこで、本研究では農業分野で土壌からの PMMoV の検出法として用いられた実績のある ELISA (Enzyme-Linked Immuno-Sorbent Assay) を用いることを検討し、海外調査での実施が可能かどうかについても検討を行った。2024 年度の途上国研究・国際協力分野海外調査支援により 2024 年 10 月に施行した調査では、ELISA を現地 (スリランカ国) で実施することを試みた結果、実際に使用されている家庭用 OSS 近傍土壌から PMMoV を検出・測定することに成功したことから、本調査において調査地点・サンプル数を増やし他指標を含めた微生物除去性能の評価を行うこととした。

5. 調査方法

調査期間内にスリランカ国 Galle 市近郊にて OSS 周辺の土壌を採取し、微生物指標として PMMoV、大腸菌ファージ、大腸菌、大腸菌群を測定した。ただし、期間中に体調不良によりサンプルの測定を終えることができなかつたため、研究室からの費用により別途 12 月に再調査を行なった。その間、Ruhuna 大学において 4℃ にて冷蔵保存を行い、また、ウイルス指標の測定に大きな影響がないことを確認した。

調査は共同研究を行っている Ruhuna 大学 (スリランカ国、Galle 市) と協力して進め、サンプリングは Ruhuna 大学の学生の協力のもと行った。また、微生物指標の測定は Ruhuna 大学の実験室にて行った。加えて本調査とは別に、本年の 3 月、6 月、8 月にサンプリングを行っており、その際の結果もまとめて本文に掲載する。

(1) 調査対象国・地域について

スリランカ国は、人口 2204 万人、国民 1 人当たり GDP が 3474 米ドル⁵であり、中所得国⁶に分類される。熱帯地域に属しているが、面積が約 6 万 5000 m³ と比較的小さいにも関わらず各地域の地理的条件に応じて気候が大きく異なっている。今回調査対象とした Galle 市はスリランカの南部に位置し、年平均気温は 28℃、年平均降水量は 2485.6 mm であり、湿度が約 80% と高温多湿の気候となっている⁷。明確な区切りはないものの乾季と雨季が存在し、1 月から 3 月にかけては特に降水量が少なく、10 月から 12 月には降水量が多い。

衛生施設に関しては、下水道接続は人口のおよそ 2.4% にとどまっており、その整備は主に西部州を中心に整備されている⁸。人口のほとんどは OSS を使用しており、図 2 に示した WHO/UNICEF Joint Monitoring Programme (JMP) によると⁹、図 1 に示すように 2024 年時点でおおよそ 80% の家庭が Pit latrine もしくは Septic tank に接続された Soakage pit にてし尿を処理していた。これに関し、非水洗トイレの接続が想定されている Pit latrine への水洗トイレの接続は不十分な処理を引き起こす可能性があり、さらにスリランカでは飲用水にお

ける地下水のカバー率が約 40%¹⁰ となっていることから、スリランカにおいて OSS 由来の成分による地下水の汚染や、飲用水への影響が考えられる。

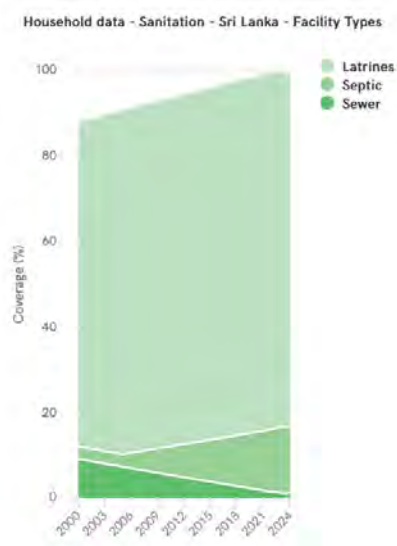


図 2 スリランカ国における衛生施設型別の家庭割合の推移

出典：WHO/UNICEF Joint Monitoring Programme (JMP) : Data household Sanitation Trend Chart.¹¹

(2) 調査対象の OSS について

Galle 市において、内陸部である Hapugala 地区および沿岸部である Ahangama 地区の許可を得た一般家庭にて、実際に運転中の 5 ヶ所の OSS を対象とした。各 OSS の呼称は、Pit latrine を”P”、Septic tank+ Soakage pit の型を”SP”とし、後ろに番号を振ることで区別を行った。調査対象の OSS の位置を図 3、4 に示す。また、調査対象とした各 OSS に関する情報を表 1 に示す。ただし、各 OSS の設置から経過した年月は 2025 年 8 月を起点とする。これら OSS は設置以来一度も汚泥の引き抜きが行われたことはなかった。また、各家庭の事情に伴い、OSS によっては採取のできなかつた月があった。



図 3 内陸部における対象 OSS の位置関係(Hapugala) 図 4 内陸部での対象 OSS の位置関係(Ahangama)

表 1 各 OSS の情報

地点	OSSの型	土壌採取を行った月	設置からの経過	OSSの形状
内陸SP1	Septic tank+Soakage pit	3・6・8・10	10年	一辺2 m、深さ3 m の正四角柱
内陸SP ₁ ²	Septic tank+Soakage pit	3・6・8・10	3年	一辺1.5 m、深さ3 m の正四角柱
内陸P ₃	Pit latrine	8・10	6ヶ月	直径1 m、深さ3 m の円柱
沿岸SP1	Septic tank+Soakage pit	8・10	3ヶ月	直径1 m、深さ2 m の円柱
沿岸P1	Pit latrine	古:3・6 新:8・10	古:60年 新:3ヶ月	直径1.5m、深さ2.5 m の円柱

土壌採取の様子の一例を、図5、6に示す。また、サンプリング日時別の降水量を図7に示す。



図5 沿岸 SP1 にて土壌採取の様子 (10月)



図6 沿岸 P2 にて土壌採取の様子 (10月)

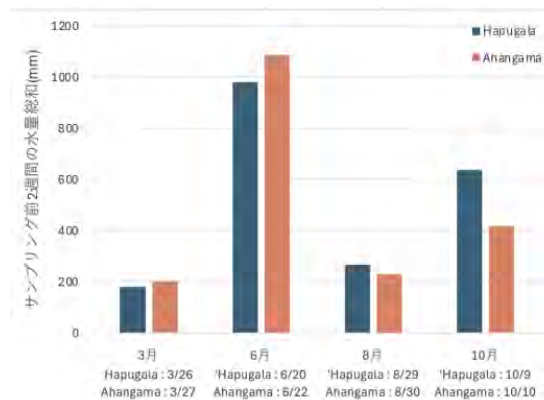


図7 内陸部 Hapugala および沿岸部 Ahangama における各月のサンプリング前 2 週間の降水量和¹²

(3) 土壌の採取方法

各 OSS より 0.2 m 離れた近傍および 2 m 離れた遠方のポイントを 3 方向ずつ選択し、それぞれにおいてハンドオーガー DIK-100A (大起理化工業) を用いて垂直に掘削し土壌を採取した。OSS 近傍を S1~S3、これを OSS から 2m 先に伸ばした遠方のポイントを L1~L3 とする。また、各箇所にて土壌を深さ 0.5 m、1.0 m 地点の 2 種類ずつ採取した。同時に、十分に OSS から離れた地点でも土壌を採取し、これを対照サンプル (以下 Bg とする) とし

た。採取した土壌は 4°C で保管し、微生物指標の測定とは別途に含水率、pH および電気伝導率を測定した。図 8 にサンプリング例を示す。図中の黄点が沿岸 P1 におけるサンプリング箇所である。ただし、沿岸 SP1 における対照サンプルの採取場所は OSS よりも 10 m 以上離れた場所であったため省略する。OSS から 3 方向に採取箇所を選択する際、3 方向の間隔がおよそ 120° ずつであることが望ましいが、沿岸 P1 のように家屋等が OSS 付近にある場合は可能な限り方向の間隔を空けるようにして対応した。

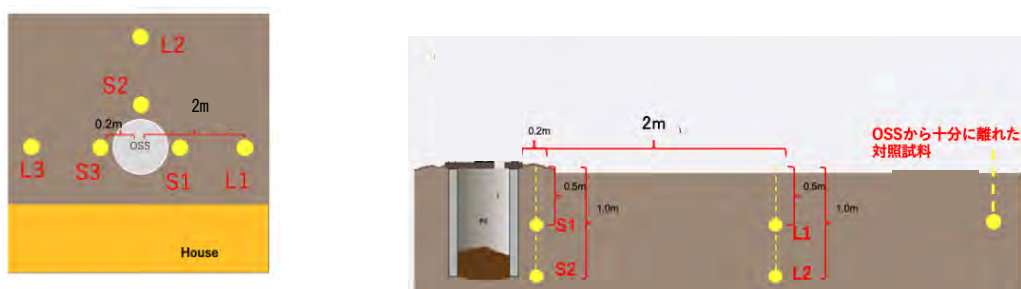


図 8 内陸 SP1 におけるサンプリング箇所（赤枠は Soakage pit の設置範囲を示す）

（４）土壌試料からの微生物抽出方法

Claudia Rocco¹²らの手法をもとに、土壌の採取部位によるばらつきを軽減させるため、採取した土壌から均一に土壌をとり混合させることでコンポジットサンプルを作成した。また、ウイルス指標に関しては、1つのコンポジットサンプルにつき3回の抽出を行い、それぞれのサンプルごとに測定を行うことで、十分な測定結果を得た。以下に測定方法を示す。

- ① 各土壌試料を平坦に押し伸ばした後、おおよそ5等分した。各等分より土壌2gずつはかりにて計測し、計10gの土壌を採取した。
- ② 脱イオン水2mLを滴下し、よく混合した。これをコンポジットサンプルとした。
- ③ 作成したコンポジットサンプルと脱イオン水を19:6の比率で遠沈管に入れた。
- ④ 手振りによる攪拌を3分間行った。
- ⑤ これを微生物抽出液とし、4°Cにて保管した。

（５）微生物抽出液の PMMoV 測定方法

以下に PMMoV の測定方法を示す。手順は DAS-ELISA キット（日本植物防疫協会製）に従って行った。また、農研機構遺伝資源ジーンバンクより供与いただいた PMMoV 株をポジティブ・コントロールとして使用した。この際、PMMoV のポジティブ・コントロール濃度は事前に行った定量 PCR により RNA 濃度を既知のものとし、これを段階希釈したものを ELISA に供することで作成した検量線を用い、濃度未知試料の定量を行った。

- ① （４）にて作成した微生物抽出液を遠心機にて 2000 g で 10 分間遠心にかけた。
- ② ELISA 用 96well プレート（以下プレート）の各 well に希釈済みコーティング液（ウ

サギ γ -グロブリン、0.05% NaN_3) 200 μL を入れ、密閉したのち 37 $^\circ\text{C}$ で 3 時間静置した。

- ③ PBS-T (pH7.4 リン酸緩衝生理食塩水液、0.05% Tween20) を用いてプレートを 3~4 回洗浄した。
- ④ 遠心済み抽出液の上澄みを 10 倍希釈し、プレートの各 well に 200 μL ずつ入れ、密閉したのち 37 $^\circ\text{C}$ で 2 時間静置した。
- ⑤ PBS-T を用いてプレートを 3~4 回洗浄した。
- ⑥ プレートの各 well に希釈済みコンジュゲート液 (アルカリフォスファターゼ標識ウサギ γ -グロブリン、1%牛血清アルブミン、0.05% NaN_3) 200 μL を入れ、密閉したのち 37 $^\circ\text{C}$ で 3~4 時間静置した。
- ⑦ PBS-T を用いてプレートを 3~4 回洗浄した。
- ⑧ 10% ジエタノールアミン溶液に p-ニトロフェニルリン酸二ナトリウム (1 mg/mL) を溶かしたものを基質溶液とし、プレートの各 well に入れ密閉したのち、アルミホイルに包み 30 分間静置した。
- ⑨ 波長 405nm で吸光度測定を行った。

(6) 大腸菌ファージの測定

(4) にて作成した微生物抽出液を遠心機にて 2000 g で 10 分間遠心にかけて、上澄みを採取した。その後、宿主菌として TSB (Tryptic soy Broth, Difco 社製) 中で培養した WG5 を用い、TSA (Tryptic soy Agar, Difco 社製) 培地にて Plaque Assay により大腸菌ファージの測定を行った。

(7) 大腸菌・大腸菌群の測定

(4) にて作成した微生物抽出液を必要に応じて段階希釈を行い、1 mL ずつシャーレに注いだ。その後、大腸菌・大腸菌群の測定培地として Chromocult (Millipore 社) を規定通りに調製し、各シャーレに 10mL ずつ注いだのち、37 $^\circ\text{C}$ で 1 晩培養した。紫色を大腸菌、赤色を大腸菌でない大腸菌群として計測した。

6. 結果と考察

(1) PMMoV の測定結果

10 月に採取した土壌のうち、OSS 近傍から採取した試料 (S1~S3) および OSS から十分に離れた地点で採取した対照試料 (Bg) の PMMoV の測定結果を図 9 に示す。図 9 の結果より、PMMoV は対照サンプルから OSS 近傍のサンプルと同レベルの高い濃度で検出されたことがわかった。このことから、特にスリランカの土壌中において PMMoV を糞便汚染指標として扱うことが難しいと考えられる。その理由として、スリランカ国においてはトウガラシ属の植物および、それらにまつわる製品が多く存在・流通しており、土壌においても

糞便汚染関係なく存在している可能性が挙げられる。しかし、本研究により海外調査において ELISA を適切に実行することができたため、ELISA を用いて PMMoV とは異なる別の指標を測定するなど、今後の展望を見出すことができる。

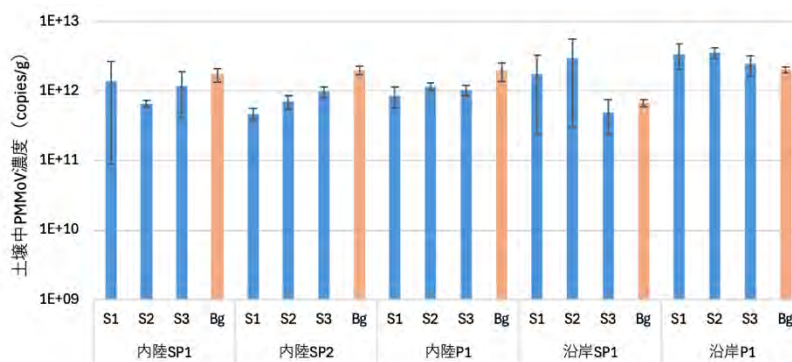


図9 OSS 近傍試料および対照試料での深さ 0.5 m の土壌における PMMoV の測定結果
エラーバーは 3 回行った抽出での測定値からの標準偏差を示す

(2) 大腸菌ファージの測定結果

10 月に採取した深さ 0.5 m の土壌中の PMMoV 濃度を以下図 10 に示す。図 10 より、10 月においてはほとんどの地点にて大腸菌ファージが検出された。同方向ごとの近傍および遠方の試料に対し、対応のない *t* 検定を行ったところ、一部の試料間にて有意な差が見られた。

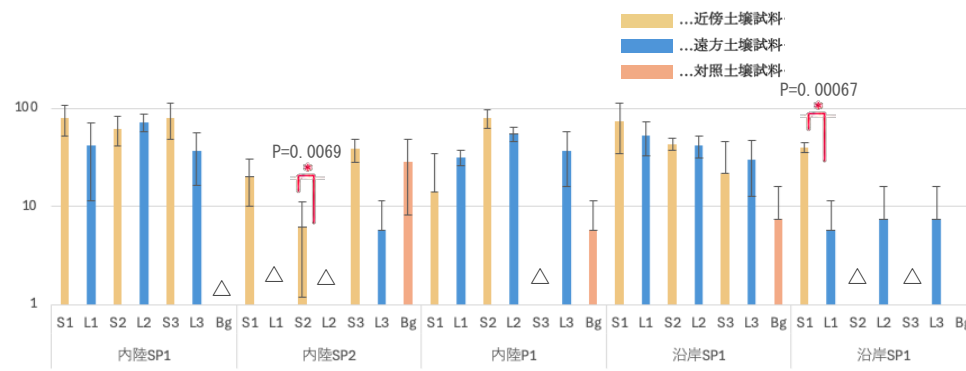


図 10 10 月に採取した深さ 0.5 m の土壌における大腸菌ファージの測定結果
△は定量下限 (5PFU/g) 以下の試料を示す。エラーバーは 3 回行った抽出での測定値からの標準偏差を示す。有意差のあるものは * で示した (有意水準を 1 % とする)。

(3) 大腸菌ファージによる OSS 周辺土壌による微生物除去性能評価

各 OSS において、OSS 近傍 3 地点 (S1~S3) と、OSS から 2m のセットバックのある遠方 3 地点 (L1~L3) の土壌からそれぞれ作成したコンポジットサンプルより、3 回の抽出・大腸菌ファージの測定を行なった。それら測定値を利用して対応のない *t* 検定を行い、ボンフェローニ補正を行うことで多重比較を行った。以下表 2 にその結果を示す。表 2 より、内

陸 SP2、沿岸 P1 の一部のサンプリング時において近傍と遠方の濃度に差のある傾向があった。

内陸 SP2 では、10 月の土壌 (1.0 m) において、OSS 近傍では高濃度で検出された一方、遠方のポイントではほとんど検出されておらず、ウイルスが土壌の 2 m のセットバックにより減少した傾向にあった。この OSS はガーデニングの行われる庭に設置されており、土壌の有機分が豊富で水捌けがよく、他地点と比較して含水率が約 15% と突出して低い。ウイルスは一般に負電荷を帯びており、静電相互作用等から以上のような特性を持つ土壌におけるウイルスの吸着性が高い可能性がある。10 月ほど降水量が多くないにもかかわらず減少傾向の見られない月もあったが、それ以前までの連続した高い降水負荷が要因の一つであると考えられる。

沿岸 P1 では、切り替わる前の古い Pit latrine の際、3 月の土壌 (0.5 m) において近傍、遠方に有意差があり、深さ 1.0 m においてはその傾向が見られた。6 月の土壌 (深さ 0.5 m) においてもやや差のある傾向があった。沿岸 P1 では、他地点と比較して、最も 2m のセットバックによる除去が認められた地点である。特に降水量の少ない 3 月においては、近傍 2 箇所の深さ 0.5 m 地点より $10^3 \sim 4$ PFU/g ほどの非常に高濃度の大腸菌ファージが検出されており、これは、沿岸 P1 が設置から 60 年という長い年月を経ていることから、土壌に糞便由来のウイルスが蓄積されているためであると考えられる。ならびに、降雨による土壌水分の希釈が行われず、また、ウイルスの流出があまり起きなかったことが要因として挙げられる。深さ 1.0 m においても同様に近傍での大腸菌ファージ濃度が高かったものの、深さ 0.5 m のサンプルよりも濃度が低い理由として、Pit latrine の側面に滲出穴がついており、それが深さ 0.5 m 近くにあったことだと推測される。また、S2 においては濃度がほとんど定量下限値レベルであることから、その滲出穴は S1、S3 の近くに存在するが S2 の近くには存在しないことが考えられる。近傍に大量のウイルスが蓄積していたにも関わらず 6 月には有意な傾向がはっきりとは現れなくなっており、かつ近傍と遠方で濃度が低くも検出率が増加した理由として、6 月の降水によってウイルスの流出が起きていること、および降水により土壌中のウイルスが希釈されていることが挙げられる。

また、ウイルスの除去率 R を以下のように定義し算出した。ただし、S1 ~S3、L1~L3、対象サンプルの大腸菌ファージ測定値平均を、それぞれ $V_{S1} \sim V_{S3}$ 、 $V_{L1} \sim V_{L3}$ 、 V_{Bg} とした。

$$R = \text{Log}(V_{L1} + V_{L2} + V_{L3} - 3V_{Bg}) / (V_{S1} + V_{S2} + V_{S3} - 3V_{Bg}) \quad (6.1)$$

式 (6.1) により、沿岸 P1 におけるウイルスの除去率は最大で 3.9Log (3 月採取、深さ 0.5 m) であった。

内陸 SP2、沿岸 P1 以外の地点では 2m のセットバックにより有意に大腸菌ファージが除去される結果は得られなかった。しかし、OSS 近傍土壌の大腸菌ファージ濃度が対照サンプルと同レベルに低い場合、また、対照サンプルから他試料と比較してウイルス濃度が高く

検出されている場合には両者の差が検出されにくいと考えられる。したがって、これらの地点において有意差が認められなかったことは、土壌によるウイルス除去が生じていないことを必ずしも示すものではない。

表2 各地点における OSS 近傍と遠方箇所間での大腸菌ファージ濃度の多重比較結果
斜線は未実施、” NaN” は比較対象の少なくとも一方が定量下限以下であることを示す

内陸SP1		補正済P値			
比較対象		3月	6月	8月	10月
深さ0.5m	S1 vs L1	NaN	0.49	1.00	1.00
	S1 vs L2	1.00	0.77	1.00	1.00
	S1 vs L3	NaN	0.49	1.00	1.00
	S2 vs L1	NaN	1.00	0.17	1.00
	S2 vs L2	1.00	1.00	0.20	1.00
	S2 vs L3	NaN	1.00	0.17	1.00
	S3 vs L1	1.00	NaN	1.00	1.00
	S3 vs L2	1.00	1.00	NaN	1.00
	S3 vs L3	1.00	NaN	1.00	1.00
深さ1.0m	S1 vs L1	NaN	1.00	0.88	1.00
	S1 vs L2	NaN	0.64	1.00	1.00
	S1 vs L3	NaN	1.00	0.93	1.00
	S2 vs L1	NaN	1.00	1.00	1.00
	S2 vs L2	NaN	0.64	1.00	1.00
	S2 vs L3	NaN	1.00	1.00	1.00
	S3 vs L1	NaN	1.00	NaN	1.00
	S3 vs L2	NaN	0.99	1.00	1.00
	S3 vs L3	NaN	1.00	1.00	1.00

内陸SP2		補正済P値			
比較対象		3月	6月	8月	10月
深さ0.5m	S1 vs L1	NaN	1.00	1.00	1.00
	S1 vs L2	NaN	1.00	0.76	1.00
	S1 vs L3	NaN	1.00	1.00	1.00
	S2 vs L1	NaN	1.00	1.00	NaN
	S2 vs L2	NaN	1.00	0.86	NaN
	S2 vs L3	NaN	1.00	1.00	NaN
	S3 vs L1	NaN	1.00	1.00	1.00
	S3 vs L2	NaN	1.00	0.86	1.00
	S3 vs L3	NaN	1.00	1.00	1.00
深さ1.0m	S1 vs L1	NaN	1.00	1.00	0.019
	S1 vs L2	NaN	1.00	1.00	0.019
	S1 vs L3	NaN	1.00	1.00	0.019
	S2 vs L1	NaN	1.00	1.00	0.023
	S2 vs L2	NaN	1.00	1.00	0.023
	S2 vs L3	NaN	1.00	1.00	0.023
	S3 vs L1	NaN	1.00	1.00	NaN
	S3 vs L2	NaN	1.00	1.00	NaN
	S3 vs L3	NaN	1.00	1.00	NaN

内陸P1		補正済P値			
比較対象		3月	6月	8月	10月
深さ0.5m	S1 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S1 vs L2	/	/	1.00	0.33
	S1 vs L3	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L1	/	/	1.00	0.27
	S2 vs L2	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L3	/	/	1.00	0.47
	S3 vs L1	/	/	1.00	0.15
	S3 vs L2	/	/	1.00	0.091
	S3 vs L3	/	/	1.00	1.00
深さ1.0m	S1 vs L1	/	/	1.00	0.91
	S1 vs L2	/	/	1.00	0.78
	S1 vs L3	/	/	NaN	0.59
	S2 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L2	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L3	/	/	NaN	1.00
	S3 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L2	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L3	/	/	0.28	1.00

沿岸SP1		補正済P値			
比較対象		3月	6月	8月	10月
深さ0.5m	S1 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S1 vs L2	/	/	1.00	1.00
	S1 vs L3	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L2	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L3	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L2	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L3	/	/	1.00	1.00
深さ1.0m	S1 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S1 vs L2	/	/	1.00	1.00
	S1 vs L3	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L1	/	/	NaN	1.00
	S2 vs L2	/	/	NaN	1.00
	S2 vs L3	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L1	/	/	NaN	1.00
	S3 vs L2	/	/	NaN	1.00
	S3 vs L3	/	/	1.00	1.00

沿岸P1		補正済P値			
比較対象		3月	6月	8月	10月
深さ0.5m	S1 vs L1	0.0044	1.00	/	/
	S1 vs L2	0.0044	1.00	/	/
	S1 vs L3	0.0044	1.00	/	/
	S2 vs L1	NaN	0.064	/	/
	S2 vs L2	NaN	0.030	/	/
	S2 vs L3	NaN	0.064	/	/
	S3 vs L1	0.0038	0.31	/	/
	S3 vs L2	0.0038	0.43	/	/
	S3 vs L3	0.0038	0.22	/	/
深さ1.0m	S1 vs L1	0.019	0.62	/	/
	S1 vs L2	0.019	1.00	/	/
	S1 vs L3	0.019	1.00	/	/
	S2 vs L1	1.00	1.00	/	/
	S2 vs L2	1.00	0.53	/	/
	S2 vs L3	1.00	0.51	/	/
	S3 vs L1	0.15	0.58	/	/
	S3 vs L2	0.15	0.25	/	/
	S3 vs L3	0.15	0.26	/	/

沿岸P3		補正済P値			
比較対象		3月	6月	8月	10月
深さ0.5m	S1 vs L1	/	/	1.00	0.009
	S1 vs L2	/	/	1.00	0.028
	S1 vs L3	/	/	1.00	0.028
	S2 vs L1	/	/	0.38	1.00
	S2 vs L2	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L3	/	/	0.048	1.00
	S3 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L2	/	/	0.32	1.00
	S3 vs L3	/	/	1.00	1.00
深さ1.0m	S1 vs L1	/	/	0.16	1.00
	S1 vs L2	/	/	0.24	NaN
	S1 vs L3	/	/	0.24	1.00
	S2 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S2 vs L2	/	/	1.00	NaN
	S2 vs L3	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L1	/	/	1.00	1.00
	S3 vs L2	/	/	1.00	NaN
	S3 vs L3	/	/	1.00	1.00

(4) 大腸菌ファージと大腸菌の関係

以下図 11 に大腸菌ファージと大腸菌の相関図を示す。相関係数が-0.0070 であり、これら指標間において相関関係は見られなかった。また、地点別においても相関は見られず、OSS 周辺土壌中でのウイルスと細菌の挙動は必ずしも同様にないことが示唆された。

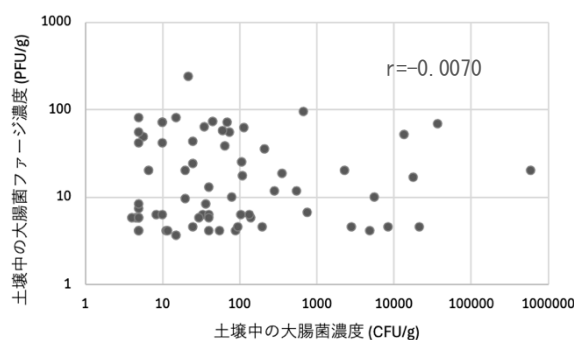


図 11 各地点での深さ 0.5 m、1.0 m の土壌における含水率の測定結果
定量下限値 (5 PFU/g または 5 CFU/g) を下回る試料を除く

7. 今後の研究への展望

今回の調査にて PMMoV のポジティブ・コントロールを用い、ELISA による PMMoV 定量を試みたものの、スリランカ国の土壌中において PMMoV の濃度の測定によりヒト由来の糞便汚染を推定することは難しいと考えられた。しかし、本研究により途上国を対象とした海外調査において ELISA を実行することができたため、ELISA を用いて PMMoV とは異なる別の指標を測定する、もしくは別の手法で当該指標の測定を行うなど、今後の展望を見出すことができる。大腸菌ファージにより OSS の微生物除去性能の評価を行ったところ、降水量の少ない 3 月の沿岸部の Pit latrine において最大で 3.9 Log のウイルス除去がなされていたことを確認した。同時に雨季には大量の降水により、土壌中のウイルスの流出が拡大している可能性が考えられた。大腸菌ファージと大腸菌の相関を調べたところ、両指標に相関は見られず、OSS 周辺土壌中でのウイルスと細菌の挙動は必ずしも同様にない可能性が示唆された。以上の結果より、細菌・ウイルスは並行して測定を行う必要があると考えられる。

本調査によって、サンプリング前の降水量等の気候が同じ様相を呈していたとしても、その時々によりウイルスの土壌中での挙動は大きく変化する可能性が判明したことから、今後細かいスパンおよび年単位での調査を行うことにより、OSS 微生物処理実態の解明に近づくと考えられる。

注

1. WHO, JMP, UNICEF (2021) : PROGRESS ON HOUSEHOLD DRINKING WATER, SANITATION AND HYGIENE 2000-2020 FIVE YEARS INTO THE SDGs
https://data.unicef.org/wp-content/uploads/2022/01/jmp-2021-wash-households_3.pdf

2. 外務省国際協力局 「持続可能な開発目標 (SDGs) と日本の取組」 (2026/1/20 アクセス)
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/SDGs_pamphlet.pdf
3. Graham, J. P., Polizzotto, M.L (2013) “Pit latrines and their impacts on groundwater quality: a systematic review.” *Environmental Health Perspect*, 121, 521–530.
<https://doi.org/10.1289/ehp.1206028>.
4. 井西一葉 (2023) 途上国における個別排水処理(オンサイトサニテーション) の周辺土壌からのウイルス抽出方法の検討 令和 5 年度お茶の水女子大学卒業論文
5. 外務省 スリランカ民主社会主義共和国基礎データ (2026/1/20 アクセス)
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/srilanka/data.html>
6. JICA 主要国所得階層別分類 (国連及び世銀の分類による。) (2026/1/20 アクセス)
https://www.jica.go.jp/activities/schemes/finance_co/about/standard/class2012.html
7. time and date 「Climate & Weather Averages in Galle, Sri Lanka」 (2026/1/20 アクセス)
<https://www.timeanddate.com/weather/sri-lanka/galle/climate>
8. JICA スリランカ国 下水セクター開発計画策定 プロジェクト(第 I 期) (2017)
https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/12307880_03.pdf (2026/1/20 アクセス)
9. WHO/UNICEF Joint Monitoring Programme (JMP) Data household Sanitation Trend Chart
<https://washdata.org/data> (2026/1/20 アクセス)
10. Suresh Indika, Yuansong Wei, et al (2022) “Groundwater-Based Drinking Water Supply in Sri Lanka: Status and Perspectives” *Water* 2022, 14(9), 1428
<https://www.mdpi.com/2073-4441/14/9/1428>
11. Climate Data Store ERA5 hourly data on single levels from 1940 to present (2026/1/20 アクセス)
<https://cds.climate.copernicus.eu/datasets/reanalysis-era5-single-levels?tab=download>
12. Claudia Rocco, Ida Duro, et al (2016) “Composite vs. discrete soil sampling in assessing soil pollution of agricultural sites affected by solid waste disposal” *Journal of Geochemical Exploration*, 170, 30-38

参考文献

- Sri Lanka Demographic and Health Survey 2016 (2025/1/3 アクセス)
<https://www.statistics.gov.lk/Health/StaticInformation/DHS#gsc.tab=0>
- 柴尾映里奈 (2022) 「オンサイトサニテーション由来の病原指標微生物の状況調査 ～スリランカ・ベトナムの事例～」 令和 4 年度お茶の水女子大学卒業論文

令和7（2025）年度 年次報告書

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

2026年3月

発行：お茶の水女子大学グローバル協力センター

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax: 03-5978-5546

E-mail: info-cwed@cc.ocha.ac.jp
